

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第119集

むこう ばる だい いち い せき  
向 原 第 1 遺 跡

Mukoubaru 1 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書24

2 0 0 6

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第119集

むこう ばる だい いち い せき  
向 原 第 1 遺 跡

Mukoubaru 1 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書24

2 0 0 6

宮崎県埋蔵文化財センター



向原第1遺跡遠景



SA 1 炭化材出土状況



SA 5 検出状況

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した児湯郡新富町大字新田字綿打所在の向原第1遺跡は平成13年度から平成14年度にかけて発掘調査を行ったものです。調査によって、主に弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡をはじめ、縄文時代早期や後期旧石器時代の遺構や遺物も確認することができました。特に、焼失した竪穴住居跡からはフローテーション法によって炭化米・ドングリ・モモなどが検出され、当時の食生活を考える上で貴重な成果といえます。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚く御礼申し上げます。

平成18年2月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 宮園 淳一

# 例 言

1. 本書は、平成13年度および平成14年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団から委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した。  
なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
3. 現地での実測等の記録は、戊亥浩志、日高敬子、南中道隆、小山博、高橋浩子、藤木聡、成相景子、小宇都あずさ、金丸史絵が行ったほか発掘作業員が補助した。
4. 本書使用の遺物実測図は、戊亥、大野義人が行ったほか整理作業員が補助した。
5. 本書に使用した実測図等の浄書は、戊亥、日高が行ったほか整理作業員が補助した。
6. 現地での写真撮影は戊亥、日高が行い、出土遺物写真は今塩屋毅行が撮影し、戊亥が補助した。
7. 測量・空中写真・自然科学分析等は次の機関に委託した。  
地形測量：有限会社 服部測量設計  
空中写真：九州航空株式会社  
C14年代測定・植物珪酸体分析・樹種同定：株式会社 古環境研究所
8. 本書に使用した略記号は次のとおりである。  
SA 堅穴住居跡 SC 土坑 SE 溝状遺構 SH ビット SI 集石遺構  
SP 炉穴  
K-Ah 鬼界アカホヤ Kr-Kb 小林降下軽石 AT 始良Tn  
Kr-Aw アワオコシ Kr-Iw イワオコシ
9. 本書で使用した位置図及び周辺遺跡分布図は国土地理院発行の25,000分の1図をもとに、遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所より提供の1,000分の1図をもとに作成した。
10. 本書で用いた標高は海拔絶対高であり、方位は座標北（G. N.）を基本とし、一部に磁北（M. N.）を使用した。本地域における真北との偏差は約6°である。
11. 本書で使用した国土座標は、旧平面直角座標系Ⅱ（日本測地系）による。
12. 土器の色調及び土層については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
13. 出土遺物の石材については、宮崎県埋蔵文化財センターの赤崎広志が同定を行った。
14. 本書の執筆は金丸琴路の協力を得て、戊亥が担当し、長津宗重が編集した。
15. 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

# 凡 例

1 挿図の縮尺は次のとおりとする。

遺構分布図・・・1/500

遺構実測図・・・1/20・1/40

縄文土器実測図・・・1/3

弥生土器、土師器、須恵器実測図・・・1/4

石器実測図・・・2/3・1/2・1/4

鉄器実測図・・・2/3

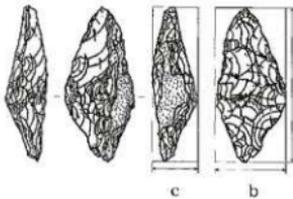
土層断面図・・・1/60

以上を基本とし、以外のもも含めて挿図の中にその縮尺を明示した。

2 土器観察表及び石器計測表の計測値は、下記の計測方法に拠った。単位はcm、gである。

3 石器実測図の中の記号・表示は以下のものを示す。

- ・石器の節理面は一点鎖線で表示する。
- ・「折れ」の状態が確認された石器には、欠損部分に \ / の記号を記す。
- ・敲打痕、磨痕は下記の要領で記す。

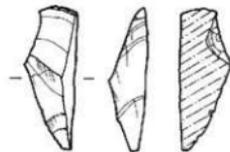


石器の計測方法

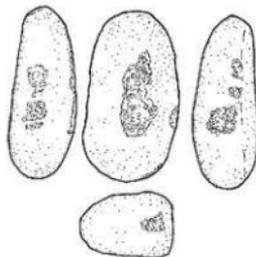
a = 長さ

b = 幅

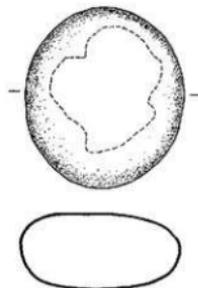
c = 厚さ



節理面



敲打痕



磨痕

# 目 次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第II章	遺跡の環境	2
第III章	調査の経過と方針	
第1節	確認調査の概要	4
第2節	発掘調査の方法	6
第3節	整理作業及び報告書作成	8
第IV章	調査の記録	
第1節	基本層序	12
第2節	後期旧石器時代の遺構と遺物	15
(1)	XI層 (MB2) 出土の遺物	15
(2)	VII b～c層 (Kr-Kb) 出土の遺構と遺物	16
第3節	縄文時代早期の遺構と遺物	20
(1)	遺構	
①	集石遺構	21
②	炉穴	24
③	土坑	27
(2)	遺物	28
第4節	縄文時代晩期の土器	33
第5節	Ⅲ層出土の石器	36
第6節	弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	38
(1)	遺構	
	竪穴住居跡	
	SA1	39
	SA2	44
	SA3	45
	SA4	54
	SA5	54
	SA6	57
	土坑	60
(2)	遺物	61
第7節	その他の時代の遺物	63
第V章	自然科学分析	
第1節	目的	72
第2節	樹種同定	72
第3節	炭化種実同定	73
第4節	植物珪酸体分析	74
第5節	放射性炭素年代測定	74
第VI章	まとめ	80

## 挿図目次

図1	遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	3	図34	SA 1 遺構実測図	42
図2	調査区域図	5	図35	SA 1 出土遺物実測図①	42
図3	確認調査トレンチ配置図	5	図36	SA 1 出土遺物実測図②	43
図4	グリッド配置図	6	図37	SA 2 遺構実測図	44
図5	フローテーション装置の模式図	9	図38	SA 2 出土遺物実測図	44
図6	基本土層模式図	13	図39	SA 3 フローテーション検出状況図	47
図7	土層断面セクションポイント配置図	13	図40	SA 3 遺構実測図	48
図8	土層断面図	14	図41	SA 3 出土遺物実測図①	49
図9	MB 2 出土遺物実測図	15	図42	SA 3 出土遺物実測図②	50
図10	MB 2 出土遺物分布図	15	図43	SA 3 出土遺物実測図③	51
図11	Kr-Kb検出礫群分布図	16	図44	SA 3 出土遺物実測図④	52
図12	Kr-Kb出土遺物分布図	17	図45	SA 3 出土遺物実測図⑤	53
図13	Kr-Kb出土遺物実測図①	17	図46	SA 4 遺構実測図	53
図14	Kr-Kb出土遺物実測図②	18	図47	SA 5 における分析委託・ フローテーション検出状況図	55
図15	Kr-Kb出土石器・礫分布図	19	図48	SA 5 遺構実測図	56
図16	縄文時代早期遺構分布図	20	図49	SA 5 出土遺物実測図	56
図17	集石遺構実測図①	21	図50	SA 6 植物珪酸体サンプリング地点	58
図18	集石遺構実測図②	22	図51	SA 6 における フローテーション検出状況図	58
図19	集石遺構実測図③	23	図52	SA 6 遺構実測図	59
図20	炉穴実測図	25	図53	SA 6 出土遺物実測図	60
図21	土坑実測図	27	図54	土坑実測図①	61
図22	縄文時代早期遺物分布図	28	図55	土坑実測図②	62
図23	縄文時代早期遺構・遺物分布図	29	図56	その他の遺構出土遺物実測図	63
図24	縄文時代早期土器実測図①	30	図57	包含層出土遺物実測図①	63
図25	縄文時代早期土器実測図②	31	図58	包含層出土遺物実測図②	64
図26	縄文時代早期土器実測図	32	図59	その他の時代の遺物実測図	64
図27	縄文時代晩期土器実測図①	33	図60	SA 1 における植物珪酸体分析結果	76
図28	縄文時代晩期土器実測図②	34	図61	SA 3 における植物珪酸体分析結果	77
図29	Ⅲ層出土石器実測図①	36	図62	SA 6 における植物珪酸体分析結果	77
図30	Ⅲ層出土石器実測図②	37	図63	向原第 1 遺跡の炭化米法量の比較	82
図31	弥生時代～古墳時代遺構分布図	38			
図32	SA 1 樹種同定位置図	41			
図33	SA 1 フローテーション検出状況図	41			

## 表目次

表1	MB 2 出土遺物計測表	15	表9	Ⅲ層出土石器計測表	37
表2	Kr-Kb出土遺物計測表	18	表10	SA 1 検出植物遺存体	40
表3	集石遺構計測表	20	表11	SA 3 検出植物遺存体	47
表4	炉穴計測表	25	表12	SA 5 検出植物遺存体	55
表5	土坑計測表	27	表13	SA 6 検出植物遺存体	57
表6	縄文時代早期土器観察表	31	表14	弥生時代～古墳時代土坑計測表	62
表7	縄文時代早期土器計測表	33	表15	土器観察表①	65
表8	縄文時代晩期土器観察表	35	表16	土器観察表②	66

表17 土器観察表③	67	表22 鉄器計測表	71
表18 土器観察表④	68	表23 SA1における植物珪酸体分析結果	75
表19 土器観察表⑤	69	表24 SA3における植物珪酸体分析結果	75
表20 土器観察表⑥	70	表25 SA6における植物珪酸体分析結果	76
表21 石器計測表	71		

## 図版目次

巻頭図版1 向原第1遺跡遠景		図版8	90
巻頭図版2 SA1炭化材出土状況		旧石器時代遺物① (1~14)	
SA5検出状況		旧石器時代遺物② (15~18)	
図版1	83	旧石器時代遺物③ (19~24)	
旧石器 (k r - k b 面) 石器ブロック・礫群		図版9	91
SI1 SI2 SI3 SI4		縄文時代早期遺物① (25~28)	
SI5 SI6 SI7		縄文時代早期遺物② (29~31)	
図版2	84	縄文時代早期遺物③ (34~37)	
SI8 SI8 (断面) SI9 SI10		縄文時代早期遺物④ (32・33・40~42)	
SI11 (断面) SI12 (断面)		縄文時代早期遺物⑤ (38・39)	
SI13 (断面) SI14 (断面)		図版10	92
図版3	85	縄文時代早期遺物⑥ (43~52)	
SI15 SI16 (断面) SI17 SI18		縄文時代早期遺物⑦ (53~59)	
SI19 SP1検出状況 SP1 (断面)		縄文時代早期遺物⑧ (60~62)	
SP1 (完掘)		縄文時代晩期遺物① (63~70)	
図版4	86	縄文時代晩期遺物② (71~78)	
SP2検出状況 SP2 (断面)		縄文時代晩期遺物③ (79~86)	
SP2 (完掘) SP2、SP3 (完掘)		縄文時代晩期遺物④ (87~93)	
SP4 (断面) SC3検出状況		Ⅲ層出土石器① (94~99)	
SC3 (完掘) 現地説明会風景		図版11	93
図版5	87	Ⅲ層出土石器② (100~104)	
SA1検出状況 SA1炭化材検出状況		Ⅲ層出土石器③ (105~110)	
SA1遺物出土状況 SA1完掘		図版12	94
SA2検出中 SA3検出中		SA1出土土器 (111・119・124・131~134・137)	
SA3遺物出土状況①		SA3出土土器① (166)	
SA3遺物出土状況②		SA3出土土器② (167)	
図版6	88	SA3出土土器③ (174)	
SA3遺物出土状況③ (石斧出土)		SA5出土土器 (243・247)	
SA3貼床検出 SA3完掘		図版13	95
SA4検出 SA4完掘		SA6出土土器 (250)	
SA5検出中 SA5遺物・炭化材出土状況		包含層出土土器 (269・274・286・291・301)	
SA5完掘		SA1出土土器 (139~141)	
図版7	89	SA3出土土器① (222~231)	
SA6検出中 SA6遺物出土状況①		SA3出土土器② (232~237)	
SA6遺物出土状況② SA6完掘		SA3出土土器③ (239~241)	
SC3遺物出土状況		SA3出土土器④ (242)	
ミニチュア土器出土状況			

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（北九州～加治木間、約436km）の都農～西都間は平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年12月に整備計画区間となり、平成10年2月に建設大臣の施行命令が日本道路公団に発令された。その後、宮崎県教育委員会は路線内の分布調査を行い、総延長24.7kmの区間に79遺跡896,000㎡の遺跡対象地を設定した。

向原第1遺跡を含む周辺地域は縄文時代および弥生時代の散布地である向原遺跡として周知の遺跡の一部であることから、遺跡が立地する可能性があり確認調査を実施することになった。第一次確認調査は平成12年3月21日から3月28日にかけて行われたが、遺構・遺物は確認されなかった。第二次確認調査は平成12年9月14日から9月29日にかけて行われ、剥片2点ほか、黒色擾乱土より土器片、土師器片、石器等が出土した。第三次確認調査は平成13年11月2日から11月29日にかけて行われ、集石遺構や散礫の一部を成す赤化礫や土坑が検出されたほか、石器、縄文土器、弥生土器、土師器等が多数出土した。

この結果を受けて、日本道路公団と宮崎県教育委員会との間で協議が行われ、本調査を実施することになった。遺構、遺物の密度の低かった第一次、第二次確認調査区域および第三次確認調査東側は調査区から除外し、第三次確認調査西側を本調査の対象とした。発掘調査は、宮崎県埋蔵文化財センターが平成14年3月11日から8月10日にわたって行った。

## 第2節 調査の組織

向原第1遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

埋蔵文化財センター

所 長

矢野 剛（平成12・13年度）

米良 弘康（平成14・15年度）

宮園 淳一（平成16・17年度）

副所長兼総務課長

菊地 茂仁（平成12・13年度）

大崗 和博（平成14～16年度）

総務課長

宮越 尊（平成17年度）

総務係長

亀井 維子（平成12・13年度）

野邊 文博（平成14年度）

主幹兼総務係長

石川 恵史（平成15～17年度）

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫（平成12～17年度）

調査第一課長

面高 哲郎（平成12・13年度）

児玉 章則（平成14・15年度）

高山 富雄（平成16・17年度）

調査第一係長

谷口 武範（平成13～16年度）

主幹兼調査第一係長

長津 宗重（平成17年度）

調査第二係長

長津 宗重（平成12～15年度）

主幹兼調査第二係長

長津 宗重（平成16年度）

主幹兼調査第二係長

菅付 和樹（平成17年度）

調査および報告書担当

主 査

戌亥 浩志（平成12～16年度）

調査担当

調査員

日高 敬子（平成13・14年度）

小宇都あずさ（フローテーション担当）

調査指導

小畑 弘己（熊本大学）

泉 拓良（京都大学）

本田 道輝（鹿児島大学）

田崎 博之（愛媛大学）

柳沢 一男（宮崎大学）

広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館）

加藤 真二（文化庁）

長岡 信治（長崎大学）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

宮崎県のほぼ中央部には、東に日向灘を臨む宮崎平野がひろがる。その宮崎平野の北寄りに新富町は位置し、北部・西部に台地・丘陵が、南部に一つ瀬川の低地がみられる。町の中央部から西部にかけて一つ瀬川と小丸川に挟まれた洪積台地がひろがり、その段丘面は標高の高いほうから茶臼原面、三財原面、新田原面等と呼称されている。町の南部一帯に海拔約70～80mの新田原台地がひろがり、日置川、鬼付女川、藤山川水系の浸食により幾筋もの谷が形成されている。その台地の西部には新田原古墳群の支群のひとつである祇園原古墳群が展開している。

向原第1遺跡は新富町大字新田字向原および字綿打に所在し、新田原台地の南縁辺部の標高およそ70mに立地する。遺跡北側は平坦な新田原台地に連なり、遺跡南側には一つ瀬川に流入する藤山川が西進している。遺跡西側で一部土取りによる削平がみられるが、遺跡の東西両側は藤山川に流れ込む沢による開析谷が発達している。これらのことから調査区の旧地形は藤山川にむかう南向きの緩斜面がひろがる舌状丘陵地であったと推定できる。

現況は遺跡周辺一帯に畑が広がり、本調査区を除きほとんどの地表面が削平や土取り、耕作等の影響で地表面が低い。また、本調査区の表土には南北にトレンチャーが走り、耕作の跡がうかがえる。

今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代初期にかけての堅穴住居跡等の遺構・遺物を中心に、後期旧石器時代、縄文時代早期および晩期、近世の遺構・遺物を確認している。そこで、本遺跡周辺の状況について、出土遺物の該期の遺跡を中心に分布状況を概観する。

後期旧石器時代の代表的な遺跡としては本遺跡の北西約1.5kmに位置する東畦原第3遺跡<sup>註1</sup>が挙げられる。縄文時代の遺跡としては本遺跡の北約1kmの祇園原台地西部に位置する瀬戸口遺跡<sup>註2</sup>が挙げられる。瀬戸口遺跡は集石遺構が23基検出されるなど、新富町の縄文時代草創期・早期を代表する遺跡である。また、本遺跡の南西に隣接している藤山第2遺跡<sup>註3</sup>でも縄文時代早期の集石遺構を検出している。

藤山川をはさんで対岸約1kmの台地上には昭和48年から開始された県営農村基盤総合整備パイロット事業により昭和63年から調査された七又木地区遺跡<sup>註4</sup>がある。その中の銀代ヶ道遺跡は縄文時代早期、弥生時代、古墳時代の遺構を検出し、八幡上遺跡は弥生時代の堅穴住居跡を検出し、七又木遺跡は縄文時代早期の集石遺構や古墳時代の古墳周溝、周溝墓などを検出している。これら七又木地区遺跡は時期的にも、位置的にも本遺跡に一番近いといえる。

この七又木地区遺跡の西側の尾根上に宮ノ東遺跡<sup>註5</sup>が立地する。ここでは弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されている。また、弥生時代では他に、東九州自動車道関係で西畦原第1遺跡・尾小原遺跡で中期後半から後期末の堅穴住居跡が調査され、本遺跡の東1.5kmに位置する新田原遺跡<sup>註6</sup>や、本遺跡の北2kmに位置する川床遺跡が立地し、古墳時代を代表する祇園原古墳群（新田原古墳群）が新田原台地西部全域にひろがる。このように本遺跡周辺では、台地縁辺部から台地上までの広い範囲に縄文時代早期から古墳時代にかけて遺跡が展開する。近世の遺跡では、瀬戸口遺跡に隣接して牧場跡の春日神社横牧土手遺跡や本遺跡の北東1.5kmに茶碗山窯跡遺跡がある。

- 1 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第87集「東畦原第3遺跡」東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 2004 宮崎県埋蔵文化財センター
- 2 宮崎県児湯郡新富町文化財調査報告書 第4集「新田原遺跡 瀬戸口遺跡 蔵園地下式横穴墓」1986 新富町教育委員会
- 3 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第95集「藤山第2遺跡」東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 2004 宮崎県埋蔵文化財センター
- 4 新富町文化財調査報告書 第13集 県営農村基盤総合整備パイロット事業（尾鈴二期地区七又木区）に伴う文化財発掘調査報告書「七又木地区遺跡 八幡上遺跡 七又木遺跡 銀代ヶ道遺跡」1992 新富町教育委員会
- 5 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第91集「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ」2004 宮崎県埋蔵文化財センター



- |             |              |            |            |
|-------------|--------------|------------|------------|
| 1 向原第1遺跡    | 2 瀬戸口遺跡      | 3 銀代ヶ迫遺跡   | 4 八幡上遺跡    |
| 5 七又木遺跡     | 6 春日地区遺跡第2地点 | 7 新田原A遺跡   | 8 新田原B遺跡   |
| 9 川床遺跡      | 10 新田原古墳群    | 11 有峯城跡    | 12 東城遺跡    |
| 13 春日神社横牧遺跡 | 14 茶碗山窯跡遺跡   | 15 音明寺第1遺跡 | 16 音明寺第2遺跡 |
| 17 東畦原第1遺跡  | 18 東畦原第2遺跡   | 19 東畦原第3遺跡 | 20 西畦原第1遺跡 |
| 21 西畦原第2遺跡  | 22 上新間遺跡     | 23 一丁田遺跡   | 24 勘大寺遺跡   |
| 25 永牟田第1遺跡  | 26 永牟田第2遺跡   | 27 尾小原遺跡   | 28 向原第2遺跡  |
| 29 藤山第1遺跡   | 30 藤山第2遺跡    | 31 宮ノ東遺跡   | 32 宮ノ前遺跡   |
| 33 竹刈C遺跡    | 34 寺崎遺跡      | 35 国分寺跡    | 36 西都原古墳群  |

(1及び15～32の各遺跡は東九州自動車道建設に伴う遺跡)

図1 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

## 第三章 調査の経過と方針

### 第1節 確認調査の概要

#### (1) 第一次確認調査

調査区A区7箇所、B区に1箇所、C区に10箇所、D区に2箇所、E区に2箇所、F区に2箇所、G区に2箇所を設定し調査をした。トレンチの規模はトレンチ4のみ7m×5m、残りは5m×1.2mである。調査の結果、地表より2m近くまで天地返しによる攪乱を受けており、攪乱中には遺物は土器片が数点のみであった。トレンチ4では攪乱下の地山の確認をするため、さらに掘り下げていった。攪乱が表土から2mで終わり、そこでKr-Awが、さらに50cm下げたところでKr-Iwが確認できた。

#### (2) 第二次確認調査

調査区B区に1箇所、C区に10箇所、D区に2箇所、E区に2箇所、トレンチを設定し調査をした。

B区では5m×4mのトレンチを設定し、表土下28cmでKr-Kbを確認し、以下AT、Kr-Aw、Kr-Iwを確認した。遺物としては、Kr-Kb中で剥片が2点出土した。

C区は、旧地権者の話では耕作地にするための削平を、さらに60cmほど耕作による攪乱を受けており、調査の結果、AT下のMB2から残存していた。C区東側は攪乱が深く、Kr-Iw下層の礫混じりの灰白色ロームから残存していることが分かった。トレンチ1～9は2m×2m、トレンチ10は4m×2mの規模で設定したが、どのトレンチからも遺構・遺物は確認されなかった。

D区はC区の北西に位置し、地表面が1mほど高いところである。そこに2m×2mのトレンチ1を設定したところ、表土中より赤化礫と思われる礫が出土したが、それより下層からは遺構・遺物は確認できなかった。しかし、この調査で初めてK-Ahの残存を確認できた。さらに、トレンチ2を東側に設定したところ、表土下のK-Ah混じりの黒色攪乱土より土器片、土師器片、剥片、石斧等が出土した。

E区はC区の南側に位置し、C区同様調査前まで耕作に使われていたことから、表土下30cm前後は攪

乱を受けていたが、その下層のKr-Kbからは残存していた。2m×2mのトレンチを3箇所設定したが、遺構・遺物は検出できなかった。

#### (3) 第三次確認調査

F区はD区と、G区はE区とはほぼ同じような地表面の高さであり、それぞれK-AhとKr-Kbから残存していると期待された。地元の方の話によるとF区は以前は小山のようであったが削平により現地形になったとのことである。また、それ以前にもかなり大規模な造成が一行で行われたとのことであった。調査は7m×3mを標準とするトレンチを設定し、さらにその中に2m×2mを基本とするサブトレンチを設定した。G区はトレンチ1・2ともMB2まで掘り下げたが、トレンチ1のKr-Kbで剥片が1点出土しただけであった。さらにトレンチ1は層序を確認するため、重機による深掘りを行った。その結果、AT、MB2、Kr-Aw、Kr-Iwの各火山灰の堆積を確認し、さらに下層の礫混じり粘土質の灰褐色ロームまで確認した。この層はC区最下層の灰白色ロームと同じものと考えられる。

F区全域の層序を確認するため、トレンチ1～8・10まで人力で掘り下げた。その結果、表土およびⅡ層暗褐色土に土器片が混じり、これまでの耕作・削平・造成による攪乱が裏付けられた。さらにⅢ層黒色土でも土器片が多量に出土したが、黒色土のため遺構を検出できなかった。同様にK-Ah二次堆積層であるⅣa層でも土器片、剥片が出土した。

さらに広範囲で層序および遺構、遺物の分布状況を確認するため、比較的大きめのトレンチ9・11～15を設定した。K-Ah二次堆積層であるⅣa層でいくつかのビットや土坑を検出したが、時期や性格を明確に認定できなかった。K-Ah下層のV層(MB0、縄文時代早期面)では、ほとんどのサブトレンチで赤化礫を検出し、縄文時代早期に比定できる貝殻条痕土器、石鏃などが出土した。その下層のKr-Kbでは剥片や礫の集中部分を確認し、さらにAT下のMB2では剥片が1点出土した。

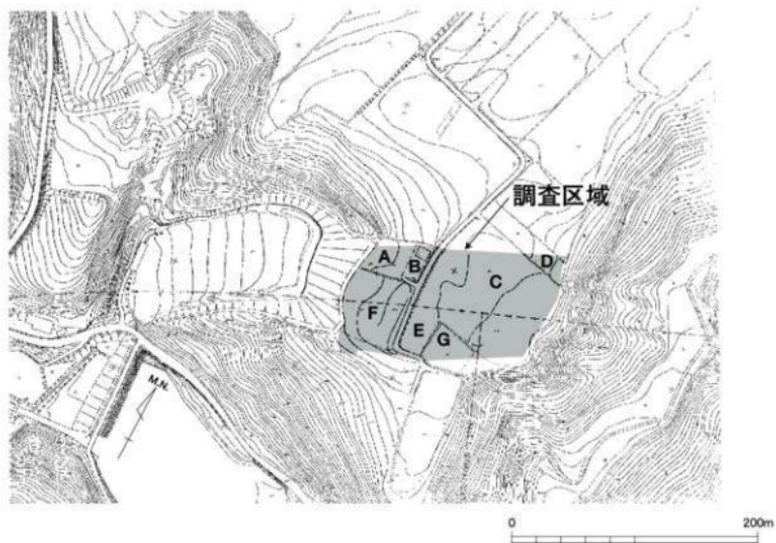


図2 調査区域図 (S=1/4,000)

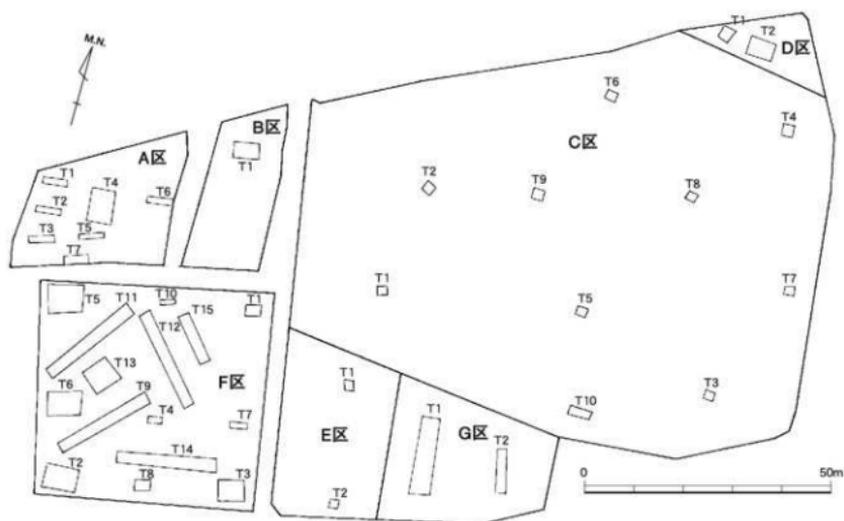


図3 確認調査トレンチ配置図 (S=1/1,000)

#### (4) 調査区の決定

以上の第一次から第三次の確認調査の結果を受けて、A区～E区、G区は遺構密度が低く、遺物量が少ないことから本調査の必要はないと判断した。F区については、K-Ahが良好に残存し、かつ遺構や遺物も多くの特レンチから確認できたことから2,500㎡を調査対象とする全面調査となった。

## 第2節 発掘調査の方法

#### (1) グリッドの設定

表土を剥いだ状態で遺物が多数出土し、遺物取り上げのためグリッド杭設定を急がねばならなかったが、調査開始時期の関係でグリッド杭打ちなど測量業務がすぐに委託できなかったので、調査員でグリッド設定を行った。そのため調査区内のグリッド杭および遺物の座標等は国土座標によらない任意のものである。

調査区がほぼ東西南北に向けた方形を呈している

ことから、表土剥ぎを始めた部分の南東隅をA1と設定し、調査区東側道路に平行する形で南北ラインを設定し、それに直交する東西ラインを設定した。杭間は10mとした。また、調査途中で拡張した調査区南側をA列の前ということからZ列とし、東側からZ1、Z2、Z3…と呼称する。

#### (2) 調査の手順

調査の手順はまず、表土およびⅡ層を重機で剥ぎ、Ⅲ層もしくは困難であればⅣ層(K-Ah)面まで掘り下げ、縄文時代後・晩期から古墳時代にかけての堅穴住居跡等の遺構検出を試みる。次に重機でK-Ahを除去した後、Ⅴ層(MB0)で集石遺構等の縄文時代早期の遺構検出を試みる。さらに、Ⅶ層(Kr-Kb)で礫群や石器の検出を試みる。余裕があればAT下のⅪ層をグリッド掘り(25%調査)もしくは特レンチ調査で遺構・遺物の確認を試みる。以上のように包含層に沿って四段階の調査を行う計画を立てた。

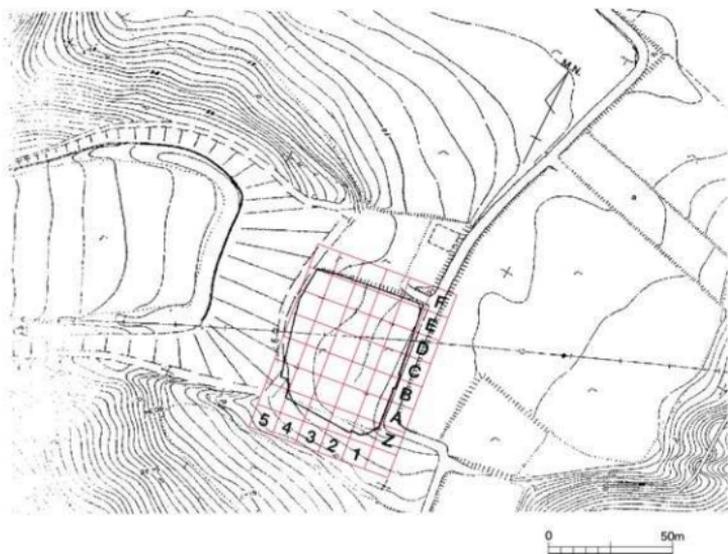


図4 グリッド配置図 (S=1/2,000)

### (3) 調査概要

Ⅱ層までを重機で剥ぎつつ、ジョレン等でⅢ層(クロボク)を掘り下げながら遺構精査を進めた。竪穴住居跡はSA1からSA5まで検出した後、調査区を西側と南側へ拡張し、Z2グリッドで新たにSA6を検出した。その他の遺構としては調査区西側を中心に土坑10基やピット多数を検出した。また、新しい時期の遺構としてSA6を切る形で東西の傾斜に沿って検出された溝1条(SE1)やSA3を切る土坑などを検出した。これらの遺構は埋土中の遺物の年代等でごく新しい時期と判定したので遺構分布図に掲載していない。

竪穴住居跡のうちSA1およびSA5は焼失住居で、SA3は7m×7mの規模を誇る大型住居である。土坑のうち3基は、埋土や床面に焼土や炭化物が見られる焼土坑である。フローテーション実施のため、竪穴住居跡のSA1・3・5・6の4軒と土坑2基の埋土を回収した。

ピット内からはミニチュア土器や煙管、寛永通宝等が出土した。Ⅲ層およびⅣ層からは縄文時代晩期土器や石斧、石鎌等が出土し、Ⅲ層C5グリッド周辺で黒曜石の石器ブロックを検出した。包含層以外ではトレンチャー跡の埋土から石斧や瓦片が出土した。Ⅳ層(K-Ah)面でコンタ図を作成し、空中写真撮影を委託・実施した。また、炭化材の年代測定など自然科学分析を委託した。

K-Ahを人力で除去した後、縄文時代早期にあたるV層(MB0)とⅥ層(ML1)を調査した。MB0をわずかに掘り下げると調査区中央を中心に散礫を確認できた。その中でも比較的礫が集中しているもの19基を集石遺構と認定した。土器は貝殻条痕文の前平式や別府原タイプ、中原式等が主なものであり、少数だが無文土器がみられた。石器では石鎌や礫石、磨石などが出土し、D2グリッドでは流紋岩の石器ブロックを検出した。MB0面で測量業務を委託した。

Ⅶ層(Kr-Kb)の上層(Ⅶa層)を人力と重機で剥いだところ、焼土を伴う土坑2基、陥し穴状遺構1基、炉穴2基と2群を新たに検出した。炉穴の2群は隣接して、それぞれ4基と6基が切り合っている。

た。

Ⅶ層(Kr-Kb)面の調査では、石器総数740点を数え、石器ブロックを2箇所検出した。1つはチャートと頁岩のブロックであり、もう1つは黒曜石のブロックである。また、礫群も4基検出した。

その後、Ⅷ層(MB1)・Ⅹ層(ML2)を部分的に調査したが、その範囲内では遺構・遺物とも確認されなかった。

最後に調査区中央にコンタに直交する形で幅1m、長さ20mほどの長いトレンチを2本と幅1m、長さ2mほどの短いトレンチを4本入れてⅩ層上部(MB2)における遺構・遺物を確認したところ、剥片が1点出土した。

### (4) 調査終了後の状況

調査終了後は、排土を全て埋め戻して元の地表面の高さまで戻し、原状復帰した。

### (5) 日誌抄

平成13年

3. 11 調査開始。重機による表土剥ぎ開始。
3. 12 ジョレンによるⅢ層掘り下げ開始。
3. 13 SA1平面プラン検出。
3. 14 SA2平面プラン検出。
3. 15 グリッド杭設置。
4. 4 調査区北西部Ⅱ～Ⅲ層より礫、煙管、銭貨出土。
4. 12 SA3・4・5平面プラン検出。K-Ah面でコンタ図測量。
4. 18 竪穴住居跡の床土を土嚢袋で回収開始。
5. 1 SA5出土の炭化材に柄杓確認。
5. 9 ピット完掘。
5. 16 新富町立上新田中学校より生徒52名、引率教諭3名遺跡見学。
5. 17 現地説明会開催。主に竪穴住居跡群について説明。74名参加。
5. 22 重機により調査区南側を拡張。
5. 29 SE1検出。
5. 30 SA6平面プラン検出。
6. 3 SA6の西側で石斧8本出土。

- 6. 7 空中写真撮影。
- 6. 10 K-Ah除去作業開始。V層（MB0）掘り下げ開始。
- 6. 13 土層観察用にD列から北に1m幅でベルト設定。SA1の炭化材を硬化させるためパラロイドB-72塗布開始。
- 6. 17 調査区域図、遺構分布図測量。
- 6. 19 自然科学分析のため堅穴住居跡の床土をサンプリング。
- 7. 2 散礫検出状況を写真撮影。
- 7. 18 集石遺構実測開始。
- 7. 24 V層精査開始。炉穴検出。
- 7. 26 測量業務開始。
- 7. 29 土層観察用トレンチ掘り下げ開始。
- 8. 2 礫群とチャート等の石器ブロック検出。
- 8. 3 黒曜石の石器ブロック検出。
- 8. 7 重機による埋め戻し開始。
- 8. 10 調査終了。

### 第3節 整理作業及び報告書作成

#### (1) 整理方針

調査期間の大半を弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡の調査に費やし遺構から出土した土器が多数あることから、整理も土器中心に行った。

石器については出土点数は多いものの、大多数は剥片・破片であることから接合作業は見送った。報告した石器は最下層のMB2出土の剥片2点を除いてすべて石器製品もしくは未製品である。

#### (2) 整理作業の実際

整理作業は当センターの整理作業員の協力を得て平成14年11月1日から平成15年9月30日までの期間に水洗、注記、接合及び実測の一部を行い、残りの実測と拓本、トレース等を平成16年6月1日から平成16年11月30日までの期間に行った。同時に遺構分布図や遺構実測図など挿図を作成するかたわら本文執筆を進めていった。

#### (3) 微細遺物の検出について

##### ① 目的

遺構（遺跡）の精査時点では検出困難な微細遺物（動植物遺体・人工遺物）を採取する必要がある、通常の内視の調査では見逃している微細遺物の検出を図る必要がある。

##### ② 検出が予想される微細遺物

###### ア 動物遺体

→猪、犬、鹿、ネズミ、蛙、貝、魚など

###### イ 植物遺体

→イネ、アワ、キビ、マメ、モモ、ウリ、オニグルミ、ドングリなどの食料

タテ属、アシ、アブラナ、カシ、スギなどの食料以外

###### ウ 昆虫遺体

→コクゾウムシ、蠅のサナギ、カメムシ、ゲンゴロウなど

###### エ 人工遺物

→石破片、鉄片、ペンガラ、玉類など

##### ③ 微細遺物から得られる情報

食生活の復元や植生・気候の復元には、動物遺体、植物遺体、昆虫遺体からの情報が重要である。また遺構の空間利用・性格の解明や人間の生業（栽培・製作・運搬）の解明には、動物遺体、植物遺体、昆虫遺体、人工遺物からの情報が重要である。例えば、貯蔵穴ならばどんな植物遺体や昆虫遺体があるかが重要であるし、ゴミ捨て場ならばどんな昆虫遺体や動物遺体があるかが重要になる。

##### ④ 選別法

微細遺物の選別にはいくつかの方法があり、遺物の状況によって選別の方法が違う。

炭化せず湿った状態で保存された低湿地資料は、水中で選別し篩で採取する水洗選別法で回収し、乾燥させずに保管する必要がある。

住居の構造材など出土した資料に直接水をかけて洗い、検出状況を明らかにするために用いる手法を水洗抽出法と呼ぶ。

土壌を採取し、乾燥させ、その土を水に溶かし攪拌することで、土に含まれている微細遺物のうち水に浮く物質（例；炭化物）を上方で、水に沈む物質

(例：土器・石器・鉄片)を下方で、それぞれ篩を使って回収する方法をフローテーション法（水中浮遊選別法）という。

また、乾燥させた土壌を直接、篩にかけて選別する篩選別法もある。

#### (4) フローテーション法による微細遺物の検出

##### ① 方針

今回の調査では、竪穴住居跡については貼り床直上の埋土および貼床の土（これらの床面直上と直下の土をあわせて、本報告では「床土」と称する）および土坑2基の埋土をフローテーション法で微細遺物の回収を試みた。

検出が予想される微細遺物として、植物性食料の炭化種実や住居の構造材の炭化材等の植物遺体と、土器片・石器片・鉄片などの人工遺物を想定して作業に入った。

##### ② 作業の流れ

フローテーション法における一連の作業の流れは、土壌採取→土壌乾燥→土壌水洗→残存物乾燥→

選別→分析、というものである。調査現場では土の採取を行い、埋蔵文化財センターで土の乾燥から後の作業を行った。それぞれ発掘作業員、整理事業員の協力を得ながらの作業であった。分析作業では調査員が炭化種子の同定作業をすることが多いが、いくつかの種実同定や年代測定のため分析業務の委託をした。

##### ③ 作業の実際

###### ア 土壌採取

竪穴住居跡の床土を採取するにあたり、遺構を実測用のセクションラインにあわせて1mメッシュを設定し、その部分ごとに床土をおよそ5cmの厚みで採取した。土坑の埋土は分層せず、埋土一括として採取した。

###### イ 土壌乾燥

採取した土壌は一旦、土嚢袋で保存し、新聞紙を敷いた浅め（深さ7cm）のコンテナボックスに乾燥のため入れ替える。風通しのよいところに置き、晴天の日は屋外に出して乾燥を進める。異物混入を防ぐため、コンテナの上面に新聞紙をかけ

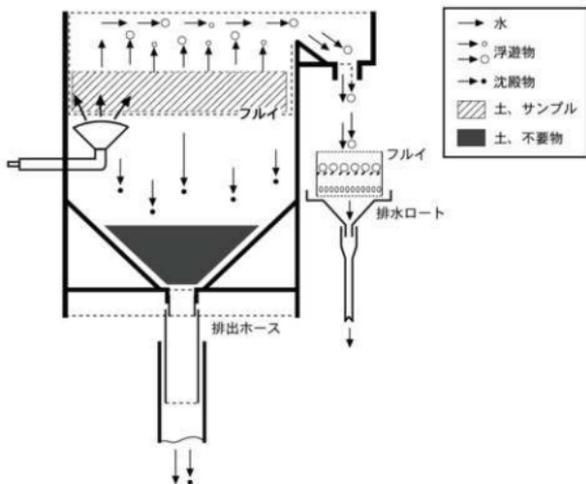


図5 フローテーション装置の模式図

上屋真一「柏木川11遺跡における浮遊選別法（フローテーション）による微細遺物採取方法について」『北海道恵庭市柏木川11遺跡発掘調査報告書』北海道恵庭市教育委員会 1990による

るようにした。作業後半ではコンテナより乾燥効率の良いメッシュカゴに変更した。

一つの採取ポイントからたくさんの土が採取されるので、コンテナやメッシュカゴを整理するためにラベルを記入するが、例えばSA1のA3ポイントの1番目の土嚢袋の土を3つのコンテナに分けて乾燥させると、3つのコンテナのラベルはそれぞれSA1A3①、SA1A3②、SA1A3③のようになる。二番目のSA1A3ポイントの土嚢袋をコンテナに分けると、SA1A3④から始まることになる。

#### ウ 土壌水洗

乾燥した土はフローテーション装置を使って水洗作業を進めた。まず、乾燥した土の重量を量り台帳に記録する。このとき、同じ場所から採取された土であれば3～4箱程度まとめて洗い、作業の効率化を図った。台帳にも同時に洗った場合、合計の土の重量を記録した。今回使用した装置では、一度に10～15kg程度の土は洗えた。

例えばSA1ではA1からD4まで数多くの土壌採取ポイントがある。それぞれのポイントを表す土サンプルを採っておく必要がある。そのため、各ポイントの1番目の箱（例えばSA1A3①）の土を6号ポリ袋に少量サンプリングし、保管した。

装置内の水槽に水がたまったら、土を投入する。全部土を入れ終わったらタンクの底の土（泥）を丁寧にかき混ぜながら、流水に乗って流れていく炭化物を目で確認する。炭化物が流れなくなり、底の泥がほとんどなくなったら、装置内の水を排水して、篩とタンクに残った残存物を回収する。

#### エ 残存物乾燥

篩とタンクに残った残存物を紙箱に入れ、風通しの良い所で乾燥させる。

#### オ 選別

十分乾燥した残存物を電気スタンドとルーペ、実体顕微鏡を使って、炭化物など炭化植物遺体と土器片や鉄片など人工遺物などを選別する。



床土採取風景



フローテーション作業風景



選別作業風景

## 第Ⅳ章 調査の記録

### 第1節 基本層序

本遺跡の基本層序を図6に示した。層序を決定する上で鍵層となる火山灰であるK-Ah、Kr-Kb、ATは調査区全域におおむね残存している。K-Ahだけは後の削平によって調査区中央部分のみ残存していない。遺構・遺物に関係しない下層の火山灰としてKr-Aw、Kr-Iwの堆積をトレンチで確認している。土色名のみで土色記号の掲載のないものは、調査時に土色記号の記録をしなかった土層である。

I層は表土で、南北にトレンチ跡が残り、耕作により破砕された土器小片が認められる。層厚は平均25cmである。

Ⅱ層暗褐色土は表土下の層で、I層同様耕作等による擾乱を受けており、土器小片が多数含まれる。層厚は平均7cmである。

Ⅲ層黒色土(通称クロボク)はしまりのない土で、土器片、土師器片、須恵器片など縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物を包含している。層厚は平均7cmである。

Ⅳ層はK-Ahである。二層に細分され上層のⅣa層明褐色土はK-Ahの二次堆積であり、調査区中央部に一部残存していない箇所がある。縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺物を包含している。しまりがなく、火山ガラスを含まない。層厚は平均8cmである。下層のⅣb層橙色土はK-Ah本体であり、Ⅳa層同様の分布状況で、ややしまりがあり、火山ガラスに富む。層厚は平均13cmである。

V層黒褐色土(10YR 2/3)は調査区全域に分布し、貝殻・炭化物土器や石鏃など縄文時代早期の包含層である。硬質土と軟質土が混じる、しまりのある層である。白色粒、黄色粒、ガラス粒を含む。MB0に相当する。層厚は平均13cmである。この層より下層はどの層もほとんど傾斜に沿って同様な分布状況および堆積状況であるが、西側の標高が低い部分は若干厚く堆積している。

Ⅵ層黒褐色土(10YR 3/2)もV層同様縄文時代早期の包含層であるが遺物数は少ない。硬くしまり

のある層である。白色粒、黄色粒、ガラス粒を含む。ML1に相当する。層厚は平均14cmである。

Ⅶ層褐色土はKr-Kbを含む層であり、Kr-Kb自体は硬くしまるブロック状であり、Kr-Kbの含有状況で3層に細分される。

Ⅶa層は暗褐色土(10YR 3/4)でやや軟らかく、白色粒、黄色粒、ガラス粒を含む。Kr-Kbの黒褐色(10YR 2/2)の硬質ブロックが混じる。後期旧石器時代に属する石器をわずかに包含する。層厚は平均14cmである。

Ⅶb層はⅦa層に占める2種類の土の構成比が逆転し、Kr-Kbの黒褐色(10YR 2/2)の硬質ブロックが多くを占める。そのブロック間に軟らかい暗褐色土(10YR 3/4)が混じる。標高の低い西側ほど、この暗褐色土の占める割合が多くなる。後期旧石器時代に属する石器を約70点と鏢を包含する。平均層厚は18cmである。

Ⅶc層は暗褐色土(10YR 3/3)が多くを占め、軟質の褐色土(10YR 4/4)が混じる。白色粒、ガラス粒を含む。後期旧石器時代に属する石器を600点以上包含する。層厚は平均20cmである。

Ⅶ層は暗褐色土(10YR 3/4)でしまりがあり、部分的に軟質でやや粘性のある褐色土(10YR4/4)が混じる。MB1に相当する。遺構・遺物は確認されなかった。調査区西側で堆積が認められなくなる。層厚は平均13cmである。

Ⅷ層はⅦ層に混じっている褐色土(10YR 4/4)のみの層であり、軟質でしまりが少ない。部分的にしか堆積していない。

Ⅸ層は褐色土(10YR 4/6)でATの二次堆積にあたり、硬くしまる。ML2に相当する。層厚は平均12cmである。遺構・遺物は確認されなかった。

Ⅹ層は褐色土(10YR 4/4)でATのにじみ部分でややしまりがある。部分的にしか堆積していない。

X層は黄褐色(10YR 5/8)のATである。しまりがある。層厚は平均25cmである。

X'層は黄褐色土(10YR 5/8)とにぶい黄橙色

土 (10YR 6/4) が混じったもので、AT最下層部のしまりのある土である。層厚は平均5cmである。

XI層は黒褐色土 (10YR 2/2) で硬くしまり、若干粘性のある土である。クラックが発達している。いわゆるブラックバンドである。上層は白色ガラス粒を多く含み、MB2に相当する。遺物は剥片が2点出土した。下層は白色ガラス粒を含まず、MB3に相当する。層厚は平均42cmである。

XII層は明褐色土で、上層のブラックバンドと下層のKr-Awの間の漸移層である。下部にいくほど赤褐色が強くなる。層厚は平均10cmである。

XIII層は褐色 (10YR 4/4) のKr-Awである。硬くしまり、粘性がある。径2～3mmの赤色パミスを含む。層厚は平均10cmである。

XIV層は明褐色土 (7.5YR 5/8) である。径2～4mmの橙色パミスを含み、硬くしまり粘性のある層である。平均層厚は20cmである。

XV層は明赤褐色 (5 YR 5/8) のKr-Iwである。径1～3mmの白色、赤色、橙色のパミスを含む、硬くしまった層である。層厚は平均15cmである。

XVI層は灰褐色土である。礫を含み、粘性に富む。段丘礫層の上部と考えられる。

図6 基本土層模式図

層序	土色	土色記号	略称
I	表土	-	-
II	暗褐色	(攪乱)	-
III	黒色	-	-
IVa	明褐色	二次堆積	-
IVb	橙色	-	K-Ah
V	黒褐色	10YR 2/3	MB 0
VI	黒褐色	10YR 3/2	ML 1
VIIa	暗褐色	10YR 3/4	Kr-Kb
VIIb	黒褐色	10YR 2/2	Kr-Kb
VIIc	暗褐色	10YR 3/3	Kr-Kb
VIII	暗褐色	10YR 3/4	MB 1
IX	褐色	10YR 4/6	ML 2
X	黄褐色	10YR 5/8	AT
XI	黒褐色	10YR 2/2	MB 2 MB 3
XII	明褐色	-	-
XIII	褐色	10YR 4/4	Kr-Aw
XIV	明褐色	7.5YR 5/8	-
XV	明赤褐色	5 YR 5/8	Kr-Iw
XVI	灰褐色	-	-

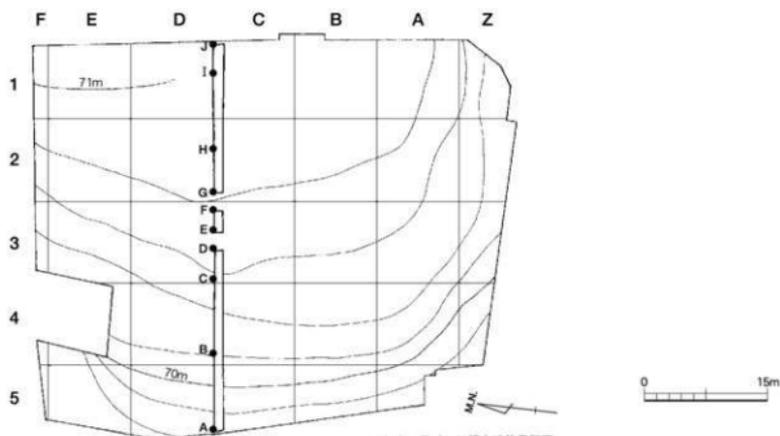


図7 土層断面セクションポイント配置図 (S=1/600)

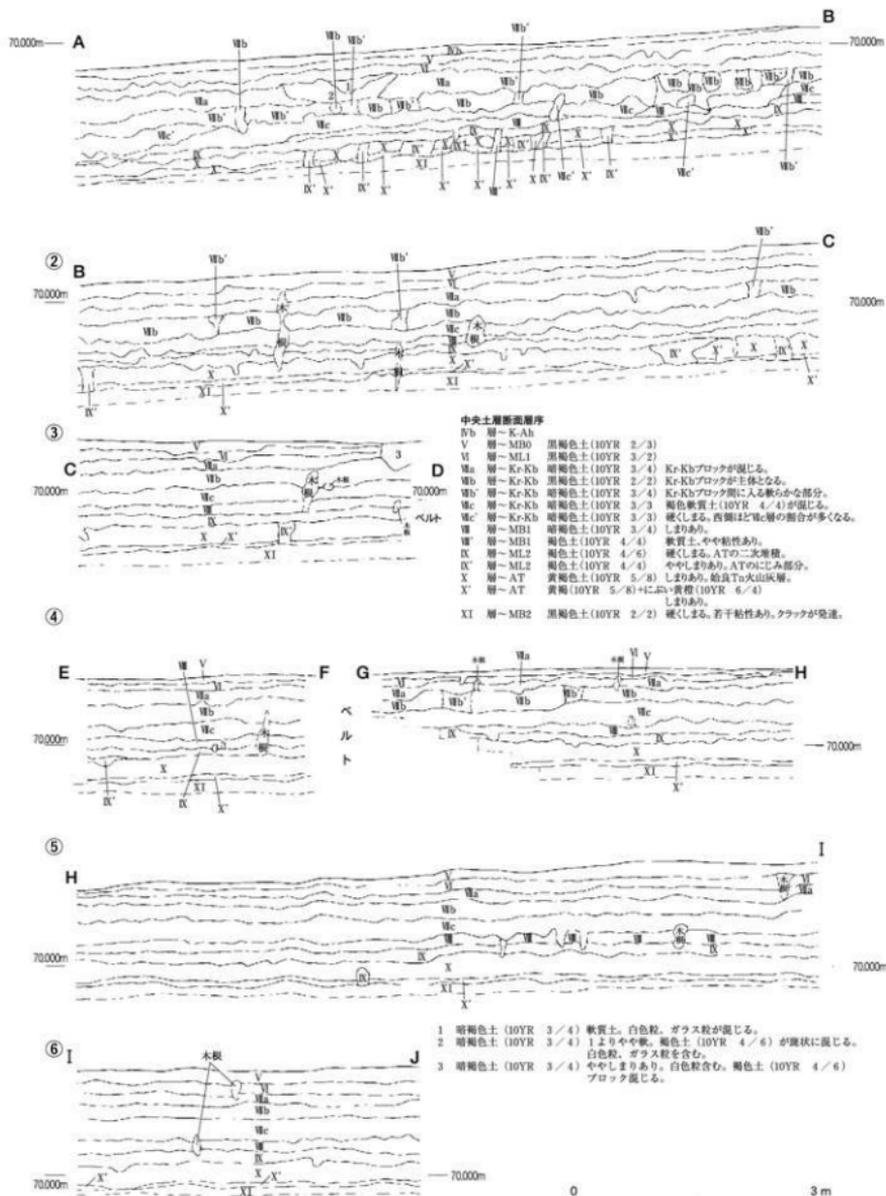


図8 土層断面図 (S=1/60)

## 第2節 後期旧石器時代の遺構と遺物

本遺跡の後期旧石器時代の遺構・遺物は大きく2つの時期に分けられる。第Ⅰ期はXI層(MB2)の上部で出土した剥片の時期、第Ⅱ期はⅧb～Ⅶc層(Kr-Kb)で検出された礫および石器群の時期である。

### (1) XI層(MB2)出土の遺物

MB2まで掘り下げた箇所は、確認調査時のトレンチ10箇所および本調査時C列に設定した長短6箇所の深掘りトレンチの計16箇所(図10)で、調査面積は約85㎡で調査区全域に対する割合は3%であ

る。

MB2出土の遺物は剥片2点のみである。1は深掘りトレンチから出土した剥片である。2は確認トレンチ8から出土した剥片である。石材はともにホルンフェルスである(図9 1・2)。

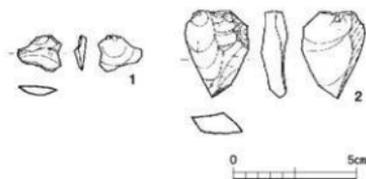


図9 MB2出土遺物実測図(S=1/2)

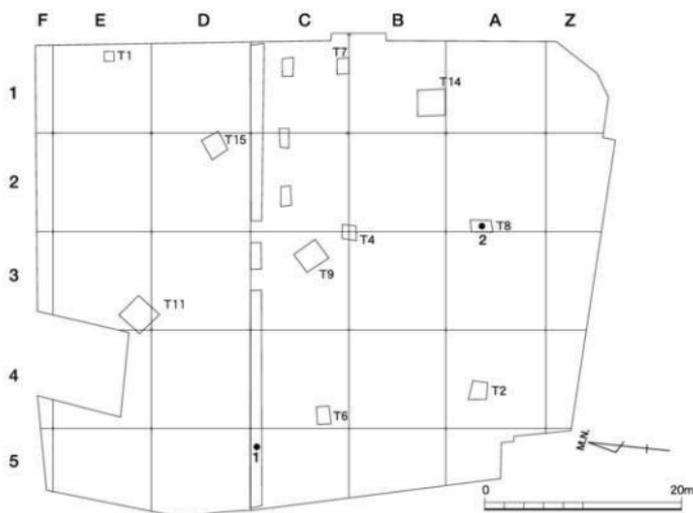


図10 MB2出土遺物分布図(S=1/500)

遺物番号	注記番号	グリッド	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X	Y	レベル(m)	備考
1	C5 XI-1	C5	XI	剥片	ホルンフェルス	1.89	1.79	0.5	0.5	29.722	-41.796	68.384	
2	8トレンチ XI-15	A2	XI	剥片	ホルンフェルス	3.5	2.6	1.08	7.2	6.300	-19.400	69.462	

表1 MB2出土遺物計測表

(2) VII b～c層 (Kr-Kb) 出土の遺構と遺物

① 礫群 (図11)

VII b～VII c層 (Kr-Kb) より出土した礫は総数326個で、A3グリッド杭周辺に200個を越す大きいかたまりとそれより西側に3つの小さなかたまりの合計4基の礫群がみられる。礫群1は11m×9mの規模で、A2・A3・B2・B3グリッドに広がる。その中に礫が特に密集している箇所があり、礫群1は複数の礫群がまともって検出されたとみられる。礫群2は5m×3mの規模で、A4グリッドを中心に位置する。礫群3は5m×3mの規模で、B4グリッドを中心に位置する。礫群4は5m×3mの規模で、C4グリッドを中心に位置する。礫の多くは赤化しており、石材は砂岩や尾鈴酸性岩類が中心である。

② 遺物 (図12、図13 3～14、図14 15～24)

礫群1に隣接してA3・B3グリッドで石器ブロックが1群検出された。この石器ブロックをA群とする。A群の石材はチャート、頁岩、流紋岩が中心で、他にホルンフェルス等も混じっている。特にチャートは礫面をもつものが多く含まれる。全体的に

石器のサイズが後述するB群よりも大きい。石器組成はナイフ形石器、台形石器、敲石、砥石、石核等である。

もう一群の石器ブロックがD3・E3グリッドにまたがる形で検出された。こちらをB群とする。B群の石材はほとんど黒曜石で、1cm程度の剥片や砕片が多い。石器組成はナイフ形石器、台形石器、角錐状石器、錐、サイドスクレイパー、敲石、磨石、二次加工剥片、石核等である。

製品を石材別にみると黒曜石裂が多く、石器ブロックの主要石材でない砂岩製のものもみられる。また、A群・B群ともに石器ブロック内に敲石が存在する。

6は横長剥片を素材にした二側縁加工ナイフ形石器であり、9のナイフ形石器は刃部に微細剥離が認められる。10の角錐状石器は基部加工が施されており、石器表面は風化が進んでいる。12は横長剥片を素材にしているサイドスクレイパーである。

19は両面使用痕のある磨石である。22の砥石は礫群1で出土した。23・24は敲石である。敲打痕が両端にみられる。

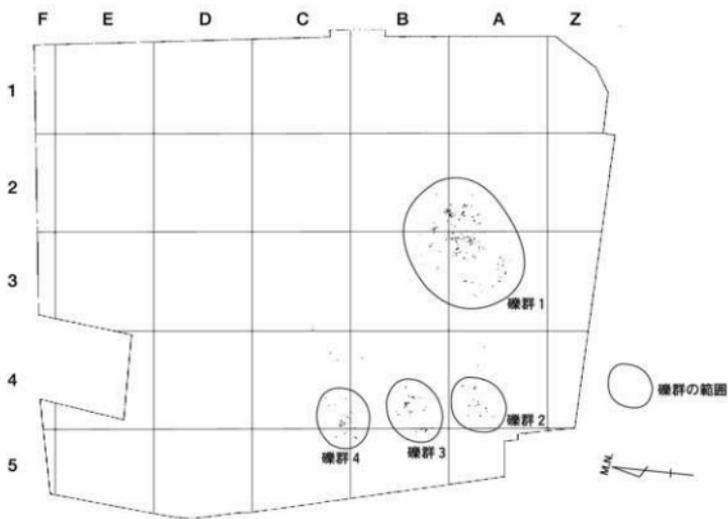


図11 Kr-Kb検出礫群分布図 (S=1/500)

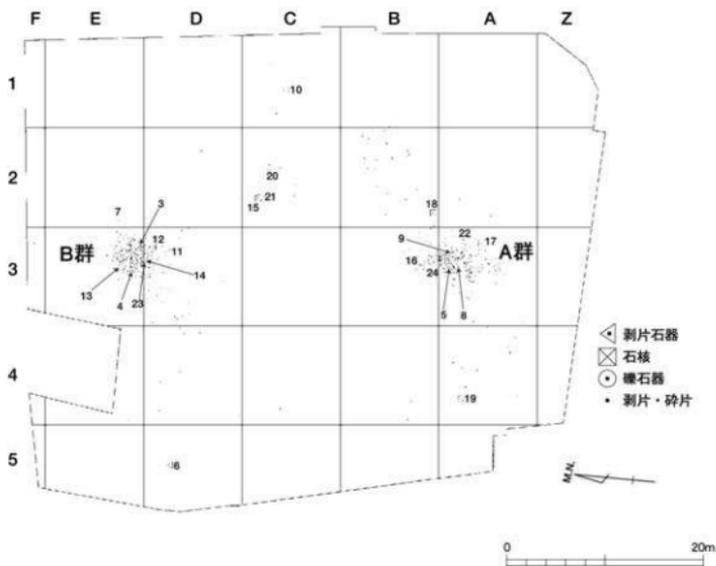


图12 Kr-Kb出土遗物分布图 (S=1/500)

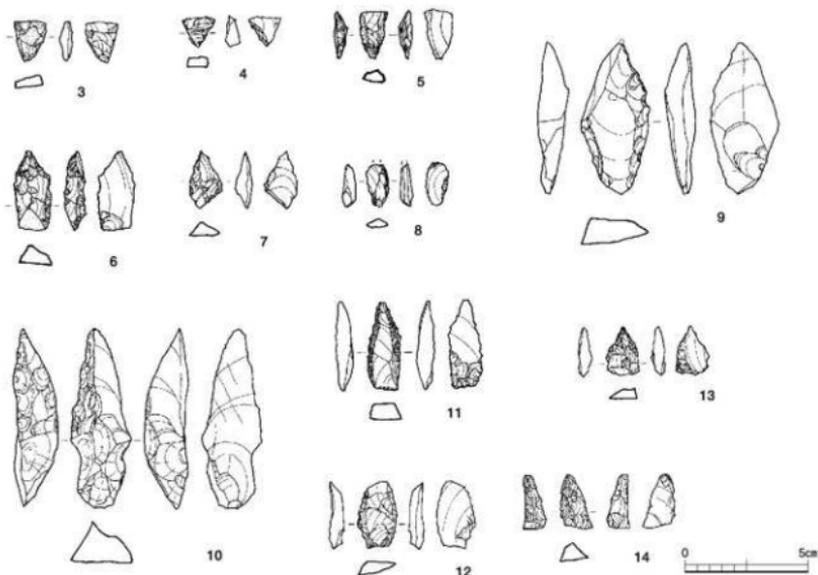


图13 Kr-Kb出土遗物实测图① (S=1/2)

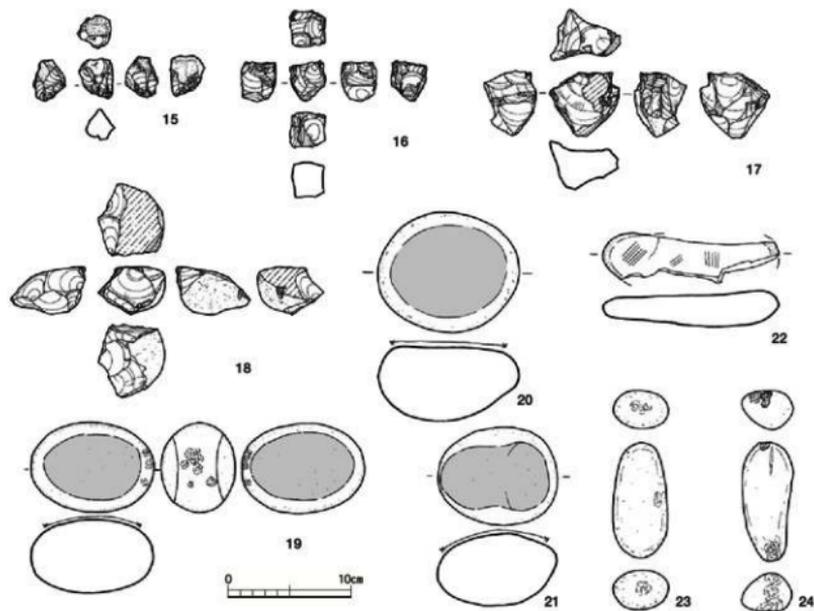


図14 Kr-Kb出土遺物実測図② (S=1/4)

遺物番号	注記番号	グリッド	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X	Y	レベル (m)	備考
3	Wc-270	E3	Wc	台形石器	黒曜石	1.65	1.30	0.55	1.0	40.407	-22.476	70.066	B群
4	Wc-253	E3	Wc	台形石器	黒曜石	1.25	1.30	0.6	0.5	41.090	-24.201	69.960	B群
5	A3Wb-35	A3	Wb	台形石器	チャート	1.95	1.15	0.55	1.0	8.806	-23.955	70.124	A群
6	D5Wb-4	D5	Wb	ナイフ形石器	黒曜石	3.2	1.50	0.85	2.9	37.280	-44.059	69.214	
7	Wc-117	E2	Wc	ナイフ形石器	黒曜石	2.35	1.35	0.7	1.18	42.544	-19.274	70.166	B群
8	A3Wb-38	A3	Wb	ナイフ形石器	チャート	1.75	0.95	0.5	0.8	7.967	-23.812	70.126	A群
9	A3Wc-510	A3	Wc	ナイフ形石器	ホルンフェルス	6.2	2.75	1.28	16.6	8.556	-22.788	69.837	A群
10	C1Wc-345	C1	Wc	角筒状石器	砂岩	7.4	2.45	1.75	23.2	25.463	-6.094	70.504	
11	D3Wc-111	D3	Wc	角筒状石器	頁岩	3.6	1.40	0.75	3.6	37.496	-22.484	70.115	B群
12	D3Wc-96	D3	Wc	サイドスクレイパー	黒曜石	2.76	1.65	0.6	2.5	38.956	-21.982	70.114	B群
13	Wc-414	E3	Wc	鎌	黒曜石	2.0	1.30	0.55	1.2	42.310	-23.839	69.930	B群
14	D3Wc-76	D3	Wc	二次加工副片	黒曜石	2.2	1.33	0.95	1.8	39.689	-23.279	70.076	B群
15	C2Wc-420	C2	Wc	石核	黒曜石	3.2	2.8	2.35	18.6	28.368	-17.068	70.164	
16	B3Wc-366	B3	Wc	石核	頁岩	3.2	2.8	2.8	36.3	11.363	-23.379	70.210	A群
17	A3Wc-402	A3	Wc	石核	頁岩	5.3	5.7	4.2	107.3	5.675	-21.556	69.981	A群
18	B2Wc-441	B2	Wc	石核	頁岩	3.85	5.45	6.05	130.8	10.560	-18.511	69.990	A群
19	A4Wb-57	A4	Wb	礫石	砂岩	7.3	10.0	6.0	627.5	7.763	-37.344	69.534	
20	C2Wc-435	C2	Wc	礫石	砂岩	9.7	11.45	6.15	957.3	27.208	-13.975	70.109	
21	C2Wb-58	C2	Wb	礫石	砂岩	8.0	9.7	5.9	586.0	28.077	-16.884	70.275	
22	A3Wc-594	A3	Wc	礫石	砂岩	4.15	14.25	3.0	163.7	7.305	-21.384	69.812	A群
23	D3Wc-344	D3	Wc	礫石	砂岩	9.4	4.5	3.18	188.6	39.928	-23.180	69.948	B群
24	B3Wc-667	B3	Wc	礫石	砂岩	9.65	4.25	3.2	155.7	10.121	-23.725	69.785	A群

表2 Kr-Kb出土遺物計測表

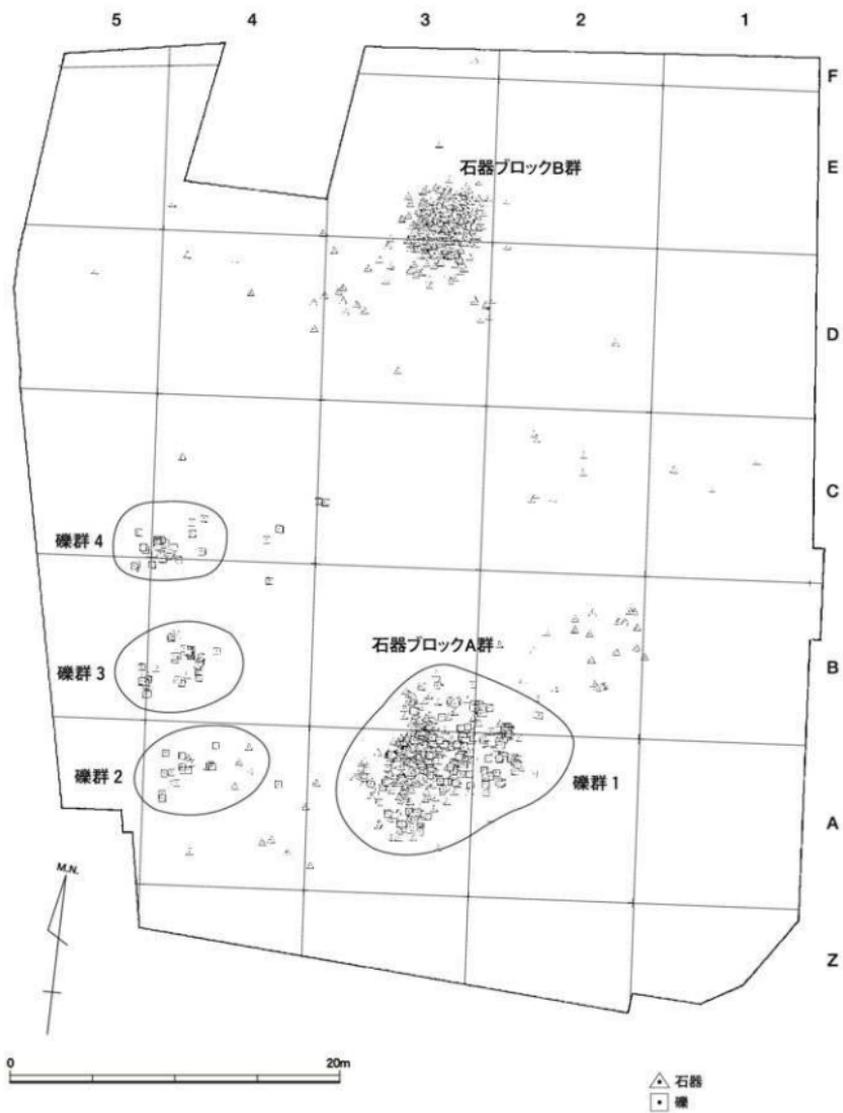


図15 Kr-Kb出土石器・礫分布図 (S=1/300)

### 第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

#### (1) 遺構

縄文時代早期の遺構のほとんどは、K-Ah下層のMB0（V層）から出土した。調査区中央部分に散

礫が広がり、大半の遺構が集中している。焼土を伴う土坑SC1・SC2や炉穴SP1、流紋岩石器ブロックが中央散礫の縁辺部に位置している。また、調査区西側の標高70mあたりに3つの小規模な散礫がひろがり、集石遺構5基や炉穴2群が展開する(図16)。

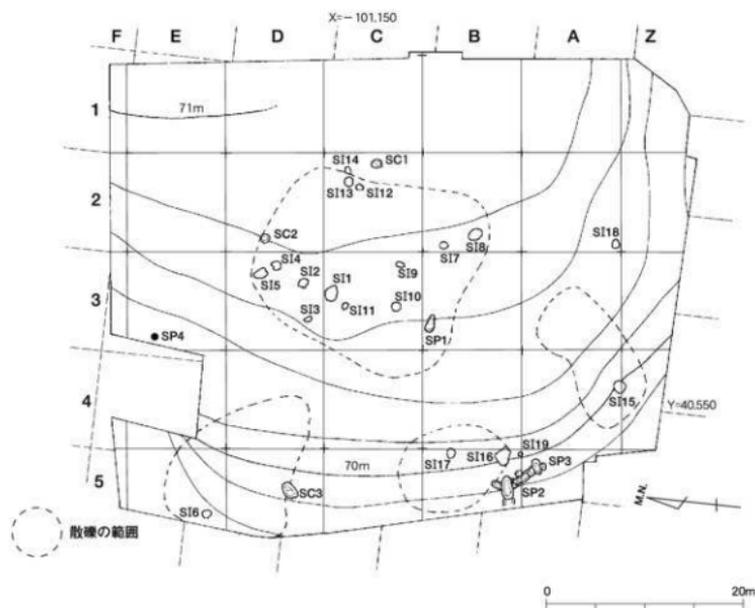


図16 縄文時代早期遺構分布図 (S=1/500)

遺構名	グリッド	長軸×短軸(m)	深さ(m)	掘込み	配石	遺物	疎密	炭化物	焼土	赤化礫	備考
SI 1	C 3	1.6×1.4	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 2	D 3	1.05×0.8	—	—	—	—	疎	—	—	○	配石の可能性
SI 3	D 3	0.9×0.6	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 4	D 3	1.1×1.0	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 5	D 3	1.4×1.05	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 6	E 5	1.12×0.79	0.17	—	—	—	密	○	—	○	黒炭混含む
SI 7	B 2	0.75×0.61	0.1	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 8	B 2	1.17×1.05	0.22	○	—	—	密	—	—	—	
SI 9	C 3	0.63×0.51	0.09	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 10	C 3	1.0×1.0	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 11	C 3	0.7×0.5	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 12	C 2	0.8×0.6	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 13	C 2	0.95×0.9	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 14	C 2	0.85×0.68	—	—	—	—	疎	—	—	—	
SI 15	A 4	1.47×1.27	0.37	○	—	—	密	—	—	○	
SI 16	B 5	1.68×1.32	0.63	○	—	—	密	○	—	○	2基の切り合い
SI 17	B 5	1.11×1.05	0.26	○	—	—	密	○	—	○	
SI 18	A 2	0.91×0.81	0.31	○	—	—	密	○	—	○	
SI 19	B 5	0.78×0.56	0.23	○	—	土器片	密	○	—	—	

表3 集石遺構計測表

① 集石遺構 (図17~19)

集石遺構は全部で19基検出された。SI8・15~19は掘り込みのあるグループで、それ以外は掘り込みを持たないグループである。すべての集石遺構に配石は確認できなかった。

SI1はサイズが1.6m×1.4mで、掘り込みは見られない。

SI2はサイズが1.05m×0.8mで、掘り込みは見られない。中央に大きめの赤化した垂円礫が1個あり、現存している礫を集石遺構の下部構造とすると配石の可能性もある。

SI3はサイズが0.9m×0.6mで、掘り込みは見られない。

SI4はサイズが1.1m×1.0mで、掘り込みは見られないが、中心部に向かって礫を傾けて置こうとする意図が看取される。

SI5はサイズが1.4m×1.05mで、掘り込みは見られない。比較的大きめの赤化した垂円礫で構成されている。確認調査時のトレンチ12で検出したものである。

SI6は1基のみ単独で調査区西端で検出され、サイズが0.9m×0.85m、深さが17cmでほぼ円形である。中心部に炭化物混じりの黒色土が確認できたが、断面では掘り込みは確認できなかった。赤化礫以外に

も黒変した礫も含まれる。

SI7はサイズが0.75m×0.61m、深さが10cmである。掘り込みは見られない。

SI8はサイズが1.17m×1.05m、深さが22cmである。掘り込みが認められる。

SI9はサイズが0.63m×0.51m、深さは9cmである。明瞭な掘り込みはないが、中央部にわずかにくぼみが認められる。

SI10はサイズが1.0m×1.0mで、掘り込みは見られない。

SI11はサイズが0.7m×0.5mで、掘り込みは見られない。SI12、SI13、SI14は近接して検出され、サイズは順に0.8m×0.6m、0.95m×0.9m、0.85m×0.65mで、いずれも掘り込みは見られない。

SI15はサイズが1.47m×1.27m、深さは37cmである。掘り込みが認められ、赤化礫を含んでいる。

SI16はサイズが1.68m×1.32m、深さは63cmである。掘り込みがあり、赤化礫・炭化物を含んでいる。2基が切り合っており、北側部分が先行する。

SI17はサイズが1.11m×1.05m、深さは26cmでⅡb層面で検出された。掘り込みが認められ、赤化礫・炭化物を含んでいる。断面図にある巨礫の下にも小型礫が詰まっており、巨礫は配石等ではない。

SI18はサイズが0.91m×0.81m、深さは31cmであ

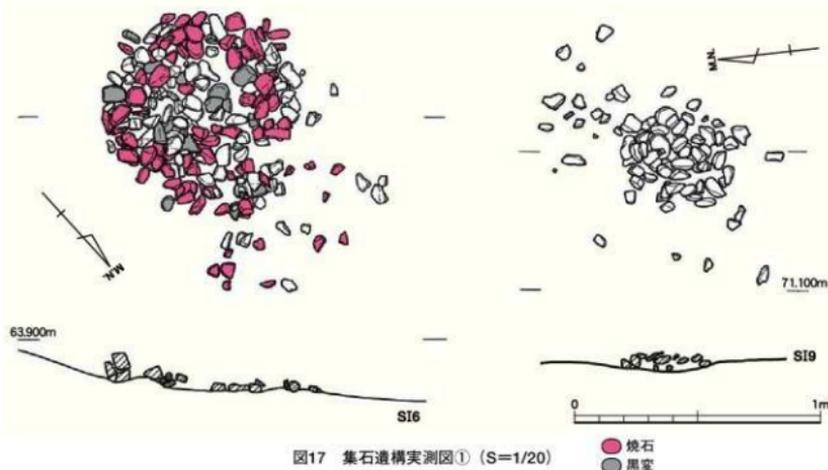


図17 集石遺構実測図① (S=1/20)

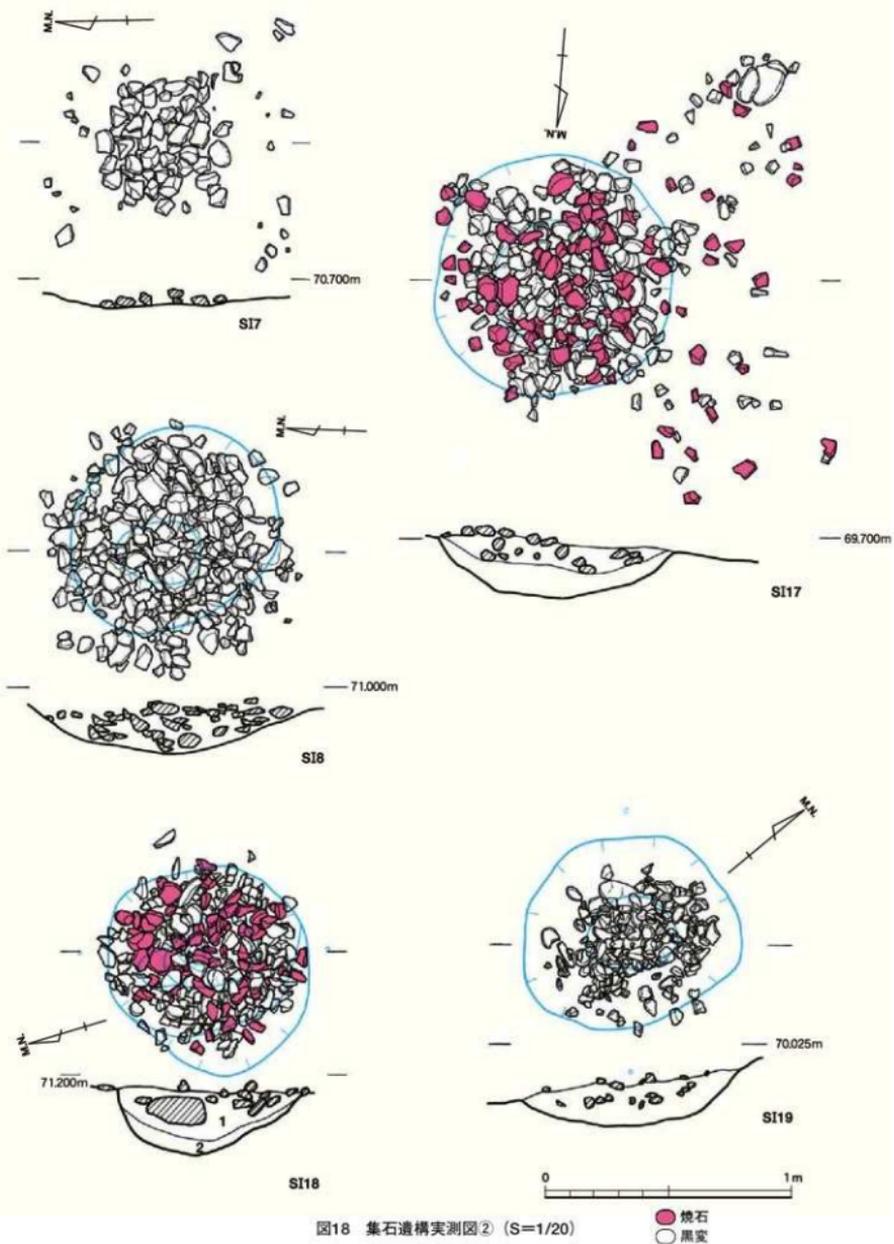


図18 集石遺構実測図② (S=1/20)

● 焼石  
○ 黒塗



図19 集石遺構実測図③ (S=1/20)

● 焼石  
○ 黒炭

る。掘り込みが認められ、赤化礫・炭化物を含んでいる。

SI19はサイズが0.78m×0.56m、深さは23cmでⅡb層面で検出された。掘り込みが認められ、埋土中に径1mm程度の炭化物を全体的に非常に多く含んでいる。土器片が1点出土しているが、小片のため図化はしていない。

図化されていない集石遺構は全て掘り込みが見られず、礫の集中度も低いことから、平板実測による範囲の記録と平面および断面の写真記録だけにした。

## ② 炉穴 (図20)

炉穴は2基、1群(9基)の計11基を検出した。SP1は中央散礫の縁辺部B3グリッドで、SP2・SP3は調査区南西隅A5・B5グリッドで、SP4は調査区北側E3グリッドで検出された。SP1・SP4はそれぞれ単独で、SP2・SP3はそれぞれ切り合い、群をなしている。SP4はE3グリッドで検出し、断面図は存在するが平面図は記録できなかった。どの炉穴もⅤ層(MB0)面では検出できず、Ⅱ層(Kr-Kb)面まで掘り下げて平面プランを確定した。

SP1はB3グリッドに位置し、上場1.61m×0.74m、下場1.44m×0.49m、深さ30cmであり、等高線に直交する形で掘り込まれている。足場付近の埋土は硬くしまっており、炉部付近の埋土には焼土が残り、少しくびれた部分はKr-Kbの硬質ブロックが残り、ブリッジが残存していたと考えられる。埋土に礫・赤化礫・炭化物・焼土塊等が見られた。

SP2-1はB5グリッドに位置し、上場2.35m×1.10m、下場1.95m×0.77m、深さ57cm+αであり、等高線に直交する形で掘り込まれている。床面付近の埋土は非常に硬くしまり、炉部の床面全体に焼土が見られる。SP2の炉穴群の中では最後に構築されたものであり、SP2-2の炉部を足場に作り替えている。埋土中に土器片、礫が出土した。土器片は小片であり、表面全体が加熱によると思われるススが附着しボロボロであることから、図化はしなかった。

SP2-2はB5グリッドに位置し、上場0.26m+

α×0.90m+α、下場0.65m+α×0.65m+α、深さ34cm+αであり、等高線に直交する形で掘り込まれている。調査区西端であることから、遺構の全容は把握できなかった。炉部は、SP2-1の足場のためほとんどなくなっているが、焼土を含む床面が一部残存している。

SP2-3はB5グリッドに位置し、上場1.25m+α×0.76m+α、下場1.08m+α×0.52m+α、深さ34cm+αであり、等高線に平行する形で掘り込まれている。残存部分はその形状から足場であると推定されるが、床面の一部で焼土を検出した。

SP2の3基の新田関係は、その断面の位置関係から3→2→1の順に新しくなると推測される。

SP3は6基の土坑が切り合っており、調査当時はそのうち4基のみを炉穴と認定していたが、検出状況を総合的に判断した結果、6基全てを炉穴として報告する。最終的に炉穴と判断した2基はSP3-5とSP3-6である。

SP3-1はA5グリッドに位置し、上場1.65m×0.75m、下場1.20m×0.47m、深さ65cmであり、等高線に直交する形で掘り込まれている。SP3の炉穴群の中では最後に構築されたものである。床面東側に焼土が残存しており炉部と推定される。足場は、SP3-2の足場付近から掘り込まれている。

SP3-2はA5グリッドに位置し、上場0.55m+α×0.65m+α、下場0.38m+α×0.46m+αであり、等高線に平行する形で掘り込まれている。床面南側に焼土が残存しており炉部と推定される。

SP3-3はA5グリッドに位置し、上場0.83m+α×0.98m+α、下場0.40m+α×0.63m+α、深さ51cm+αであり、等高線に平行した形で掘り込まれている。床面南側に焼土面が残存しており炉部と推定される。

SP3-4はA5・B5グリッドにわたって位置し、上場1.74m×0.84m+α、下場1.44m+α×0.55m+α、深さ37cm+αであり、等高線に平行した形で掘り込まれている。床面南側に焼土面が残存しており炉部と推定される。足場にあたる床面に約10cmの大きさの礫が1個出土した。

SP3-5はB5グリッドに位置し、上場0.60m+

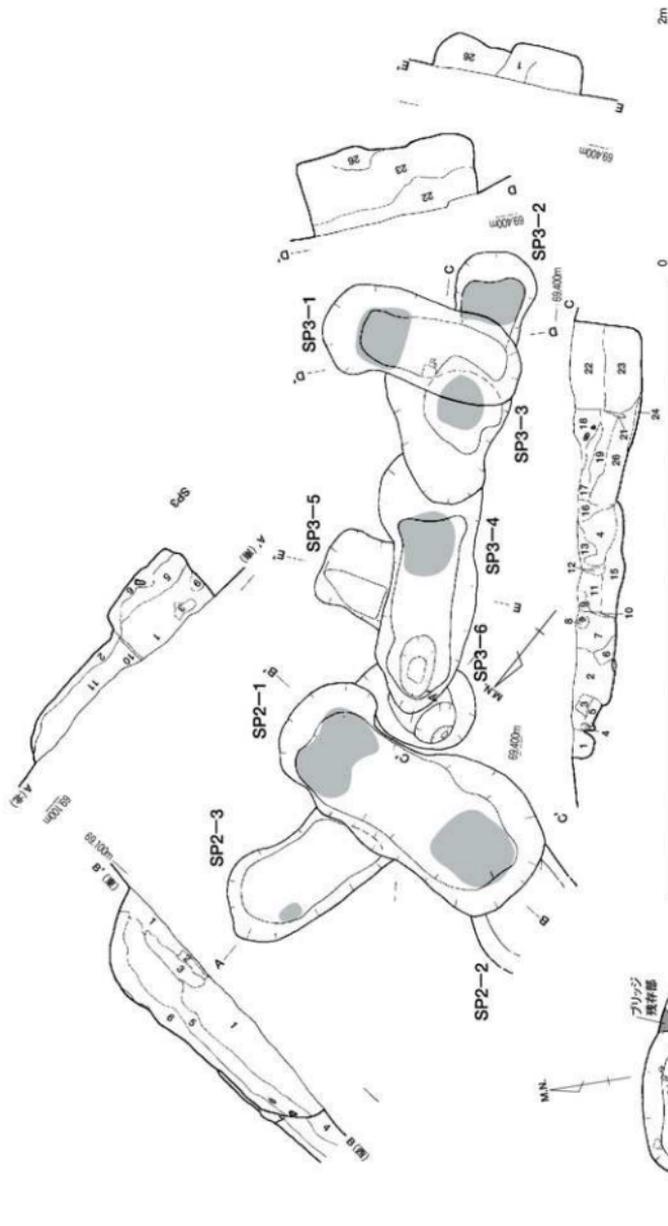


図20 炉穴実測図 (S=1/40)

● 焼土

表4 炉穴計測表

遺構名	ブリッジ	上層(m)	下層(m)	高さ(m)	遺物等	炭化物	焼土	備考
SP1	B3	1.63±0.24	1.44±0.69	0.30	—	○	○	ブリッジ(痕跡あり)
SP2-1	B5	2.35±1.10	1.95±0.77	0.37±0	—	○	○	—
SP2-2	B5	0.28±0×0.90±0	0.65±0×0.65±0	0.34±0	土層片	—	—	—
SP2-3	B5	1.28±0×0.76±0	1.08±0×0.82±0	0.34±0	—	○	○	—
SP3-1	A5	1.65±0.75	1.20±0.47	0.55	—	○	○	—
SP3-2	A3	0.58±0×0.65±0	0.38±0×0.46±0	0.51±0	—	○	○	—
SP3-3	B5	0.85±0×0.85±0	0.55±0×0.55±0	0.37±0	—	○	○	—
SP3-4	B5	1.74±0×0.84±0	1.44±0×0.85±0	0.37±0	—	○	○	—
SP3-5	B5	0.88±0×0.67±0	0.52±0×0.37±0	0.28±0	—	○	○	—
SP3-6	B5	0.97±0.66±0	0.3±0×0.45±0	0.17	—	○	○	—
SP4	E3	1.03±0.36±0	0.69±0	0.36	—	○	○	ブリッジ(痕跡あり)

**SP1 土層注記**

- 黒褐色土 (2.5Y 3/1)
  - 微小～5mm径の炭化物粒を少し含む。下部(破線の下) 焼土粒をわずかに含む。微小な白色粒を多く含む。非常に硬くしまっている。やや粘性あり。礫を少し含む。
- 黒褐色土 (2.5Y 3/2)
  - 微小な炭化物をわずかに含む。下部(破線の下)に焼土粒をわずかに含む。微小な白色粒を多く含む。非常に硬くしまっている。粘性なし。
- 黒褐色土 (2.5Y 3/2)
  - 黄褐色土 (2.5Y 5/6) がわずかに混ざり、2よりやや明るい土色である。非常に硬くしまっている。粘性なし。
- 黒褐色土 (2.5Y 3/2)
  - 微小な炭化物を少し含む。微小～2mm径の焼土粒を少し含む。微小な白色粒を多く含む。埋土中で一番硬くしまっている。粘性なし。
- 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
  - 微小～5mm径の炭化物粒を少し含む。微小～2mm径の焼土粒を多く含む。微小な白色粒を少し含む。硬くしまっている。粘性なし。
- 黄褐色土 (2.5Y 5/6) が少し混ざり、微小な炭化物粒をわずかに含む。微小な焼土粒をごくわずかに含む。微小な白色粒を少し含む。硬くしまっている。粘性なし。
- 黒褐色土 (2.5Y 3/2)
  - 黄褐色土をごくわずかに含む。微小な白色粒を少し含む。やややわらかい。粘性ごくわずかにあり。
- Kr-Kb (Ⅷb層) のブロック  
如穴のブリッジと思われる。

**SP2 土層注記**

- 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
  - しまり非常に強く、粘性非常に弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒・白色粒を多く含む。径1mm程度の炭化物を多く含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/3)
  - しまり、粘性ともにやや弱い。径1mm以下の白色粒、透明色粒を少し含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
  - しまり非常に強く、粘性やや強い。径1～2mm以下の黄褐色粒、白色粒、透明色粒をやや多く含む。黄褐色土 (10YR 5/6) が入り、床状になっている。径2mm以下の炭化物を少し含む。埋土が混れて混ざっている感じ。ATのブロックも含む。
- 暗褐色土 (10YR 3/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、径1mm程度の白色粒を多く含む。径1mm以下の炭化物をやや多く含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
  - しまり非常に強く、粘性やや強い。径1～3mm以下の黄褐色粒、径1mm程度の白色粒をやや多く含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、白色粒を若干含む。径1～3mm以下の炭化物を少し含む。床面に焼土が付いている。
- 暗褐色土 (10YR 3/3)
  - しまりやや強く、粘性やや弱い。径1mm程度の黄褐色粒、白色粒を多く含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/2)
  - しまりやや強く、粘性弱い。径1～2mm以下の炭化物を少し含む。埋土中に赤褐色土 (2.5YR 4/6) が 入るが焼土と思われる。
- 褐色土 (10YR 4/4)
  - しまり弱く、粘性やや弱い。径1mm以下の黄褐色粒、白色粒、透明色粒を多く含む。径1mm程度の炭化物をやや多く含む。黄褐色土 (10YR 5/6) が入り、床状になっている。
- 褐色土 (10YR 4/4)
  - しまり、粘性ともにやや弱い。径1mm以下の白色粒、透明色粒を少し含む。径1mm以下の炭化物を少し含む。
- 暗褐色土 (10YR 3/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄色粒、径1mm程度の白色粒を非常に多く含む。径1～2mm以下の炭化物をやや多く含む。
- 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の焼土をごくわずかに含む。径1mm以下の白色粒を非常に多く含む。径1～2mm以下の炭化物をやや多く含む。床状にATが入っている。

**SP3 土層注記**

- 暗褐色土 (10YR 3/4)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、径1mm程度の白色粒を多く含む。床状に黄褐色土 (10YR 5/6) を含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
  - しまりやや弱く、粘性弱い。径1mm程度の黄褐色粒、白色粒、透明色粒を少し含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。

- 暗褐色土 (10YR 3/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径15mmの黄褐色粒を1粒含む。径1mm以下の白色粒、透明色粒をやや多く含む。径1mm程度の炭化物をごく少量含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1mm以下の白色粒、透明色粒を少し含む。床状に黄褐色土 (10YR 5/6) を含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 4/4)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径2～3mm程度の黄褐色粒をごく少量含む。径1mm以下の白色粒、透明色粒を少し含む。径1mm程度の炭化物を少量含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒をごく少量含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 2/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の白色粒を多く含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 褐色土 (7.5YR 4/6)
  - しまりやや弱く、粘性弱い。径1mm以下の白色粒、透明色粒を少し含む。
- 暗褐色土 (10YR 2/3)
  - しまりやや強く、粘性弱い。径1mm程度の黄褐色粒、白色粒、透明色粒をやや多く含む。
- 褐色土 (7.5YR 4/4)
  - しまり、粘性ともに弱い。径1mm以下の黄褐色粒、白色粒を少し含む。径1～2mm程度の炭化物をごく少量含む。
- 褐色土 (7.5YR 4/6)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm程度の黄褐色粒、白色粒を多く含む。径1～2mm以下の炭化物をやや多く含む。
- 褐色土 (7.5Y 4/6)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径2mmの炭化物を1粒含む。径1mm以下の黄褐色粒、白色粒を多く含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
  - しまりやや強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、白色粒をやや少し含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、白色粒をやや多く含む。径1mm程度の炭化物を少し含む。
- 黒褐色土 (7.5YR 2/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、白色粒を多く含む。径1～10mm程度の赤褐色 (2.5YR 4/6) の焼土粒を多く含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/3)
  - しまりやや弱く、粘性弱い。径1mm程度の黄褐色粒をごく少量含む。径1mm以下の白色粒を多く含む。
- 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
  - しまりやや弱く、粘性弱い。径1mm程度の白色粒を多く含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1mm程度の黄褐色粒、白色粒、透明色粒を多く含む。黄褐色土 (10YR 5/6) が少しだけ混ざり、床状になっている。
- 黒褐色土 (10YR 2/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒を多く含む。径1mm程度の白色粒をやや多く含む。
- 黒褐色土 (10YR 2/3)
  - しまり非常に強く、粘性やや弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、白色粒をやや多く含む。
- 暗褐色土 (10YR 3/4)
  - しまり弱く、粘性やや弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒をごく少量含む。埋土はやわらかい。
- 黒褐色土 (10YR 2/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒、径1mm以下の白色粒を多く含む。黄褐色土 (10YR 5/6) を床状に含む。
- 黒色土 (7.5YR 1/1)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒を少し含む。径1mm以下の白色粒を多く含む。径1mm程度の炭化物をごく少量含む。
- 暗褐色土 (10YR 2/3)
  - しまり非常に強く、粘性やや弱い。径1～2mm程度の黄褐色粒、白色粒を少し含む。ATのブロックを含む。
- 暗褐色土 (10YR 3/2)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1～2mm以下の黄褐色粒を少し含む。径1mm程度の白色粒を多く含む。径1～3mm以下の炭化物をやや多く含む。黄褐色土 (10YR 5/6) を含み、床状になっている。
- 黒褐色土 (10YR 2/3)
  - しまり非常に強く、粘性弱い。径1mm程度の白色粒を多く含む。径1～10mm以下の赤褐色 (2.5YR 4/6) の焼土粒を多く含む。

$\alpha \times 0.67\text{m} + \alpha$ 、下場 $0.52\text{m} + \alpha \times 0.27\text{m} + \alpha$ 、深さ $28\text{cm} + \alpha$ であり、等高線に直交する形で掘り込まれている。焼土面は確認できないが埋土には炭化物が認められ、遺構の形状から残存部分が足場と推定される。

SP3-6はB5グリッドに位置し、上場 $0.97\text{m} \times 0.66\text{m} + \alpha$ 、下場 $0.3\text{m} + \alpha \times 0.45\text{m} + \alpha$ 、深さ $17\text{cm}$ であり、等高線に直交した形で掘り込まれている。SP3-5同様、焼土面は確認できないが残存部分が足場と推定される。

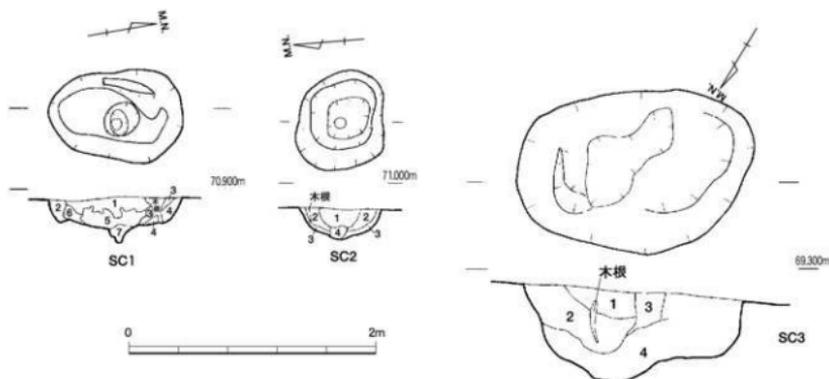
SP3の6基の新旧関係は、5と6の前後関係は不明ながら一番古く、以下4→3→2→1の順に新しくなる。

SP4はE3グリッドに位置し、上場が $1.03\text{m} \times 0.36\text{m} + \alpha$ 、下場の長軸が $0.69\text{m}$ 、短軸は不明、深

さは $26\text{cm}$ であり、等高線に直交した形で掘り込まれている。SP4は断面図から判断するとブリッジが残していると考えられる。床面東側が炉部、西側が足場と推定される。

### ③ 土坑 (図21)

土坑は3基検出した。SC1はC2グリッドで、SC2はD2グリッドで、SC3はD5グリッドでそれぞれⅧ層 (Kr-Kb) 面まで掘り下げて検出した。SC1とSC2は埋土に焼土を伴い、特にSC1は焼土を多く含む。SC3は床面や壁面に焼土は確認できなかったことや埋土状況や遺構の形状から調査当時は陥し穴状遺構の可能性も考えられたが、明確に陥し穴状遺構と判断できる材料が少ないことから土坑として報告する。



#### SC2 土層注記

- 1 濃い黄褐色土 (5YR 4/4)  
微小～径1cmの焼土粒を非常に多く含む。径2mm以下の炭化物粒を多く含む。非常に硬くしまっている。粘性ほとんどなし。
- 2 褐色土 (7.5YR 4/3)  
微小～径5mmの焼土粒を多く含む。径2mm以下の炭化物粒を少し含む。非常に硬くしまっている。1よりわずかに粘性あり。
- 3 黒褐色土 (7.5YR 3/1)  
微小～径2mmの焼土粒を少し含む。径2mm以下の炭化物粒をわずかに含む。硬くしまっている。やや粘性あり。
- 4 Kr-Kbのブロック混じり

#### SC3 土層注記

- 1 黒褐色土 (10YR 3/2) 径3mm以下の焼土粒を多く含む。非常に硬くしまり強い。粘性なし。
- 2 黒褐色土 (2.5YR 3/1) 非常に硬く、しまり強い。径2mm程の黄褐色土ブロックが埋点状に多く入る。粘性なし。
- 4 黒色土 (2.5YR 2/1) 非常に硬く、しまり強い。粘性なし。径5mm以下の炭化物粒を少し含む。

※ 3は土層注記の記録なし。

図21 土坑実測図 (S=1/40)

遺構名	グリッド	上場 (m)	中場 (m)	下場 (m)	遺物	炭化物	焼土	備考
SC1	C2	1.09×0.76	0.88×0.40	0.30×0.26	—	○	○	
SC2	D2	0.87×0.76	0.61×0.56	0.41×0.34	—	○	○	
SC3	D5	1.55×1.3	1.32×0.82	1.0×0.45	—	○	○	

表5 土坑計測表

## (2) 遺物

遺物は調査区全域にみられるが、中央部の散礫部分に比較的多く分布している。製品は石鎌が中心で分布は調査区南半分に偏っている。

### ① 土器 (図24・25 25～42)

25は前平式系深鉢の口縁部である。口唇部は平坦で口縁から胴部にかけてわずかに張り出す。外面に横方向の貝殻条痕が施文され、口縁端部外面に貝殻刺突文がめぐる。

26～28は別府原タイプの深鉢である。26～28は口縁端部外面に貝殻刺突文がめぐる。29～31は胴部で外面をナデ消している。32・33は底部で、それぞれ底面に網状の繊維痕がみられる。

34～37は中原式のⅣ期の深鉢である。外面に斜位の貝殻条痕が施されている。34の口縁端部は平坦な面取りがなされているが、全体として丸くまとまっている。口縁部はやや開き気味であり、胴部はわずかに張り出している。条痕は口縁から胴部上半部までで下半部は確認できない。35は口縁部で径5mmの焼成後穿孔が内外面から施され貫通している。

40～42は無文土器である。口縁部と胴部と底部は接合しないが、同一個体の可能性は高い。丸底の深鉢と考えられる。胎土に繊維が混入している。

### ② 石器 (図26 43～62)

43～52は打裂石鎌である。43～45はホルンフェルス製、46～48はチャート製、49～51は黒曜石製、52は頁岩製で、以下のように分類する。

全体の形を、

I) 正三角形

II) 二等辺三角形

の2種類に分ける。さらに基部加工を、

i) 挟りがU字状

ii) 挟りがV字状

iii) 挟りがないか、ほとんど認められない

の3つに細分する。すると、I ii類が43・45、残りはII類で、II i類が44・46・48・50・51、II ii類が47、II iii類が49・52、の4タイプに分けられる。

56は磨石であり、敲打痕もみられる。60は砥石で2面に擦痕があり、赤化し、ススが附着している。

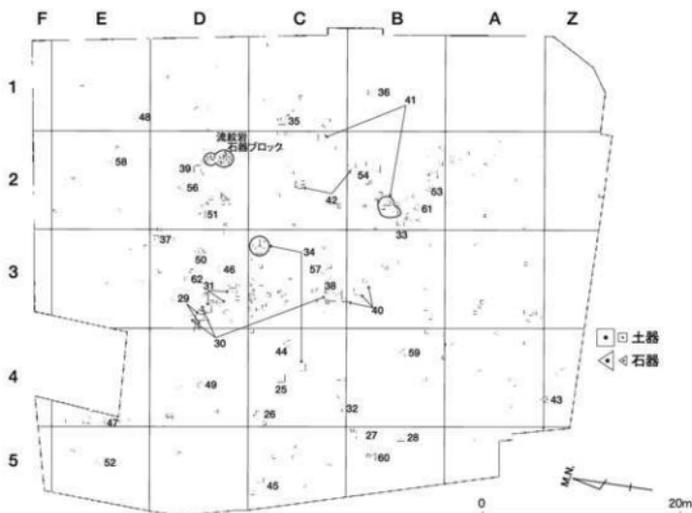


図22 縄文時代早期遺物分布図 (S=1/500)

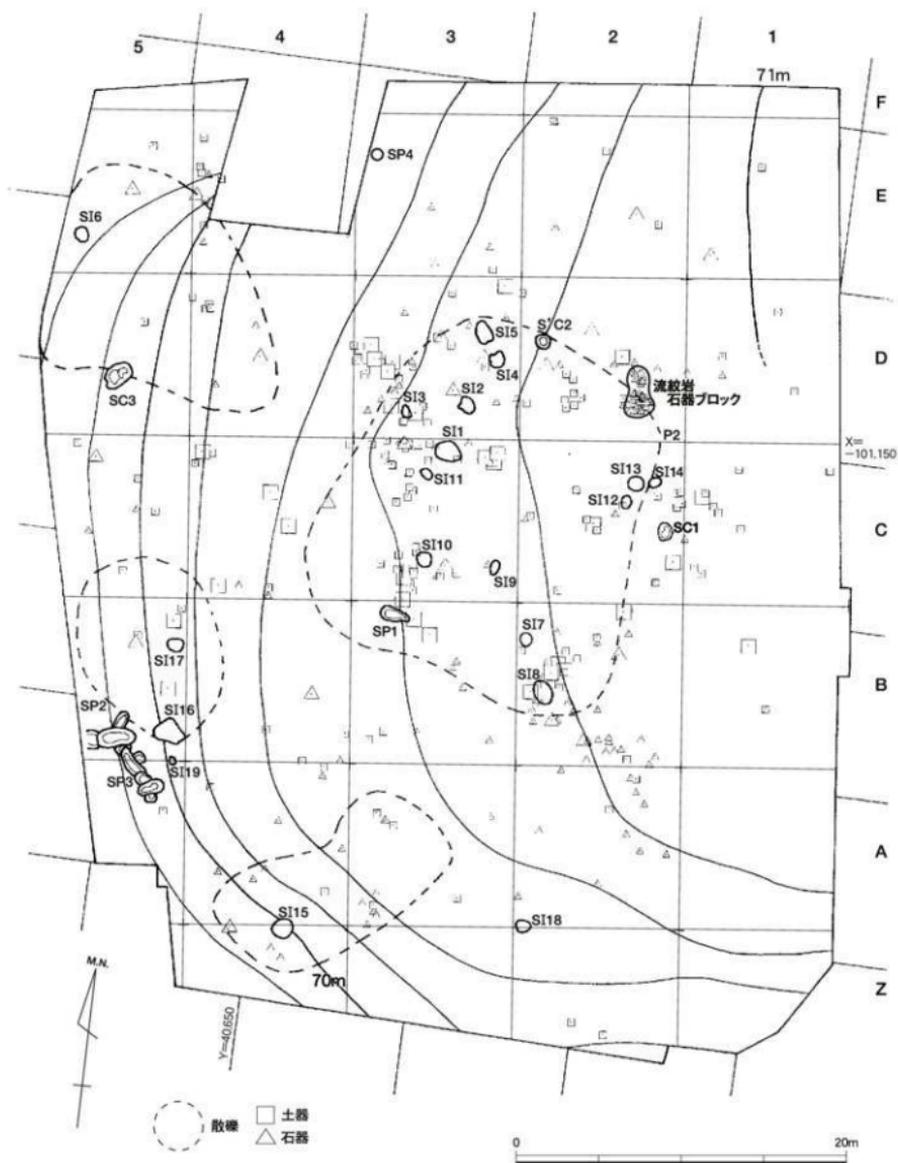


図23 縄文時代早期遺構・遺物分布図 (S=1/300)

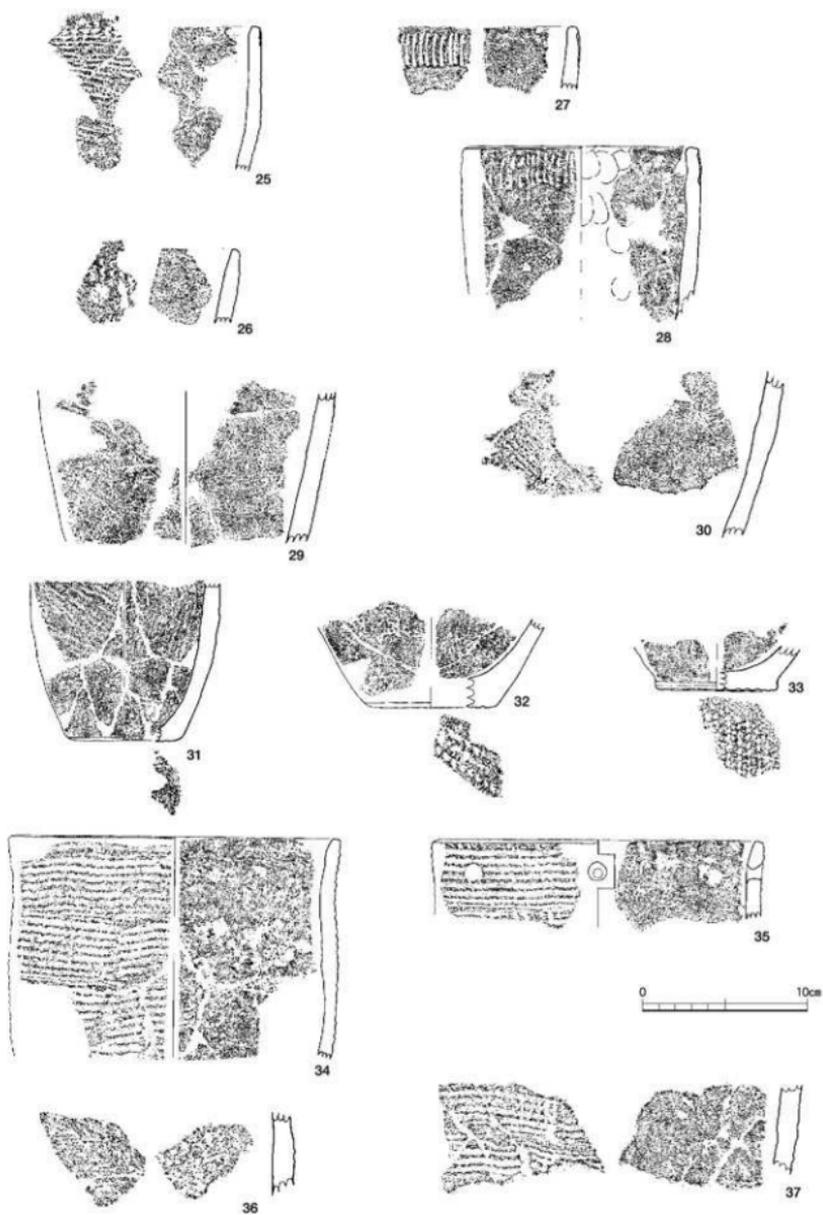


图24 绳文时代早期土器实测图① (S=1/3)

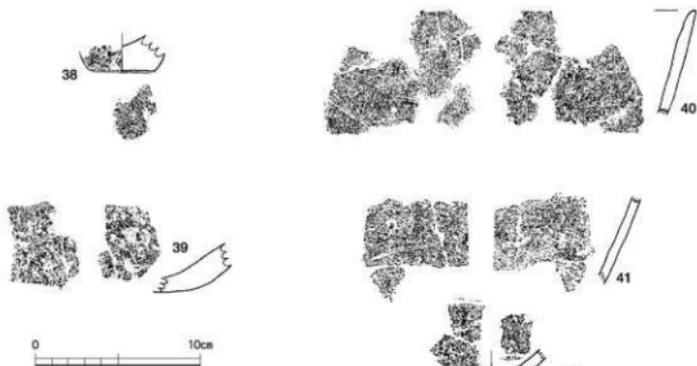


図25 縄文時代早期土器実測図② (S=1/3)

遺物番号	種別	器種・部位	注記番号	出土状況	層	法量 (cm)		手法・調整・文様ほか	色調		胎土	焼成	備考	
						口径	底径・高さ		外側	内側				
35	縄文土器	深鉢 口縁-胴部	V-123	C4	V	—	—	斜め方向の貝殻糸痕 白粉粒跡による光沢 粒状文	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 5/3)	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	3mm以下の白色粒を含む。	良好	両平式
36	縄文土器	深鉢 口縁	V-182	C4	V	—	—	ナテ 貝殻粒跡による 濃縮粒状文	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 7/3) 紫褐色 (2.5YR 6/3)	に濃い黄褐色 (100YR 6/3)	微細な浅黄褐色、透明光沢の粒を含む。	良好	両平型タイプ
37	縄文土器	深鉢 口縁	V-280	B15	V	—	—	指押きとナテ、貝殻 粒跡による濃縮粒状文	ナテ 微細粒	に濃い黄褐色 (100YR 7/3) 紫褐色 (2.5YR 6/3)	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	2mm以下の紫褐色粒、2mm以下の 灰白色、赤色、2mm以下の白色粒 のいずれの粒を含む。	良好	両平型タイプ
38	縄文土器	深鉢 口縁-胴部	V-327	B15	V	—	—	指押きとナテ、貝殻 粒跡による濃縮粒状文	ナテ 微細粒 準縄	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	4mm以下の紫褐色粒、1mm 以下の灰白色、紫褐色の粒を含む。	良好	両平型タイプ
39	縄文土器	深鉢 胴部	V-148・287	D1	V	—	—	斜め方向の貝殻糸痕 紫褐色粒状ナテが顕し	ナテ	浅黄褐色 (2.5YR 6/4) 紫褐色 (2.5YR 8/4)	浅黄褐色 (2.5YR 8/4)	2mm以下の紫褐色、灰白色粒、1mm 以下の灰白色を含む。	良好	両平型タイプ
40	縄文土器	深鉢 胴部	V-147・226・ 309	C1 B1	V	—	—	斜め方向の貝殻糸痕	ナテ	に濃い黄褐色 (2.5YR 7/6)	浅黄褐色 (2.5YR 8/4)	2mm以下の紫褐色、1mm以下の濃 縮粒状の紫褐色を含む。	良好	両平型タイプ
41	縄文土器	深鉢 胴部-胴部	V-75・270・ 273	D3	V	7.1	—	ナテ 条痕	ヒガキナテ 準縄	に濃い黄褐色 (2.5YR 7/6)	に濃い黄褐色 (2.5YR 7/6)	3mm以下の紫褐色、灰白色、紫色で丸 形の赤褐色を含む。	良好	両平型タイプ
42	縄文土器	深鉢 底面	63レ-9	C4	V	—	8.4	ナテ 裏面に網目状 痕	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 8/4)	に濃い黄褐色 (100YR 8/4)	微細な1mm以下の赤褐色不透明な粒 を含む。	良好	両平型タイプ 残存率 1/4
43	縄文土器	深鉢 底面	V-156	B2	V	—	7.3	ナテ 裏面に網目状 痕	ナテ	紫褐色 (2.5YR 6/6)	紫褐色 (2.5YR 6/6)	微細な1mm以下の赤褐色不透明な粒 の無色透明の灰白色の赤褐色を含む。	良好	両平型タイプ 残存率 1/4
44	縄文土器	深鉢 口縁-胴部	V-96・97・ 202・203・122	C3 C4	V	20.0	—	雙方斜めの貝殻糸痕 又と釘痕	ナテ 微細粒	に濃い黄褐色 (100YR 7/4) 紫褐色 (2.5YR 6/3)	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	3mm以下の浅黄褐色、浅紫色粒、 4mm以下の灰白色、紫褐色、紫色で 透明光沢のある粒を含む。	良好	中平式 1)厚反転底面による 判定
45	縄文土器	深鉢 口縁	V-106	C1	B1	30.1	—	斜め方向の貝殻糸痕	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 7/4)	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	4mm以下の浅黄褐色、5mm以下の 灰白色、赤色、2mm以下の白色粒 のいずれの粒を含む。	良好	両平型 厚反転底面
46	縄文土器	深鉢 胴部	V-216	B1	V	—	—	準縄が干すまでいる	準縄が干すまでいる	に濃い黄褐色 (100YR 7/4)	に濃い黄褐色 (100YR 6/4)	4mm以下の浅黄褐色、紫褐色、2mm以下の の紫褐色、紫褐色の赤褐色を含む。	良好	中平式
47	縄文土器	深鉢 胴部	V-R1	D1	V	—	—	斜め方向の貝殻糸痕	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 7/3)	に濃い黄褐色 (2.5YR 6/6)	2mm以下の白色、灰白色、紫褐色、紫 褐色の赤褐色、紫褐色の赤褐色の赤褐色 の赤褐色を含む。	良好	中平式
48	縄文土器	深鉢 口縁	V-280	C3	V	405	—	ヒガキ	ナテ	に濃い黄褐色 (2.5YR 6/3)	紫褐色 (2.5YR 7/3)	1〜3mm以下の赤褐色の粒、微細 な濃縮粒状の赤褐色を含む。	良好	残存率 1/4
49	縄文土器	深鉢 底面	V-9	D2	V	—	—	条痕 準縄している 準縄	ナテ	に濃い黄褐色 (2.5YR 6/3)	に濃い黄褐色 (2.5YR 6/3)	1〜2mm以下の赤褐色不透明な粒 の赤褐色を含む。	良好	両平型
50	縄文土器	深鉢 口縁部	V-227・224・ 93レ-10	B2 C2	V	—	—	ナテ	ナテ 微細粒	に濃い黄褐色 (100YR 6/3)	に濃い黄褐色 (100YR 6/3)	4mm以下の浅黄褐色、灰白色粒、2mm 以下の白色の赤褐色を含む。	良好	4) 42と同一致体
51	縄文土器	深鉢 胴部	V-116・120・ 211・213・215	B2 C2	V	—	—	ナテ	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 6/4)	に濃い黄褐色 (100YR 6/6)	2mm以下の浅黄褐色、灰白色の粒、2mm 以下の白色の赤褐色を含む。	良好	4) 42と同一致体
52	縄文土器	深鉢 底面	V-90・207	C2	V	—	—	ナテ	ナテ	に濃い黄褐色 (100YR 7/4)	に濃い黄褐色 (100YR 7/4)	4mm以下の紫褐色、紫褐色の粒、2mm 以下の白色の赤褐色を含む。	良好	4) 42と同一致体 赤丸

表6 縄文時代早期土器観察表

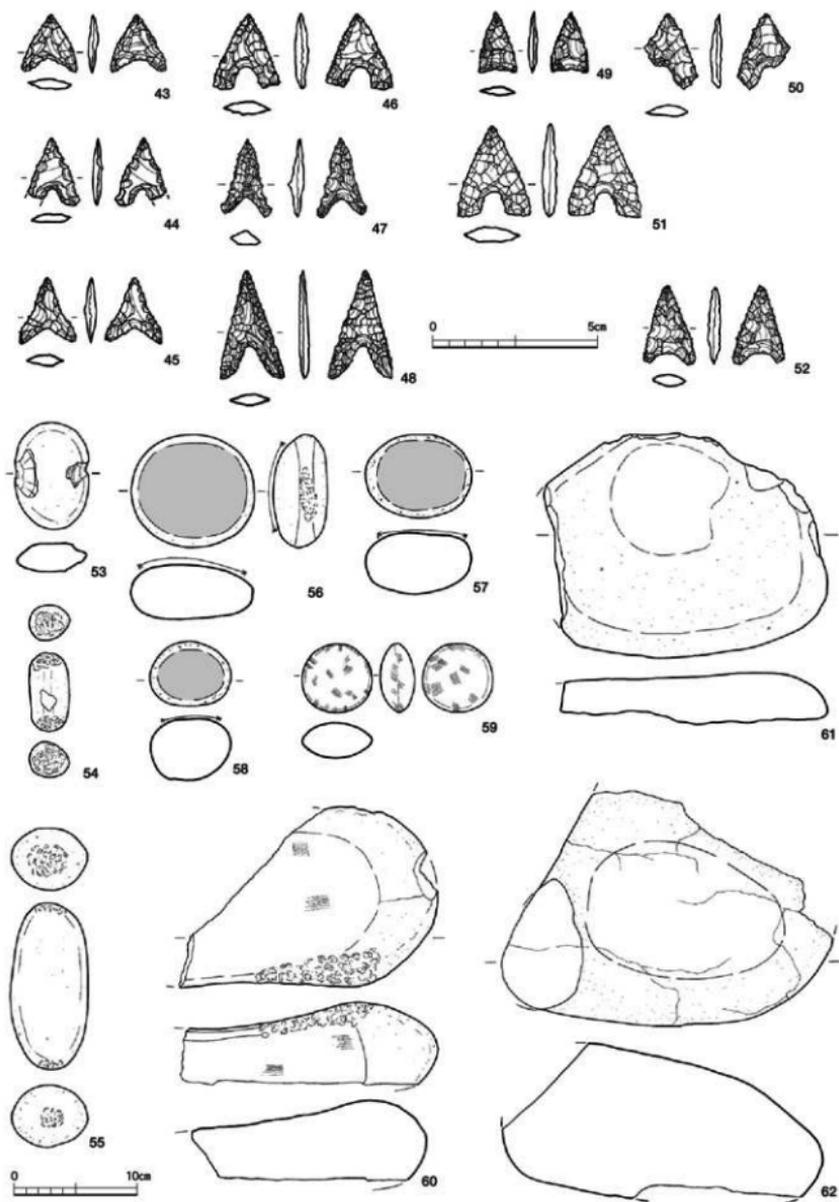


图26 縄文時代早期石器実測図 (S=2/3、1/4)

遺物番号	注記番号	グリッド	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X	Y	レベル (m)	備考
43	Z4V-286	Z4	V	石鏃	ホルンフェルス	2.45	1.6	0.3	0.4	-0164	-27.176	69.661	
44	C4V-54	C4	V	石鏃	ホルンフェルス	2.1	1.65	0.28	0.5	26.004	-31.521	70.553	
45	C4V-56	C5	V	石鏃	ホルンフェルス	2.0	1.8	0.35	0.5	28.612	-45.631	69.700	
46	D3V-6	D3	V	石鏃	チャート	2.3	2.0	0.4	1.1	32.975	-24.040	70.801	
47	E4V-63	E4	V	石鏃	チャート	2.35	1.5	0.45	0.6	44.807	-29.711	69.673	
48	E1V-138	E1	V	石鏃	チャート	3.25	2.25	0.3	1.0	41.494	-8.590	70.937	
49	D4V-62	D4	V	石鏃	黒曜石	1.85	1.2	0.25	0.4	34.942	-35.758	70.229	
50	D3V-7	D3	V	石鏃	黒曜石	2.25	1.6	0.3	0.6	35.025	-22.180	70.816	
51	D2V-86	D2	V	石鏃	黒曜石	2.75	2.2	0.45	1.9	34.623	-18.435	70.811	
52	5トレ-20	E5	V	石鏃	貫岩	2.4	1.59	0.4	1.0	45.100	-43.600	69.190	
53	B2V-132	B2	V	石鏃	砂岩	6.6	4.5	1.8	82.4	11.562	-15.878	70.756	
54	B2V-201	B2	V	鏃石	砂岩	6.4	3.35	2.9	94.2	16.839	-13.834	71.057	
55	C3V-315	C3	V	鏃石	砂岩	13.55	6.25	5.1	619.7	29.641	-26.932	70.633	
56	D2V-323	D2	V	鏃石	砂岩	9.2	10.0	4.4	565.4	36.789	-15.722	70.803	
57	C3V-176	C3	V	磨石	砂岩	6.85	8.7	5.06	401.8	22.207	-24.265	70.643	
58	E2V-290	E2	V	磨石	砂岩	5.3	6.6	5.2	257.9	43.954	-13.097	70.824	
59	B4V-177	B4	V	磨石	砂岩	5.6	5.7	2.85	126.5	14.173	-32.380	70.285	
60	B2V-307	B2	V	砥石	砂岩	14.7	20.4	6.7	1900	12.761	-17.831	70.729	
61	B5V-328	B5	V	台石	砂岩	18.1	22.8	4.5	2230	17.205	-43.064	69.663	
62	D3V-321	D3	V	台石	砂岩	19.05	26.75	12.08	5900	36.237	-24.788	70.577	

表7 縄文時代早期石器計測表

## 第4節 縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期を示す明確な遺構は検出できなかった。K-Ah面で検出した土坑群の中にその可能性を見いだすことができるかもしれないが、本節ではふれずにおく。土器に関しては南九州の縄文時代晩期にあたる黒川式を中心に出土している(図28)。石器に関してはⅢ層出土ながら縄文時代晩期と特定しづらい遺物も多かったため、「Ⅲ層出土の石器」として次節で紹介する。

63~92まで口縁部で、93のみ底部である。63~70

までは孔列土器である(図27)。63のみ貫通し、残りは木貫通である。いずれも口縁部が肥厚し、その直下で刺突を施している。どの土器も刺突の直径は4~5mmにおさまる。71・72は大型の深鉢で、口縁部下に突帯を有している。口唇部の変化のパリエーションとしては、78~86の各土器があげられる。84・85は波状口縁である。87~90は特徴的な口唇部をもつものである。86はミガキが全面に施されている。88・89は魚の鱗状の突起がみられる。91・92は大きく内湾し、広がる口縁部につながる部分である。

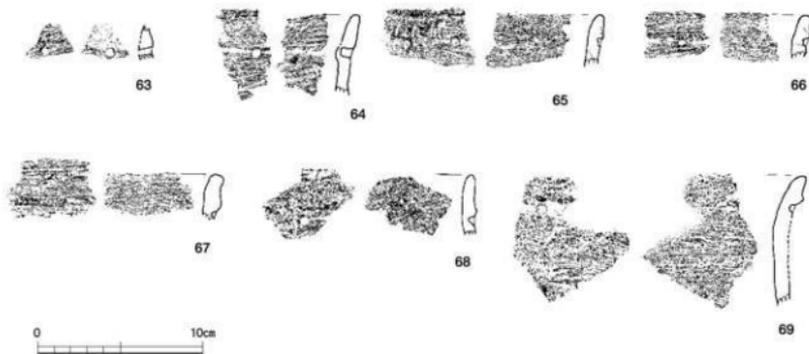


図27 縄文時代晩期土器実測図①(S=1/3)

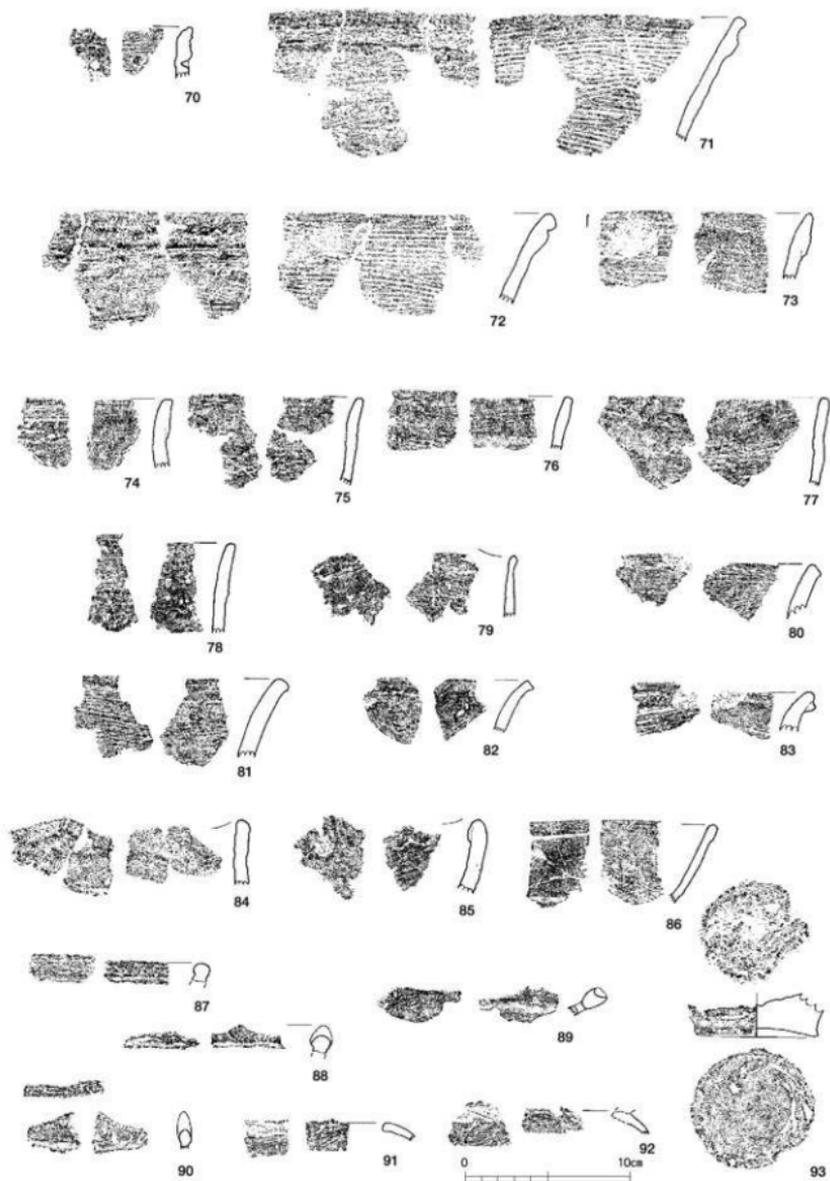


图28 縄文時代晚期土器実測図② (S=1/3)

遺物番号	種別	器種部位	注記番号	出土層	法量 (cm)	手法・装飾・文様ほか		色調		胎土	焼成	備考
						口縁	底縁	器高	外面			
63	縄文土器	漆黒 器底	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
64	縄文土器	漆黒 土器	S43-228+ E4 B	E4	SA 3 B	—	—	—	—	—	—	—
65	縄文土器	漆黒 土器	B4 B	B4	B	—	—	—	—	—	—	—
66	縄文土器	漆黒 土器	B4 B	B4	B	—	—	—	—	—	—	—
67	縄文土器	漆黒 土器	A4 B	A4	B	—	—	—	—	—	—	—
68	縄文土器	漆黒 土器	E4 B	D3	B	—	—	—	—	—	—	—
69	縄文土器	漆黒 土器	A1 B-68+69	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
70	縄文土器	漆黒 土器	A2 B-134	A2	B	—	—	—	—	—	—	—
71	縄文土器	漆黒 土器	A2 B・A1 B-87・Z2 B	Z2 A1 A3	B	—	—	—	—	—	—	—
72	縄文土器	漆黒 土器	Z2 B+A2 B	Z2 A2 B	B	—	—	—	—	—	—	—
73	縄文土器	漆黒 土器	A1 B	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
74	縄文土器	漆黒 土器	A1 B	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
75	縄文土器	漆黒 土器	A2 B-112+ 114	A2	B	—	—	—	—	—	—	—
76	縄文土器	漆黒 土器	A1 B	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
77	縄文土器	漆黒 土器	A2 B+・A2 B	A2	B+	—	—	—	—	—	—	—
78	縄文土器	漆黒 土器	A1 B-31	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
79	縄文土器	漆黒 土器	SA3	E4	SA 3	—	—	—	—	—	—	—
80	縄文土器	漆黒 土器	3ドレーエ	—	—	—	—	—	—	—	—	—
81	縄文土器	漆黒 土器	E1 B	E1	B	—	—	—	—	—	—	—
82	縄文土器	漆黒 土器	A2 B-196	A2	B	—	—	—	—	—	—	—
83	縄文土器	漆黒 土器	A3 B	A3	B	—	—	—	—	—	—	—
84	縄文土器	漆黒 土器	A2 B+A3 B	A2 A3 B	B	—	—	—	—	—	—	—
85	縄文土器	漆黒 土器	A2 B-133	A2	B	—	—	—	—	—	—	—
86	縄文土器	漆黒 土器	A3 B-208	A3	B	—	—	—	—	—	—	—
87	縄文土器	漆黒 土器	A1 B	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
88	縄文土器	漆黒 土器	Z1 B-270	Z1	B	—	—	—	—	—	—	—
89	縄文土器	漆黒 土器	A5 B	A5	B	—	—	—	—	—	—	—
90	縄文土器	漆黒 土器	A3 B	A3	B	—	—	—	—	—	—	—
91	縄文土器	漆黒 土器	A1 B	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
92	縄文土器	漆黒 土器	A1 B	A1	B	—	—	—	—	—	—	—
93	縄文土器	漆黒 底足	SE1	—	—	74	—	—	—	—	—	—

表8 縄文時代晩期土器観察表

## 第5節 III層出土の石器

ここで扱う石器はおおむねK-Ah直上の黒色土(III層)出土の石器である(図29・30)。94~97は石鏃である。97のみII層出土である。99は打ち欠きのない上下面側に研磨がみられる。100・102~108の

石斧はZ2・Z3グリッドにわたる直径3mほどの範囲内で出土した。104・107はその範囲内で接合している。109は土掘り用の石鏃と考えられる。他に石斧の製品が2点、未製品が1点出土しているが、出土地点が未確認であったため図化していない。

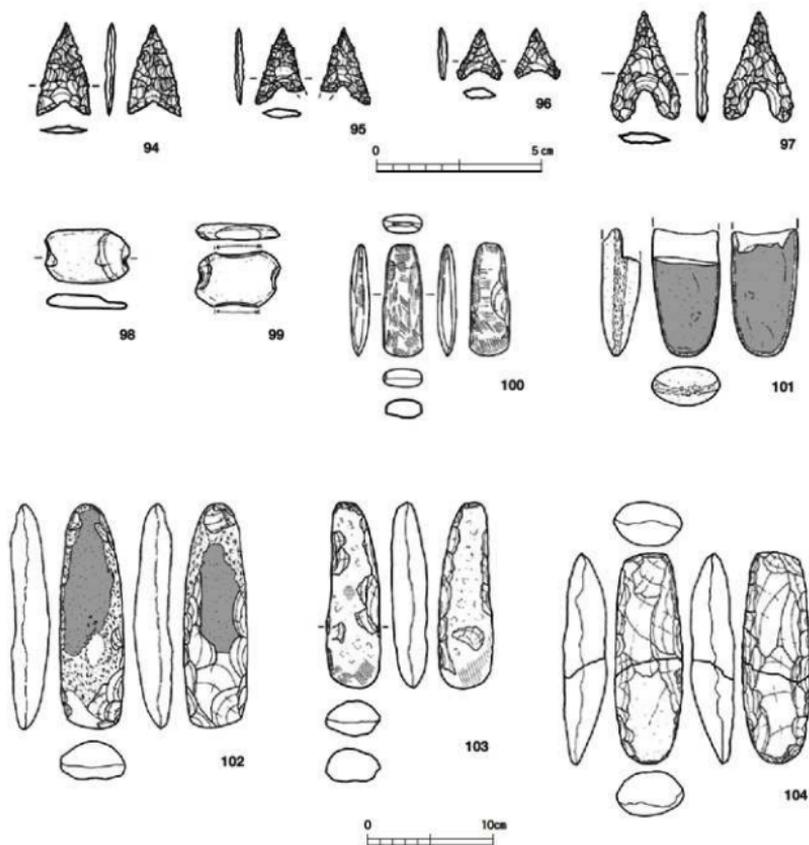


図29 III層出土石器実測図① (S=2/3,1/4)

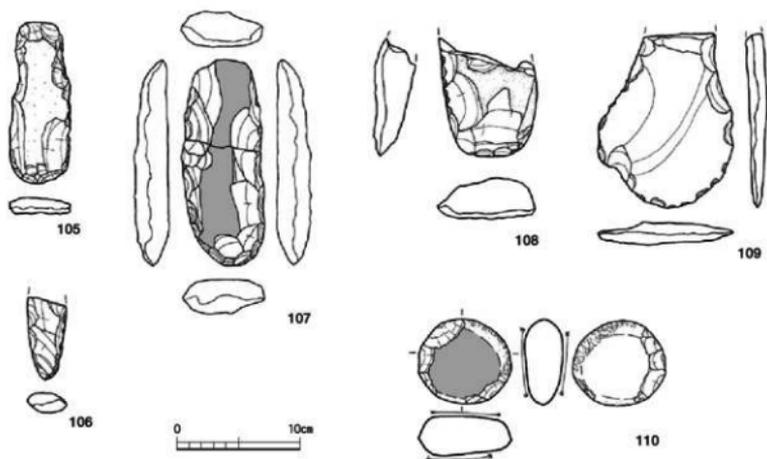


図30 III層出土石器実測図② (S=1/4)

器物番号	注記番号	グリッド	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
94	A 4 III	A 4	III	石鏃	黒曜石	2.80	1.60	0.25	0.9	
95	C 5 III-201	C 5	III	石鏃	黒曜石	2.30	1.50	0.25	0.6	
96	E 4 III-331	E 4	III	石鏃	黒曜石	1.60	1.40	0.30	0.5	標高産
97	A 3 II	A 3	II	石鏃	砂岩	3.15	2.00	0.30	1.5	
98	5トレII	—	II	石鏃	砂岩	3.40	5.15	0.90	21.7	
99	Z 3 III-318	Z 3	III	石鏃	砂岩	3.55	5.15	0.95	24.8	上下面に捲痕
100	Z 3 III-310	Z 3	III	磨製石斧	砂岩	9.15	3.20	1.50	71.0	
101	5トレII	—	II	打製石斧	砂岩	10.30	5.40	3.15	224.5	
102	Z 2 III-297	Z 2	III	局部磨製石斧	砂岩	18.20	5.20	3.10	309.7	
103	Z 2 III-290	Z 2	III	磨製石斧	砂岩	15.08	4.45	2.95	284.4	
104	Z 3 III312+313	Z 3	III	局部磨製石斧	砂岩	17.05	5.45	3.55	449.7	接合資料
105	Z 3 III-321	Z 3	III	打製石斧	ホルンフェルス	20.50	4.60	1.40	108.5	
106	Z 2 III-315	Z 2	III	打製石斧	砂岩	6.60	3.15	1.55	39.1	刃部のみ
107	Z 2 III-302+ Z 3 III-314	Z 2 Z 3	III	局部磨製石斧	ホルンフェルス	16.50	6.50	2.80	306.9	接合資料
108	Z 3 III-311	Z 3	III	打製石斧	砂岩	9.55	8.05	3.35	228.9	刃部のみ
109	C 5 III	C 5	III	打製石斧	ホルンフェルス	14.00	11.00	1.80	209.4	
110	A 3 III	A 3	III	磨製石	砂岩	6.90	7.50	3.20	243.3	

表9 III層出土石器計測表

## 第6節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

弥生時代から古墳時代にかけての遺構としては竪穴住居跡6軒、土坑10基、柱穴多数を検出した。竪穴住居跡および土坑は、ともに検出順にSA1～6、SC4～13と報告する(図31)。

SA1は調査区東端で検出され、炭化材が残る焼失住居である。確認調査時は住居のプラン内部にトレンチを設定したため平面プランを把握できなかったこと、トレンチから炭化材だけでなく塩化ビニールの切れ端が確認され炭化材そのものをごく新しいものと判断したことから、住居の一部をトレンチで掘り抜いてしまった。出土遺物では鉄鏝など鉄器が他の住居に比べて多く出土している。

SA2・4・5は検出面が住居床面近くであったため、出土遺物も少ない。その中でもSA5は住居の柱の一部とみられる炭化材が出土し、残存状況はよくないが焼失住居と考えられる。

SA3は調査区北端で検出され、一部は隣接する土地の造成により削平されているが、検出された6軒のうち最大規模である。出土遺物の量も種類も豊富である。磨製石鏝の遺構内出土はSA3だけであり、製品以外にも未製品や素材剥片、碎片等が多く出土している。この住居のみ隅丸方形プランであり、柱穴は円形に巡る。

SA6は調査区を南側に拡張した際に検出された住居である。複合口縁の大型壺が出土したほか鉄鏝など鉄器も数点出土した。

土坑は埋土が炭化物を含む黒色系のものと焼土を含む赤褐色系のもの二種類に分けられる。特に焼土を含むものは比較的浅い土坑が多い。中でもSC13は、被熱したように表面がもろくなっている土器が土坑内に据えられた形で出土した特殊ものである。

柱穴は多数検出されたが、掘立柱建物跡に結びつくものはなかった。その中の1基の柱穴の掘り込み底部でミニチュア土器が出土した。

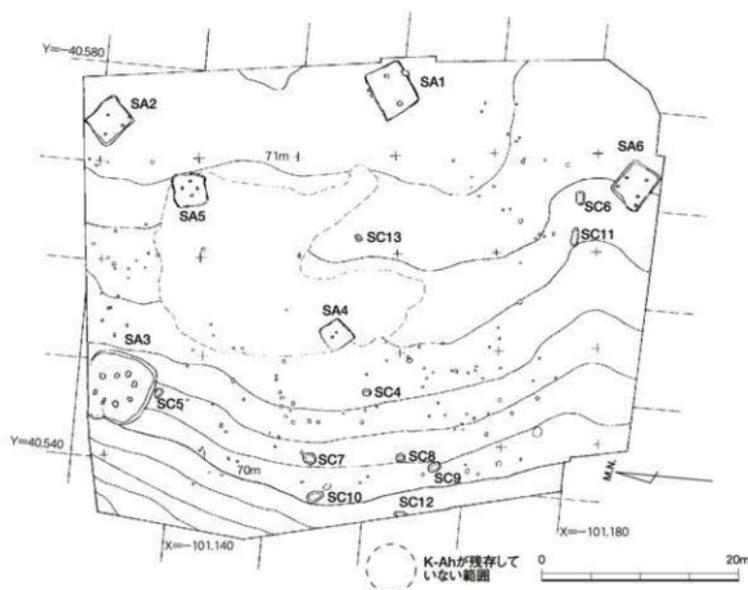


図31 弥生時代～古墳時代遺構分布図 (S=1/500)

## 竪穴住居跡

### SA 1 (図32~34)

**遺構：**Ⅲ層面(クロボク)のB1グリッドとC1グリッドにまたがる位置で単独で検出された。長軸5.1m、短軸4mの方形プランである。検出面から床面までの深さが20cmと浅いが、遺物や炭化材、赤化礫が床面や埋土中に多く遺存している。長さ50cmを超える炭化材が住居跡中心部より放射状に出土していることから焼失住居の可能性が高い。住居中心部に径40cmの範囲に焼土の集中がみられる。主柱穴は長軸の軸線上に2つあり、住居の壁に沿って小ピットが並ぶ。主柱穴はP1が上場径約38cm、下場径約20cm、深さ約60cm、P2が上場径約35cm、下場径約25cm、深さ約46cmを測る。小ピットは上場径約10cm、下場径約5cm、深さ約5cmを測る。床面全面に貼り床を厚さ約10cm施している。住居中央南側に確認調査時のトレンチによる破壊が約1m×2mの範囲にひろがる。

**遺物(図35・36)：**111~123は甕である。口縁部は直立気味で頸部から口縁部が「く」の字形に外反するものもあり、胴部はわずかに張り出すものの最大径は口縁部となるタイプが中心で、口縁部から頸部が「く」の字形に変化するものもある。底部は平底が多いが、上げ底気味のものや平底もみられる。調整は外面はハケ目、内面はハケ目もしくは板状工具によるナデである。口縁部は面取りされているものと端部に近づくほど細くなるものに分かれる。器高は25cm程度である。111と112、115と116と117、118と119はそれぞれ同一個体の可能性が高い。

124~134は壺である。口縁部が外反しながら開き、胴部は大きく肩が張り出すタイプが多い。口縁部は面取りされているものが多い。調整は内外面ともハケ目を基本とする。底部は九底や平底、上げ底など多様である。124は短頸壺である。131は大型の壺で底部付近の外面にミガキがみられる。134はほぼ完形の小型壺である。124と125は同一個体の可能性が高い。

135~137は鉢である。その中でも137は器高に比べて口径が大きい鉢である。表面にミガキが施されている。138は器台の脚部である。

139~140は台石である。どちらもススが付着し、赤化している。141は砥石で、赤化している。これら以外にも被熱によるものと考えられる赤化礫が住居内から出土している。

142~149は鉄鏃である。142~145は柳葉鏃である。146~149は主頭鏃である。150~152は鉄鏃の茎部である。153~160は鉄片である。145・147・149・154・158には木質が付着している。

**炭化材：**炭化材は住居中央よりも周辺に多く遺存している。住居東隔は他の部分に比べて炭化材が比較的検出されていない。住居北隔は反対に炭化材の遺存状況が良好で、二股に分かれたものもみられる。炭化材の太さは、直径10cm程度の太めのものと直径5cm程度の細めのものとに大別できる。柄穴がみられるものが2つあり、それぞれ1.8cm×1.4cmの隅丸方形で深さ1.5cmのものと1.7cm×1.3cmの小判形で深さ1.4cmのものである。

**自然科学分析：**SA1出土の炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定(AMS法)、床面の土の植物珪酸体分析、フローテーション法で得られた炭化種子等の種実同定を株式会社古環境研究所に業務委託した。

#### ア 炭化材の樹種同定(図32)

22点の試料を分析した結果、ヤブツバキ6点、タブノキ4点、ハイノキ属4点、コナラ属アカガシ重属2点、カキノキ属2点、アワブキ属2点、サカキ1点、ヤマモモ1点であった。

#### イ 炭化材の放射性炭素年代測定法(AMS法)

試料1点を加速器質量分析法(AMS法)により放射性炭素年代測定にかけ、補正<sup>14</sup>C年代で1960±50年BPを得た。

#### ウ 床面の土の植物珪酸体分析(図33)

住居の床面(試料2~8)および住居外の土(試料1:比較試料)について分析を行った。

その結果、各試料ともネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出され、

部分的にヨシ属やマンサク科（イスノキ属）も少量検出された。主な分類群の推定生産量によると、メダケ節型およびネザサ節型が卓越していることが分かる。

#### エ 炭化種子等の種実同定

炭化米と自家同定して委託した炭化果実54個中50個がイネと同定され、残り4個は炭化物片であった。炭化種子と自家同定して委託した不明種子6個中2個はキンバイザサと、残り4個はアリノトウグサ科？と同定された。アリノトウグサ科は炭化が著しく表面が観察できないため、科レベルの同定にとどめられている。

フローテーション：簡易フローテーション法で選別して得られた炭化果実、炭化種子等を自家同定した結果を表10に示す。

SA1では床土の位置を明確にするため住居内を大きく四分割しそれぞれA～Dに分け、さらに細かく1mメッシュで20分割した（図33）。確認調査のトレンチによりA3・A4・D1～4の一部が破壊されており、偏りのある分布状況である可能性は否定できない。

炭化米はA2での検出が顕著である。住居内出土の約60%を占めている。両隣のA1・B1も他の区画より多く出土しており、住居東端に集中がみられる。ドングリの一部である通称ヘソや花柱も炭化米同様、A1～2・B1の住居東端に偏った分布である。炭化種子や錯状のものも含めた鉄片はおおむね住居全域から出土している。また、鉄鏝と推定される鉄片はA3・D1・D3の住居南端でも検出された。ベンガラはA4・B2でそれぞれ1粒ずつ検出された。

遺構名	検出物	点数/重量	形状	種実同定
SA1	イネ	406点	完形および復元できるもの	自家同定
	ドングリの花柱	0.6g	完形（ほぼ球形）	自家同定/分析委託
	ドングリの付部	1.2g	完形	自家同定
	植物遺存体	45.2g	—	—

表10 SA1 検出植物遺存体

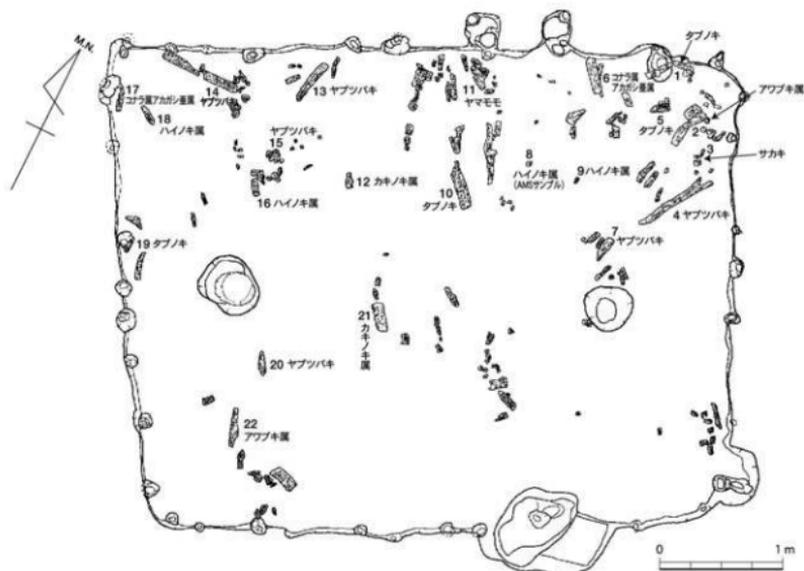


図32 SA1 樹種同定位置図 (S=1/40)

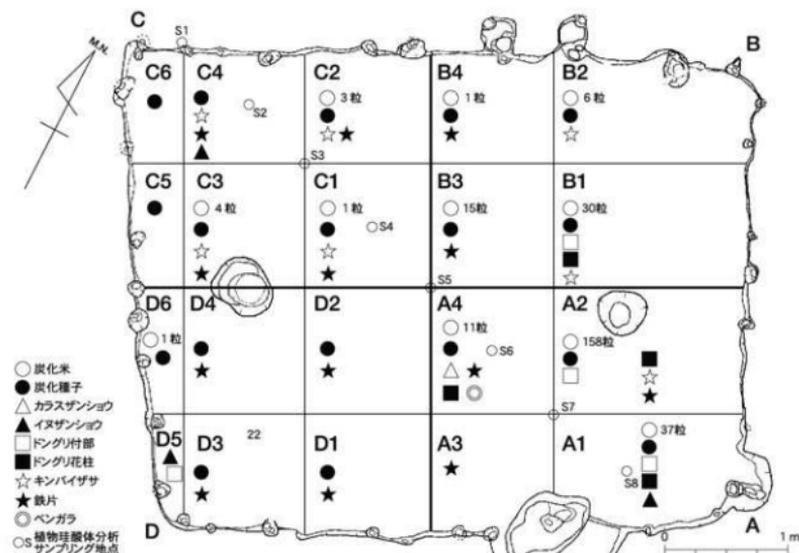


図33 SA1 フローテーション検出状況図 (S=1/40)

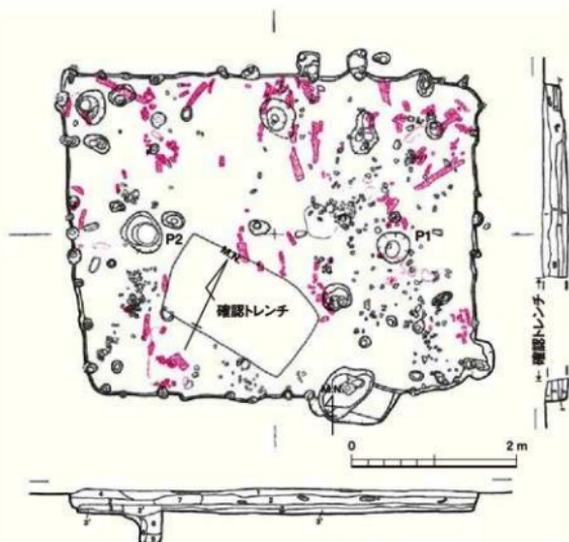


図34 SA 1 遺構実測図 (S=1/60)

SA 1 土層述記

- 1 黒褐色土 (10YR 2/3)  
径2mm以下のK-Ab粒をまんべんなく含む。炭化木材を少量含む。やややわらかく、ややしまりあり。土器片も含む。
- 2 黒褐色土 (10YR 2/3)  
径1mm~1cmのK-Ab粒を多く含む。1よりわずかに硬い。ややしまりあり。土器片を含む。1とはほぼ同じ。
- 2' 同上層に上であるが、よりやわらかい。
- 3 暗褐色土 (10YR 3/3)  
径2cm以下のK-Abブロックと粒を含む。硬くしてしまっている。炭化物(炭化材)をわずかに含む。胎床と考えられる。塊土粒(K-Ab粒が塊けたもの)をまんべんなく含む。
- 3' 暗褐色土 (10YR 3/3)  
胎床の一部と考えられるが、K-Abはほとんど含まれない。V層のブロックをわずかに含む。
- 4 黒色土 (10YR 2/1)  
径2mm以下のK-Ab粒をわずかに含む。やや硬くしまりがある。炭化木材をわずかに含む。
- 5 黒色土 (10YR 2/1)  
径2mm以下のK-Ab粒を多く含む。やや硬くしまりがある。炭化木材を少量含む。
- 6 暗褐色土 (10YR 2/3)  
非常にやわくて柔らかい。木炭か?
- 7 明黄褐色土~褐色土のブロック (K-Ab?) が黒色土に多く混ざる。やや硬い。
- 8 暗褐色土 (10YR 3/3)  
径1mm~1cmのK-Ab粒を少し含む。炭化木材をわずかに含む。やわらかい。
- 9 暗褐色土と黄褐色土が混ざる。径1~2mmK-Ab粒をごくわずかに含む。やややわらかく粘性あり。

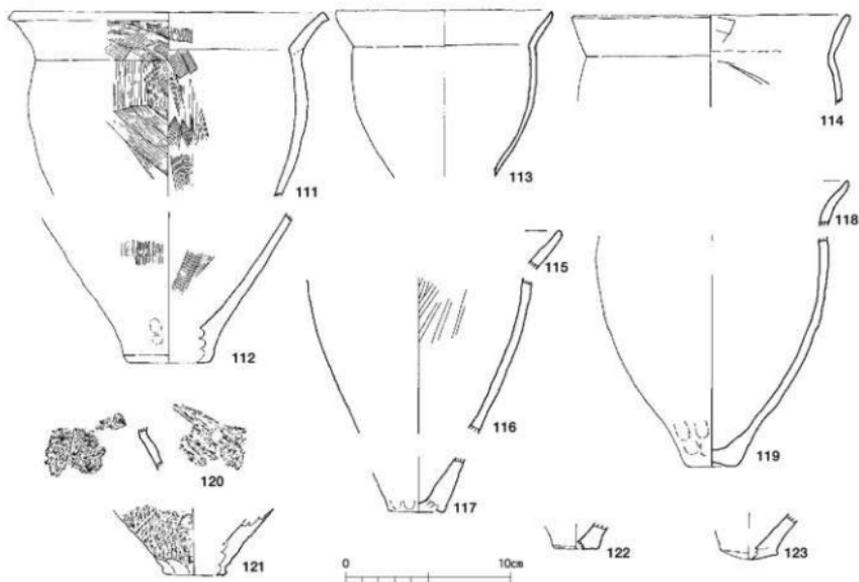


図35 SA 1 出土遺物実測図① (S=1/4)

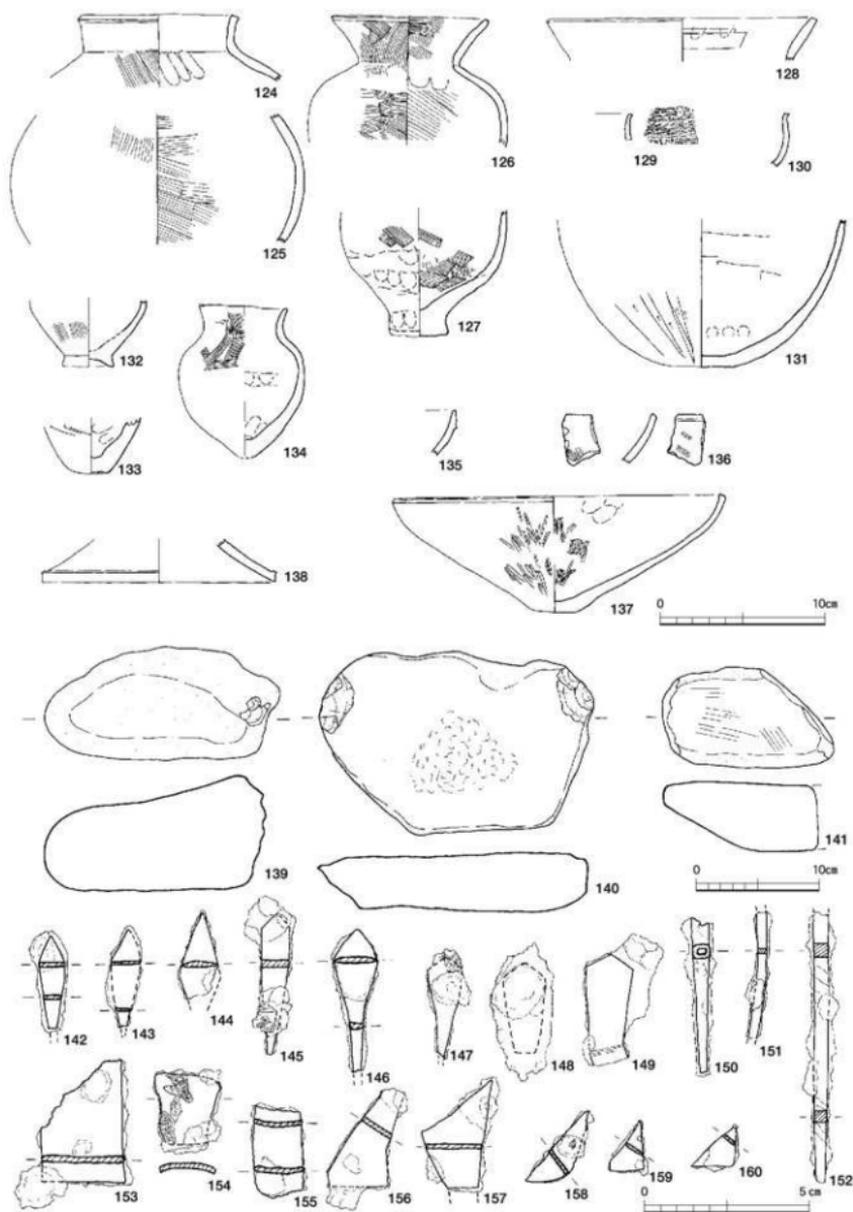


图36 SA1 出土遺物実測図② (S=1/4、2/3)

SA 2 (図37)

遺構：Ⅲ層面（クロボク）のE1グリッドとF1グリッドにまたがる位置で単独で検出されたが、プラン確定のためⅣ層面（K-Ah）まで掘り下げた。長軸4m、短軸3.5mの隅丸方形プランである。検出面から床面までの深さが10cmと浅く、遺物の残りはよくない。柱穴は3つあり、床面に不等辺三角形に配置されている。P1は上場径13cm、下場径7cm、深さ20cm、P2は上場径13cm、下場径9cm、深さ14cm、P3は上場径8cm、下場径7cm、深さ20cmを測る。P2はサブトレンチ設定時に掘り下げたので、平面プランは明確ではない。P3の平面プランは他

の柱穴より小さいが埋土の色調や深さなどから柱穴と判断した。床面の一部に貼り床を施している。住居東側の床面で長径90cm、短径70cm、深さ10cmほどの浅い掘り込みをもつ土坑を検出した。埋土に炭化物を含むことから炉として使用されたと考えられる。

遺物（図38）：161は甕である。口縁部は外反し、外に開き気味である。内外面ともハケ目調整を施している。これ以外は小片のため固化していないが、磨製石鏃の石材である緑色凝灰岩の碎片も出土している。

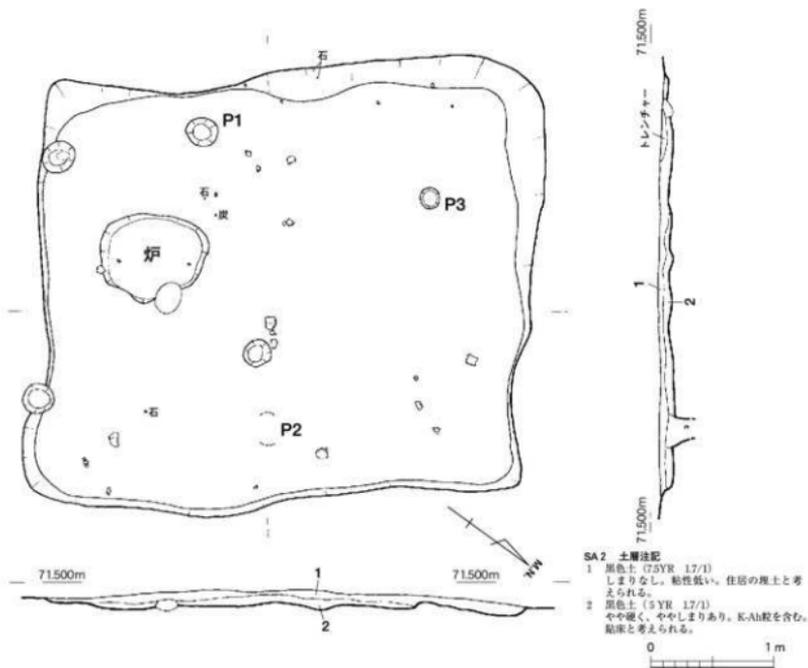


図37 SA 2 遺構実測図 (S=1/40)



図38 SA 2 出土遺物実測図 (S=1/4)

### SA 3 (図39・40)

遺構：Ⅲ層面(クロボク)のE 4グリッドとF 4グリッドにまたがる位置で単独で検出され、南側にSC 5が隣接して検出された。住居北側が調査区外にひろがるため全体像は不明であるが、およそ7mの隅丸方形プランであると推定される。平面プラン検出のため住居西側の一部を深く掘り下げた結果、土層断面の記録を1.5mほど欠如している。

検出面から床面までの深さは約50cmあり、床面直上をはじめ、埋土中からも遺物が多く出土した。住居は中央部分が一段低く掘り下げられており、その空間は3m×2.5mほどの楕円形である。その周囲の貼り床が施されている部分に主柱穴が8本廻っている。主柱穴は上場径40～50cm、下場径約20cm、深さ最大1mを測る。そのうち1箇所はP 1・P 2が近接している。また、住居床面で検出した長径70cm、短径60cm、深さ15cmの土坑より石錘235が出土し、さらに土坑の下よりP 3を検出し、そこから磨製石斧239が2つに割れた状態で出土した。住居床面北側に長径2.3m、短径1.25m、深さ10cmほどの浅い掘り込みがみられ、焼土がまとまって検出された。また、埋土を掘り下げていく過程で住居埋土上部に新しい時期の土坑が存在することが判明した。

遺物(図41～45)：162～165は大甕である。口縁部は逆L字型で直下に突帯が一条廻る。口縁端部はやや上向きで、胴部はわずかに張り出し最大径は突帯部分となるタイプである。調整は外面がハケ目、内面にハケ目とミガキがみられる。162は口縁部がほぼまっすぐ立ち上がっているのに対し、163は口縁端部の傾きが大きくなり、内湾している。

これらのうち162は住居東側で広く出土し、163・164は住居西側や複数の柱穴内などで広く出土し、165は住居の中央や北側、東壁・南壁近くで出土するなど住居内全体に散らばって出土している状況である。

166～173は突帯を有する甕である。刻み目突帯が一条に廻るものと二条に廻るものがあり、171は口縁端部にも刻み目がみられる。166は残存率1/2ながら口縁部から底部まで残っており、口径34cm、器高40cmである。最大径は口縁部になり、底部はわずか

に上げ底である。167もほぼ同じタイプながら口縁部がやや外反し、胴部に焼成破裂痕が見られる。168は166・167より一回り小型で、突帯が下がり気味である。これらの甕の調整は内外面ともハケ目を中心で、内面の口縁部、突帯裏側付近に横方向のハケ目や明瞭な指押さえが認められる。

174～192は突帯をもたない甕である。これらのうち口縁部に着目すると、口縁部が外反するだけのもの(174・175等)、頸部で一度くびれる所謂「く」の字口縁をもつもの(177・178等)、口縁部がわずかに開くがほとんどまっすぐ胴部につながるもの(189)などに分類される。多くの最大径は口縁部付近に認められるが、「く」の字口縁をもつものの中には胴部が張り出し、最大径が胴部中位にまで下がるものもある。外面の調整は、底部から胴部にかけて縦方向→斜め方向とハケ目の方向が変わる。内面の調整は突帯を有する甕同様、横方向のハケ目が認められる。190～192は外面にタタキ目がみられる胴部片である。

これらのうち166は広範囲で出土しているのに対して、167は住居西側隅の一角で亀裂が入っているものの元の形状を保ったまま横倒しで床面より浮いた状態で出土している。167よりさらに壁寄りでは175が径1mの範囲で出土している。168・174・177の土器片のほとんどは、住居東南壁寄りの位置で集中して出土している。また、178は住居中央部の一段低くなったところで出土している。

193～197は底部である。底部からの立ち上がりが垂直から緩やかに変化する順序で掲載している。

底面がわずかに上げ底気味のものが5点中3点みられ、底径は7cm前後である。

198～217は壺である。198は無頸壺である。口径10.5cm、器高11cm、最大径13cm、底面が凹み、内面に工具痕がみられる。199・200は198と接合しないが、胎土などから判断して同一個体の可能性が高い。また、この2つの土器片の口縁端部付近には貫通する穿孔がみられる。出土位置は住居中央部西寄りである。201～210は壺の口縁部である。201～204は口縁端部が凹んでいる。206は口縁端部に竹管文が施されている。208は櫛描波状文の複合口縁部である。

210は口縁部に穿孔がみられる。

211は頸部で外面にミガキがみられる。212・213は胴部で突帯が施されている。214・215は底部に近い胴部で、214は外面にミガキが、215は外面にハケ目がそれぞれみられる。

218～220は高坏である。218は脚部に方形透かしが入り、坏部と脚部の境に突帯が廻る。調整として内外面ともハケ目がみられる。出土位置は住居西寄りである。219は摩耗が著しく、剥落が目立つ。220は他の2点に比べて底径が大きく裾部がゆるやかに立ち上がる。この1点のみ住居外出土である。

221は器台である。脚部に透かし穴がみられる。

222～229は緑色凝灰岩製の磨製石鏃および未製品、剥片である。基部が平基と凹基に大別でき、大きさは3.5cm前後のものが中心である。出土状況は住居内全域に偏りなく分布している。230・231は黒曜石製の打製石鏃である。当該時期の遺物ではないと考えられるが、図化し報告する。出土位置はSH13付近である。

232・233は擦痕のある扁平な石である。刃部が作出されていないが石鏃の未製品の可能性があるかと判断し、そのように図化した。234・235は石鏃である。235は床面で検出した土坑の埋土から出土した。236・237は敲石である。239は磨製石斧である。235の石鏃が出土した土坑の下のビット埋土中より二つに折れた状態で出土した。240・241は砥石である。242は台石である。

**自然科学分析：**SA 3出土の炭化米の放射性炭素年代測定（AMS法）、床面の土の植物珪酸体分析、フローテーション法で得られた炭化種子等の種実同定を株式会社古環境研究所に業務委託した。

#### ア 炭化米の放射性炭素年代測定法（AMS法）

試料1点を加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定にかけ、補正<sup>14</sup>C年代で2060±40年BPを得た。

#### イ 床面の土の植物珪酸体分析（図39）

住居の床面（試料2～12）および住居跡外の土（試料1、13：比較試料）について分析を行った。その結果、住居の床面（試料2～12）で

は、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型も検出され、部分的にヨシ属やマンサク科（イソノキ属）、樹木（その他）も少量検出された。さらに、試料4、7、8、9、11ではイネが検出された。イネの密度は、試料9では3,600個/gと比較的高い値であり、その他の試料では700～1,800個/gと比較的低い値である。主な分類群の推定生産量によると、住居の床面ではメダケ節型およびネザサ節型が卓越していることが分かる。

#### ウ 炭化種子等の種実同定

炭化米と自家同定して委託した炭化果実50個中44個がイネと同定され、残り6個は炭化物片であった。炭化種子と自家同定して委託した不明種子19個中1個はイネと、4個はキンバイザサと、1個はカラスザンショウと、3個はササゲ属（子葉）と、3個はアリノトウグサ科？と同定された。残り7個は虫サナギ1個、虫サナギ炭1個、虫サナギ？1個、虫フン2個、炭化物片1個、不明種実1個であった。アリノトウグサ科は炭化が著しく表面が観察できないため、科レベルの同定にとどめられている。

**フローテーション：**簡易フローテーション法で選別して得られた炭化果実、炭化種子等を自家同定した結果を表11に示す。

SA 3では床土の位置を明確にするため住居内を2mメッシュで15分割した（図39）。

炭化米では、住居南端のB 1の46粒が最大である。他にC 2、B 2、C 3など住居の南東部での検出が顕著である。他の炭化種子はA 2・B 1・C 1～3・D 2～3から、ドングリの花柱はD 3からと、東側から南半分まで検出されている。

磨製石鏃の製作過程で作出される緑色凝灰岩製の破片はB 1、C 1、C 2、C 4で検出され、C 2で多く検出された。

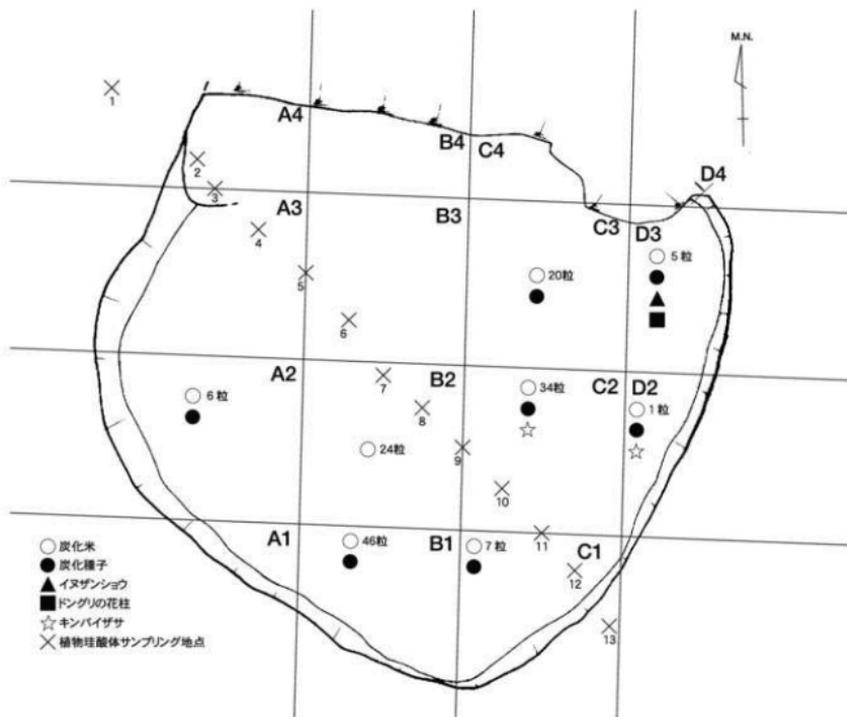
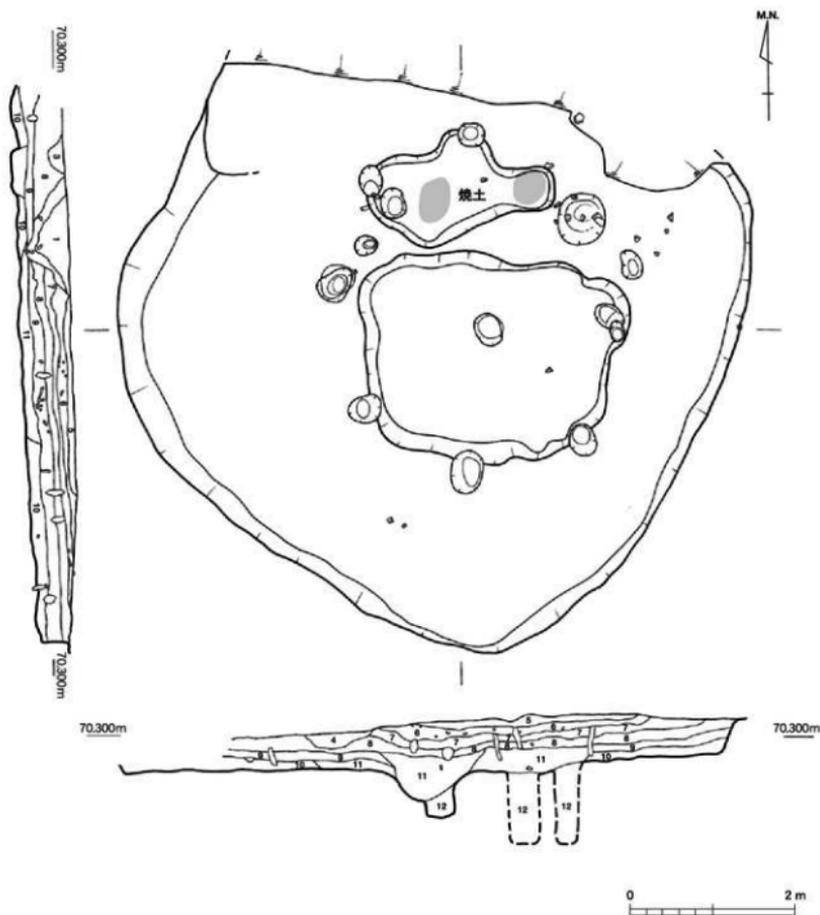


図39 SA 3 フローテーション検出状況図 (S=1/75)

遺構名	検出物	点数/重量	形状	種実同定
SA 3	イネ	155点	完形および復元できるもの	自家同定
	植物遺存体	4.9 g	—	—
	カラスザンショウ	1点	完形	分析委託
	ササゲ属	2点	完形	分析委託
	アリノトウグサ科?	1点	完形	分析委託
	虫サナギ	1点	完形	分析委託
	虫サナギ?	5点	—	分析委託
虫フン	2点	—	分析委託	
中央土 坑ビット	イネ	1点	完形	自家同定
	植物遺存体	0.3 g	—	—

表11 SA 3 検出植物遺存体



#### SA3 土層注記

- 1 黒色土 (7.5YR 1.7/1)  
2~4cm大の炭、土器片が混入。しまりなし。
- 2 黒褐色土 (10YR 2/2)  
しまりなし。1を同様。ごく新しい時期の土坑。
- 3 黒色土 (5YR 1.7/1)  
しまりなし。擾乱。
- 4 黒色土 (10YR 2/1)  
粘性なし。しまりなし。土器片混入。ごく小粒の炭化物が少量混入。  
擾乱。
- 5 黒褐色土 (10YR 3/1)  
粘性なし。しまりなし。土器小片、2~5mmの小礫、1cm程度の炭化物が混じっている。
- 6 黒色土 (7.5YR 1.7/1)  
粘性なし。しまりなし。土器片が他の層に比べてやや目立つ。
- 7 黒色土 (10YR 2/1)  
かたくしまっている。
- 8 黒色土 (10YR 1.7/1)  
7より若干かたくしまっている。  
3mm程度の炭化物をごく少量含む。
- 9 黒色土 (7.5YR 1.7/1)  
かたくしまっている。3mm程度の炭化物粒を含む。径1~2cmのK.Ahブロックを含む。礫を少量含む。
- 10 黒褐色土 (10YR 2/2)  
かたくしまっている。1~2cmのK.Ahブロックを含む。炭化物を  
ごく少量含む。礫、土器片を含む。鼠塚と考えられる。
- 11 黒褐色土 (10YR 2/2)  
やわらかく、しまりなし。1cm大のK.Ahブロック、3mm大の炭化  
物粒を含む。礫が混じっている。中央土坑層上。
- 12 黒褐色土 (10YR 2/3)  
やわらかく、しまりなし。主柱穴埋土。

図40 SA3遺構実測図 (S=1/60)

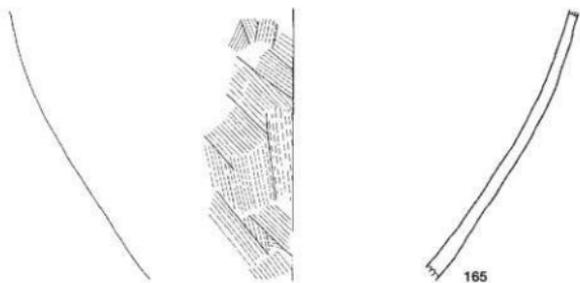
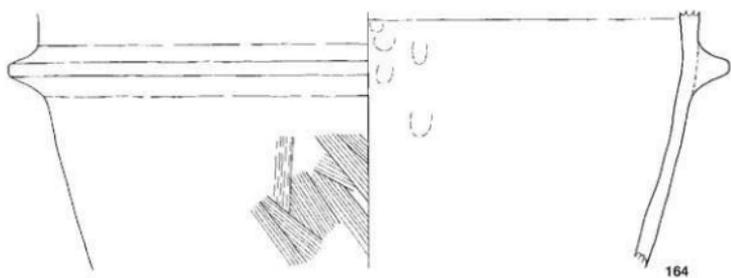
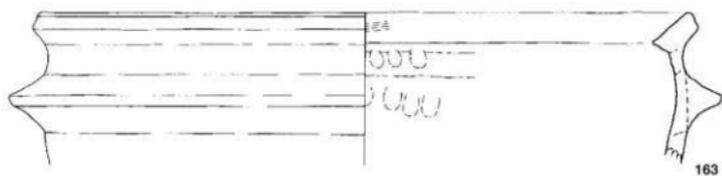
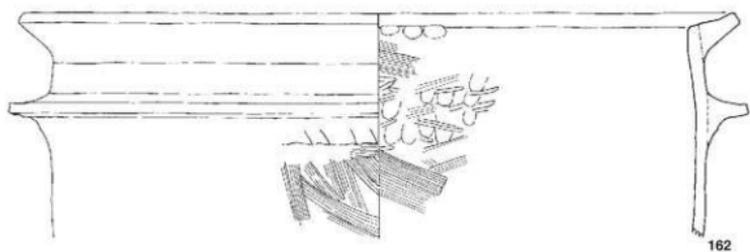


图41 SA 3 出土遗物实测图① (S=1/4)

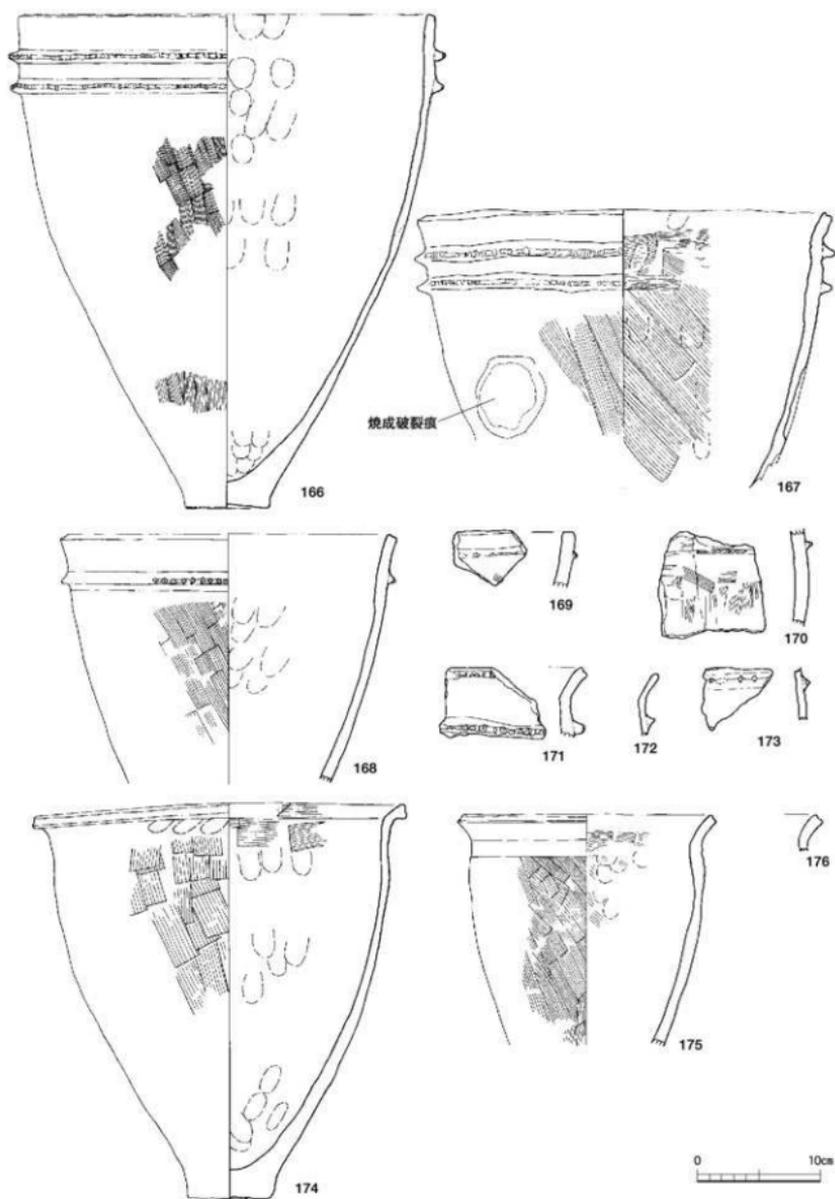


图42 SA 3 出土遗物实测图② (S=1/4)

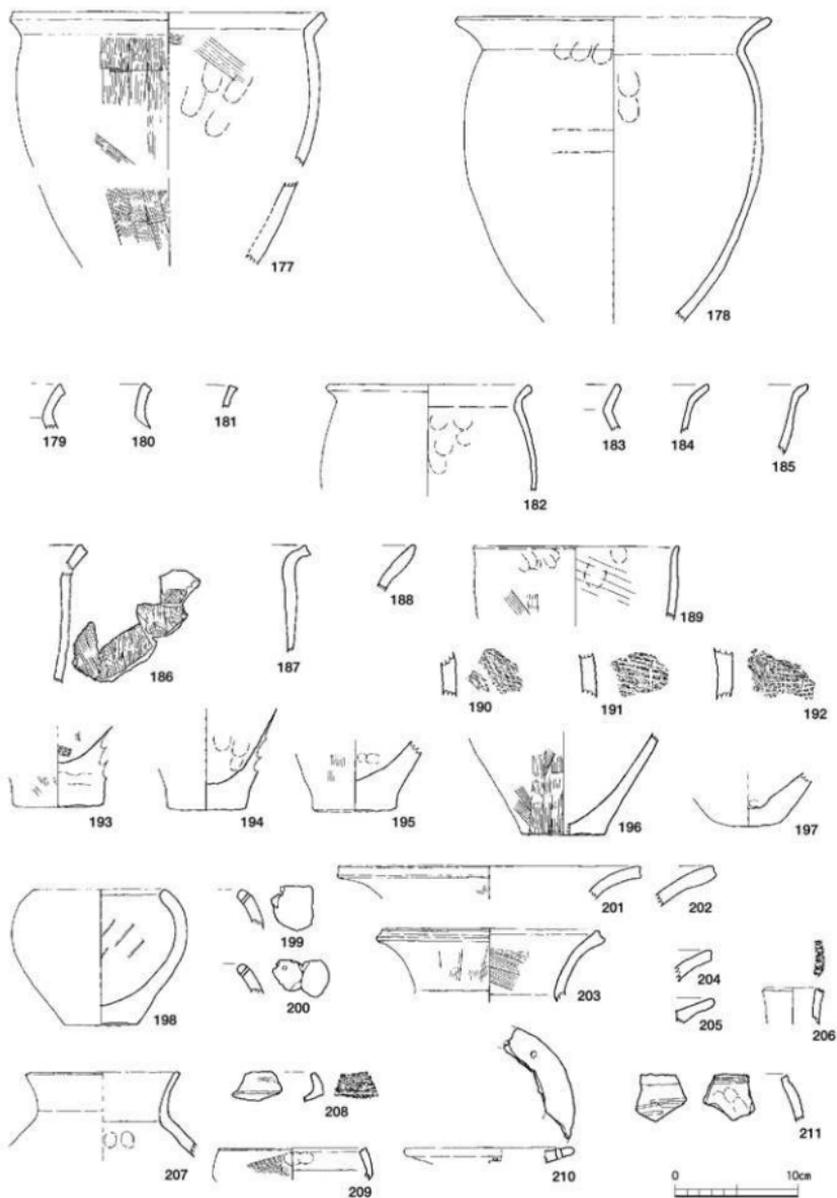


图43 SA 3 出土遺物実測図③ (S=1/4)

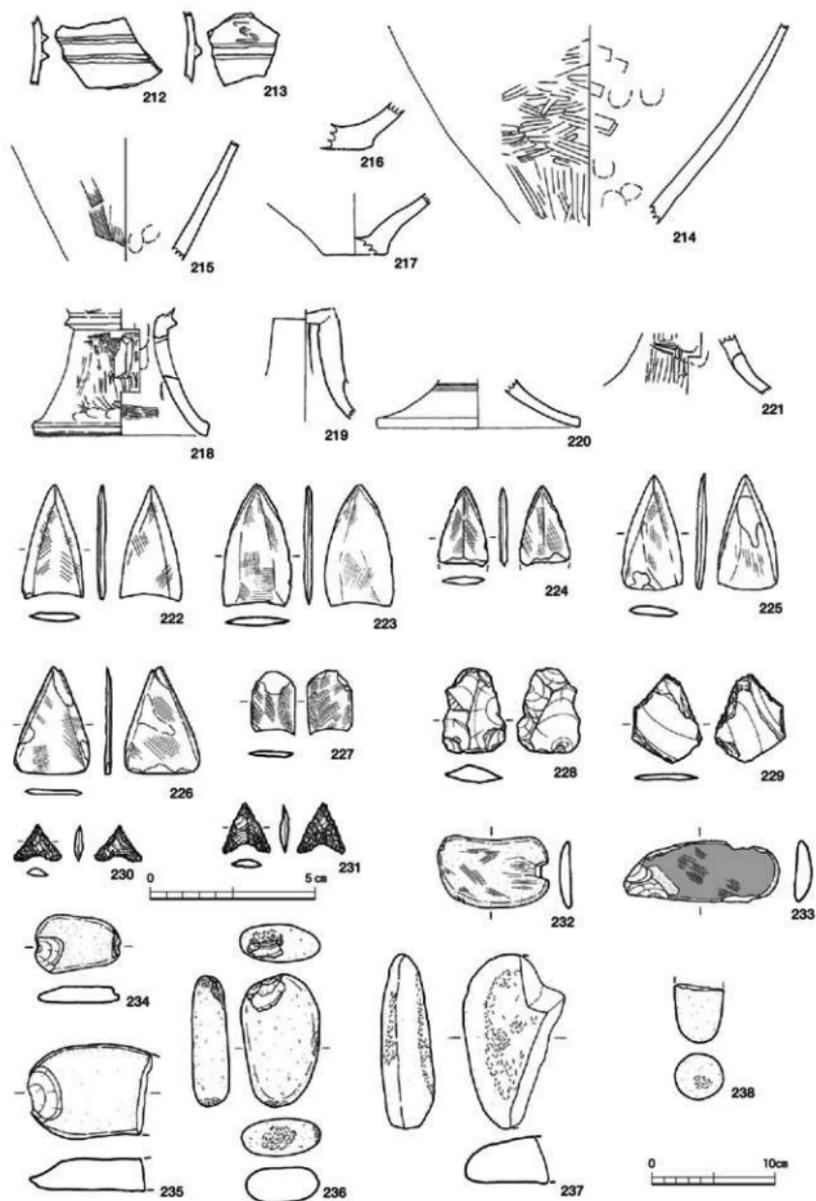


图44 SA 3 出土遗物实测图④ (S=2/3 (212~231)、1/4 (232~238))

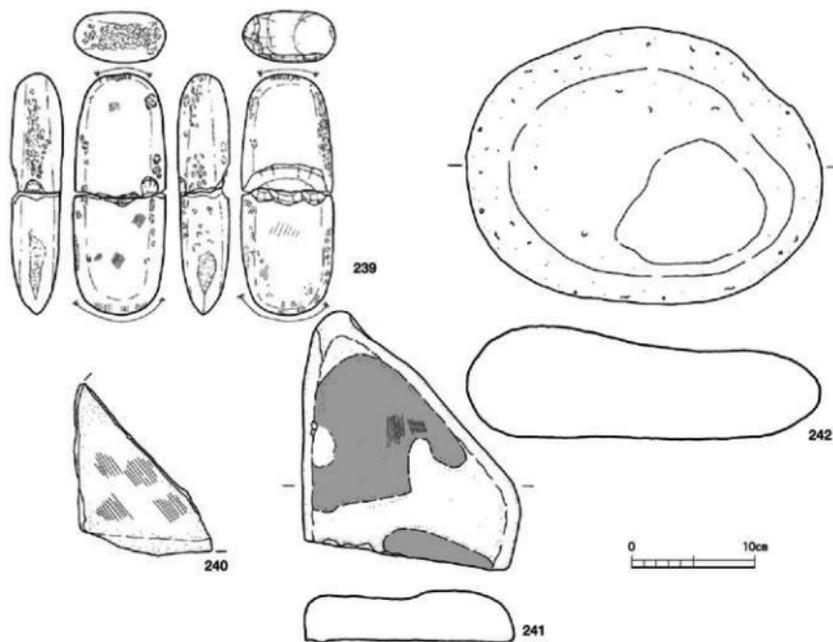


図45 SA 3 出土遺物実測図⑤ (S=1/4)

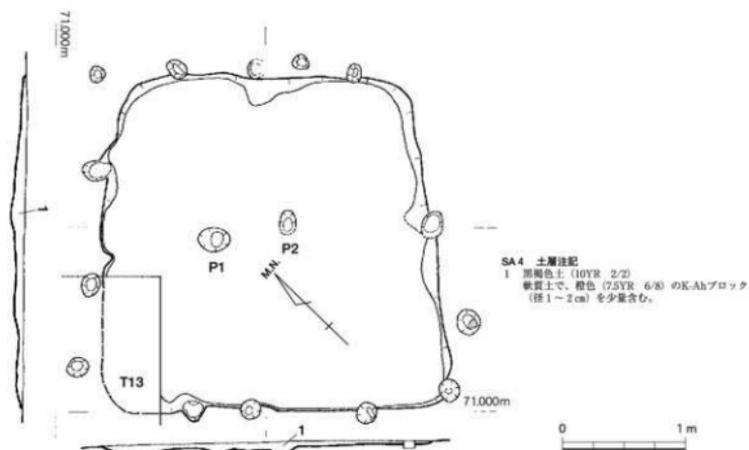


図46 SA 4 遺構実測図 (S=1/40)

#### SA4 (図46)

**遺構：**Ⅲ層面（クロボク）のC3グリッドで単独で検出されたが、Ⅳ層（K-Ah）が残存しておらずⅤ層（MB0）面で検出した一辺2.7mの隅丸方形プランである。検出面から床面までの深さが10cmと浅く、遺物があまり出土しておらずほとんど小片であることから図化できない。確認調査時のトレンチ掘削（T13）で住居西隅を一部破壊されている。柱穴は2つあり床面のほぼ中央に配置されている。P1は上場30cm×20cm、下場14cm×10cm、深さ5cm、P2は上場20cm×13cm、下場11cm×7cm、深さ5cmを測る。住居プランの周囲に上場径20cm、下場径10cm、深さ5cmほどの小ピットが巡るように配置されており、住居を構成する一部と考えられる。機能としては、その位置や検出状況から垂木を立てるためのものと推測される。

#### SA5 (図47・48)

**遺構：**Ⅲ層面（クロボク）のE2グリッドで単独で検出されたが、Ⅳ層（K-Ah）が残存しておらずⅤ層（MB0）面で検出した一辺3.3mの隅丸方形プランである。確認調査時のトレンチ掘削（T15）で住居南西隅を一部破壊されている。検出面は浅かったが、住居北側床面で遺物や炭化材を検出した。全体の量は少ないが90cmに達する炭化材をはじめ柱状の炭化材が集中してみられることから焼失住居と考えられる。主柱穴は住居内に4基認められ、上場径20cm、下場径10cm、深さ5～10cmを測る。住居周囲に主柱穴と同じか若干小さめのサイズの小ピットが廻る。住居の壁付近以外は貼り床が存在する。

**遺物 (図49)：**243は口縁部が外反する器形で頸部に刻み目突帯が一条廻る甕である。口縁端部は凹み、刻み目は斜めに施されている。また、突帯の下部外面に2mm大の組織痕が刻み目同様斜位に並ぶ様子が観察されるので、ハケメ原体の痕跡と推定される。247は円形浮文を口縁上面に配し鋤先状口縁をもつ大型壺である。頸部に突帯が二条廻る。口縁部から頸部までしか残存しておらず、P1の直上で上を向いた状態で出土した。248は砥石である。2面に擦痕がみられ、赤化シススが付着している。

**炭化材：**検出された炭化材は最長90cmを測り、太いものでは径10cmを測る。住居中央部の炭化材のほとんどに朽穴が施されているのを確認した。炭化材の大半は東西方向に向いた状態で検出されている。住居北寄りの位置でモモの炭化種実が検出された。

**自然科学分析：**SA5出土の炭化材・炭化種実の同定、フローテーション法で得られた炭化種子等の種実同定を株式会社古環境研究所に業務委託した。

ア 炭化材の樹種同定 (図47・48)

10点の試料を分析した結果、スタジイ3点、ガズミ属2点、ヤブツバキ1点、サカキ1点、ハイノキ属2点、アワビキ属1点であった。

イ 炭化種実の種実同定

試料を分析した結果、モモ核であった。

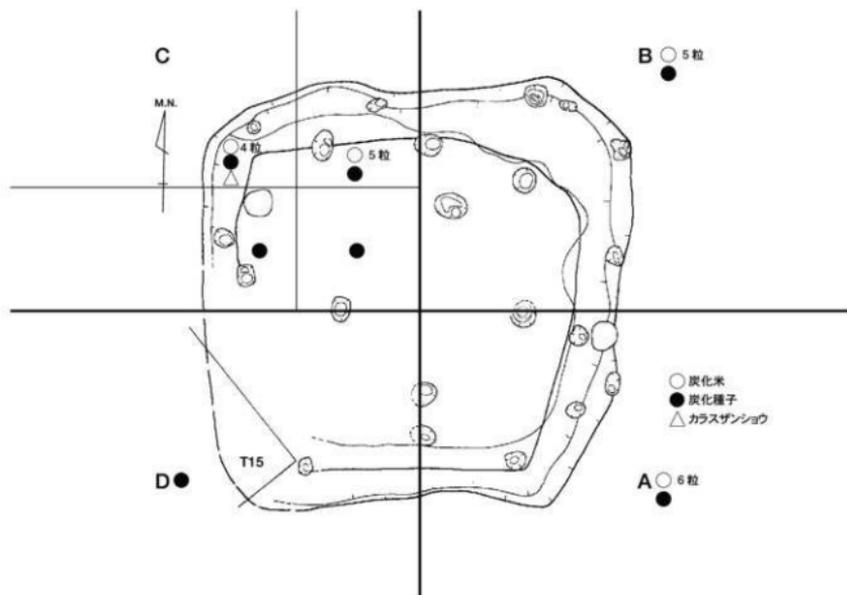
ウ 炭化種子等の種実同定

炭化種子と自家同定して委託した不明種子2個中1個はヒユ属と、もう1個はアリノトウグサ科？と同定された。アリノトウグサ科は炭化が著しく表面が観察できないため、科レベルの同定にとどめられている。

**フローテーション：**簡易フローテーション法で選別して得られた炭化果実、炭化種子等を自家同定した結果を表12に示す。

SA5では床土の位置を明確にするため住居内を大きく四分割し、Cのみ細かく1mメッシュに4分割した (図47)。確認調査のトレンチによりDの一部が破壊されており、偏りのある分布状況である可能性は否定できない。

炭化米はAから6粒、Bから5粒、Cから9粒検出された。検出数は少ないもののSA5がMB0面での検出であることを考えると炭化米等を検出した意義はあるといえる。炭化種子は住居内からまんべんなく検出され、Cから出土した炭化種子はカラスザンショウと同定された。



SA 5 における樹種同定

- |         |          |
|---------|----------|
| 1 ハイノキ属 | 6 アワブキ属  |
| 2 スダジイ  | 7 スダジイ   |
| 3 ハイノキ  | 8 スダジイ   |
| 4 ヤブツバキ | 9 ガマズミ属  |
| 5 サカキ   | 10 ガマズミ属 |

図47 SA 5 における分析委託・フローテーション検出状況図

遺構名	検出物	点数/重量	形状	種実同定
SA 5	イネ	20点	完形および復元できるもの	自家同定
	植物遺存体	1.0g	—	—
	モモの核	1点	完形	分析委託

表12 SA 5 検出植物遺存体

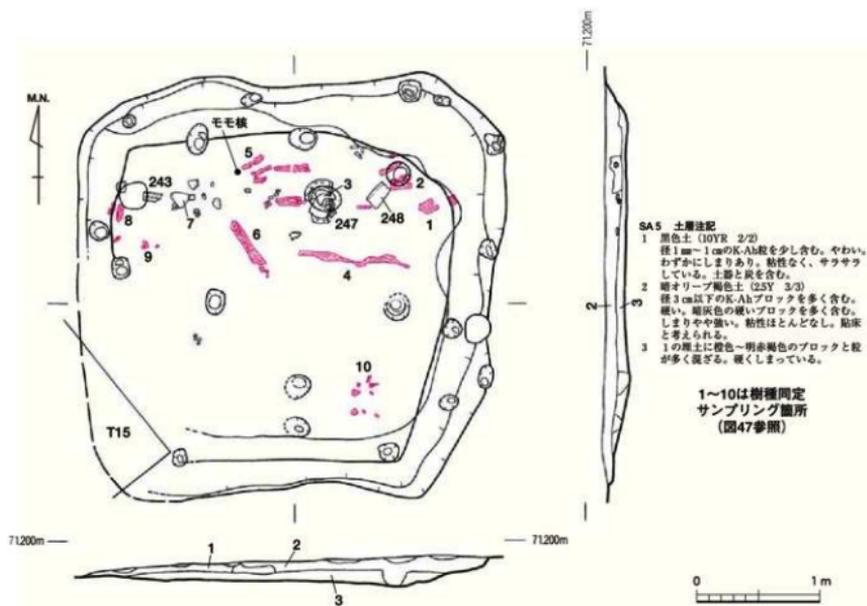


図48 SA5遺構実測図 (S=1/40)

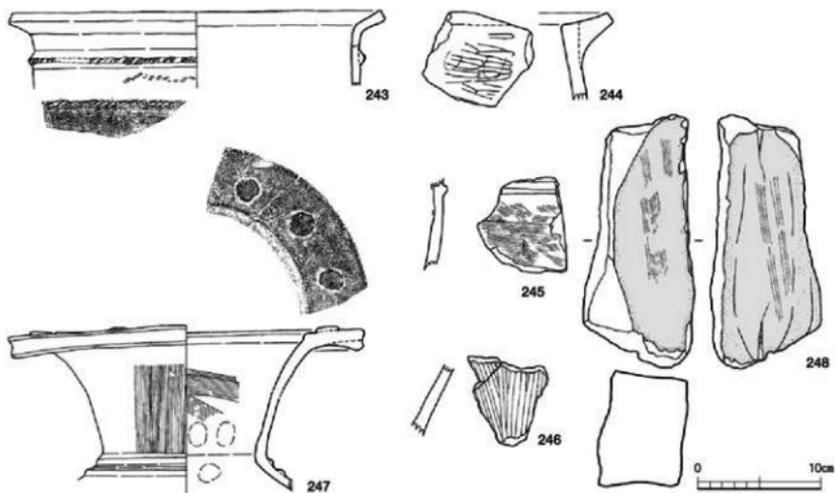


図49 SA5出土遺物実測図 (S=1/4)

## SA 6 (図50~52)

**遺構：**調査区を南側に拡張しⅢ層面（クロボク）で検出した溝状遺構（SE1）に切られ、Z2グリッドに位置する長軸4.5m、短軸3.5mの台形状の隅丸方形プランである。主柱穴はP1からP5まで5つあり床面の中央を囲むように配置されており、上場径25~30cm、下場径20cm、深さ5~15cmを測る。住居東隅に長径1.1m、短径0.7mの土坑と径50cmのピットがあるがどちらも新しい時代のものである。

**遺物（図53）：**遺物では大型壺249が住居の一箇所に押しつぶされたような形で出土した。249は口縁部に櫛描波状文がある複合口縁をもち、口径18cm、器高は推定で45cm、器厚は薄く5mmほどである。壺250も比較的残存率のよい土器であり、口径21cm、器高17cm、口縁部が外反し、口縁部に最大径をとる。口縁端部は凹み気味で、内面の頸部は明瞭な稜線がたつ。253は鉄鍍の茎部である。ほかにも何点か鉄片は出土したが、図化できなかった。

**自然科学分析：**SA6の床面土の植物珪酸体分析、フローテーション法で得られた炭化種子等の種実同定を株式会社古環境研究所に業務委託した。

### ア 床面の土の植物珪酸体分析（図50）

住居の床面（試料2~8）および住居外の土（試料1、9：比較試料）について分析を行った。その結果、住居の床面（試料2~8）では、

ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型も検出され、部分的にヨシ属、マンサク科（イスノキ属）、樹木（その他）も少量検出された。住居外の比較試料（試料1・9）でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、試料9では各分類群とも比較的低い値となっている。主な分類群の推定生産量によると、住居の床面ではメダケ節型およびネザサ節型が卓越していることが分かる。

### イ 炭化種子等の種実同定

炭化種子と自家同定して委託した不明種子4個中1個はキンバイザサ?と、1個はイズザンショウと、1個はカラスザンショウと同定された。残り1個は虫サナギであった。

**フローテーション：**簡易フローテーション法で選別して得られた炭化果実、炭化種子等を自家同定した結果を表13に示す。

SA6では床土の位置を明確にするため住居内を1mメッシュで16分割した（図51）。

炭化米は、A2、B3で1粒ずつ検出され、DやC1、C2など住居北側一角で炭化種子がめだって検出された。住居中心部がSE1で切られているので、分布状況には多少偏りがあると考えられる。

遺構名	検出物	点数/重量	形状	種実同定
SA 6	植物遺存体	0.6g	—	—
	カラスザンショウ	1点	完形	分析委託
	イズザンショウ	1点	完形	分析委託

表13 SA6 検出植物遺存体

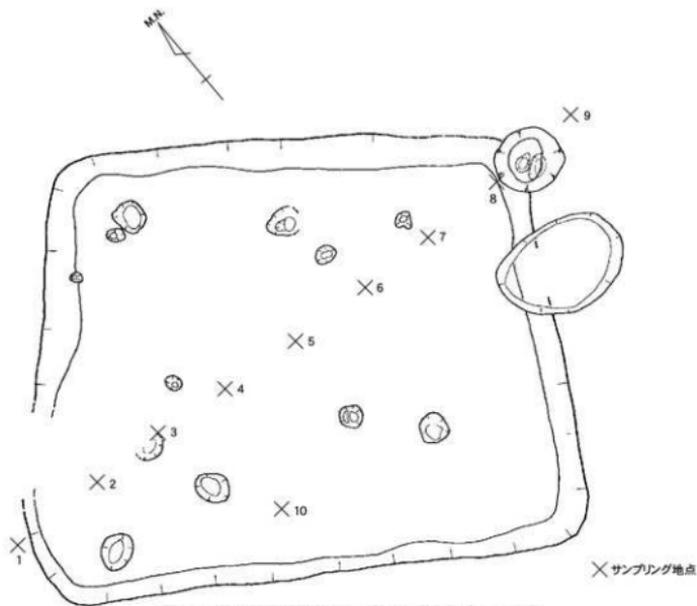


図50 SA 6 植物珪酸体サンプリング地点 (S=1/40)

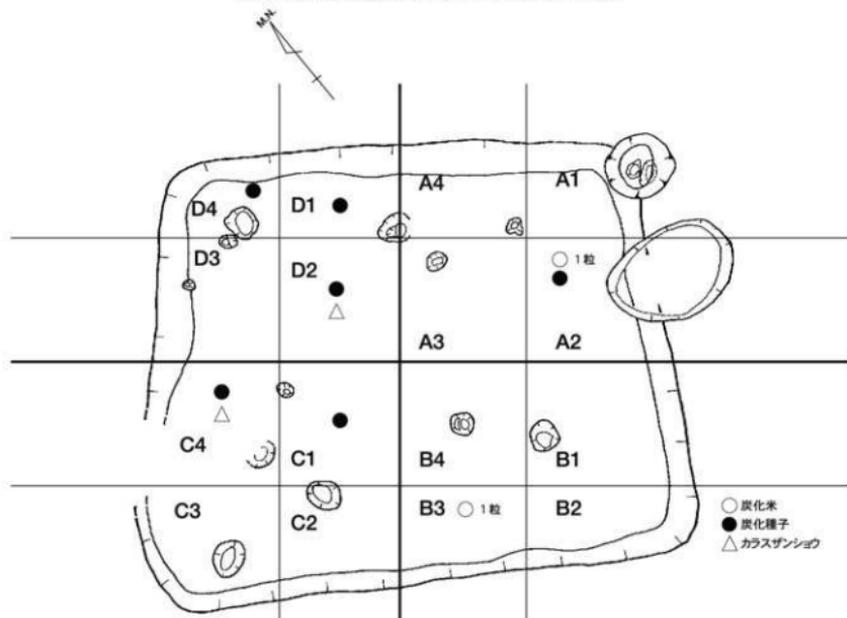
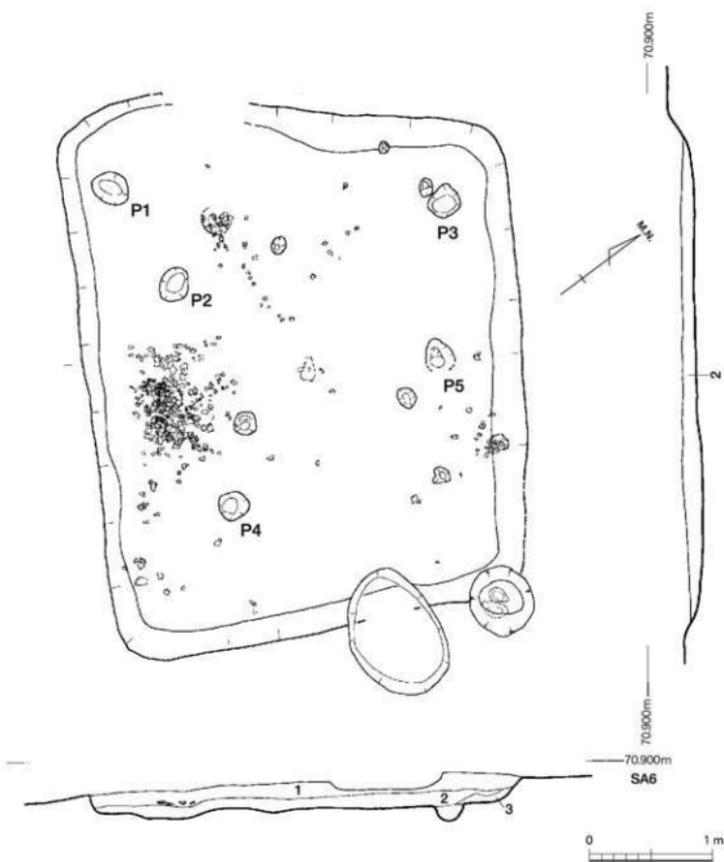


図51 SA 6 におけるフローテーション検出状況図 (S=1/40)



SA6 土層注記

- 1 黒褐色土 (10YR 2/2)  
若干の粘性をもつが、しまりはなく柔らかい。
- 2 暗褐色土 (7.5YR 3/2)  
黒褐色土に暗褐色土がまだらに入ったような土で、1と比べかなり明るい。1よりきめ細かく、やや中々している。粘性は低い、比較的硬くしまっている。
- 3 1と褐色土 (7.5YR 4/6) (K-Ah) が混じり合ったような土である。粘性がなく、しまりもなく、ほろほろしている。

図52 SA6 遺構実測図 (S=1/40)

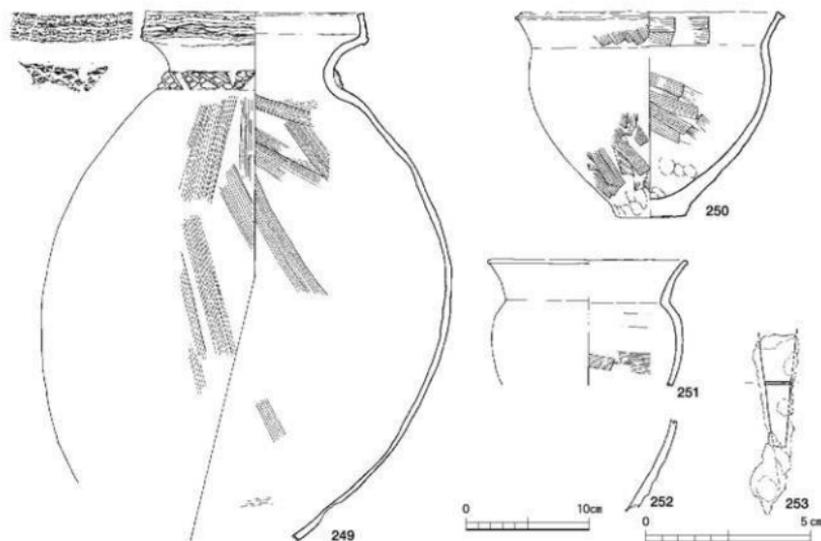


図53 SA 6 出土遺物実測図 (S=1/4、2/3)

#### 土坑 (図54・55)

土坑はK-Ah面で確認できたものが10基ある。その中でSC 6・11・12の3基は調査当初の調査区縁辺部にあたり、表土剥ぎののち土層などで遺構を確認したため、この3基のみ平面プランは半分しか記録が残っていない。また、SC 7は確認調査時に検出された。

SC 4はC 4グリッドに位置し、確認調査のトレンチにより一部破壊されている。上場1.15m×0.7m + α、中場0.86m×0.48m + α、下場0.43m×0.4m、深さ0.27mを測る。遺物は出土していない。

SC 5はE 4グリッドに位置し、SA 3に隣接し、SA 3より先に検出した。上場1.17m×0.93m、中場0.65m×0.42m、下場0.35m×0.26m、深さ0.3mを測る。埋土に炭化物を多量に含む。遺物は櫛描波状文を有する複合口縁密片256など10点ほど出土した。

SC 6はA 2グリッドに位置し、北側半分は表土剥ぎの際に破壊を受けた。上場1.54m×0.54m + α、下場1.4m×0.35m + α、深さ0.12mを測る。掘り込みは浅い。埋土に炭化物を多量に含む。土器片が1

点出土した。

SC 7はC 5グリッドに位置し、上場1.57m×1.12m、下場1.28m×0.97m、深さ0.35mを測る。確認調査時トレンチ11で検出している。土器片が1点出土した。

SC 8はB 5グリッドに位置し、上場1.18m×0.86m、中場0.94m×0.61m、下場0.64m×0.2m、深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。土層や堆積状況、掘り込みの形状から風倒木痕の可能性もある。

SC 9はB 5グリッドに位置し、上場1.4m×1.05m、下場1.0m×0.7m、深さ0.19mを測る。床面の半分程に焼土が広がる。遺物は出土していない。

SC 10はC 5グリッドに位置し、上場1.74m×1.16m、下場1.5m×0.95mを測る。深さは推定で5cmである。掘り込みは浅い。埋土の記録はとっていない。土器片が7点程出土した。

SC 11はA 2グリッドに位置し、北側半分は表土剥ぎの際に破壊を受けた。上場2.14m×0.5m + α、中場1.97m×0.43m + α、下場0.43m + α×0.19m + α、深さ0.13mを測る。掘り込みは浅い。遺物は出

土していない。

SC12はB 5グリッドに位置し、調査区西端で検出したので、西半分は調査区外である。上場1.3m×0.4m+α、下場1.25m×0.35m+α、深さ0.1mを測る。掘り込みは浅い。土器片が1点出土した。

SC13はC 2グリッドに位置し、V層面(MB 0)で検出した。上場0.65m×0.5m、下場0.17m×0.16mを測る。深さは推定で14cmである。半個体程度の

土器255が直立した状態で出土した。土坑の底面付近に拳大の礫が1点出土した。埋土には炭化物が多く含まれている。

## (2) 遺物

### ① その他の遺構の遺物 (図56)

254はほぼ完成のミニチュア土器である。D 2グリッドのMB 0面で検出したピット底面付近から出

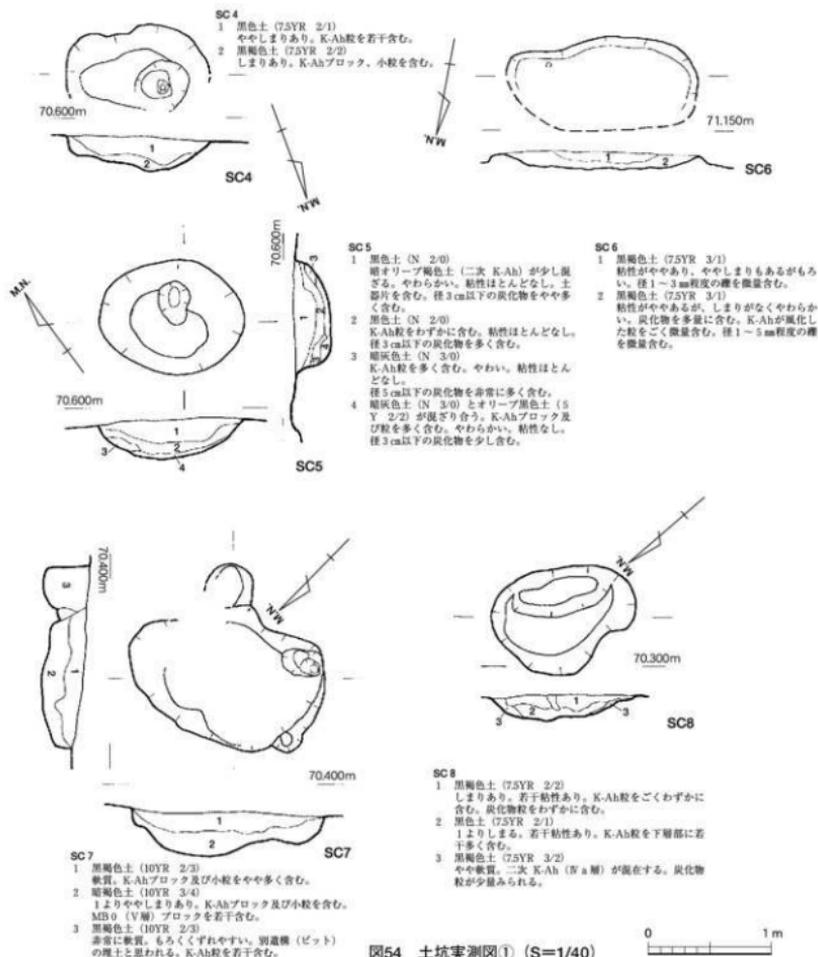


図54 土坑実測図① (S=1/40)

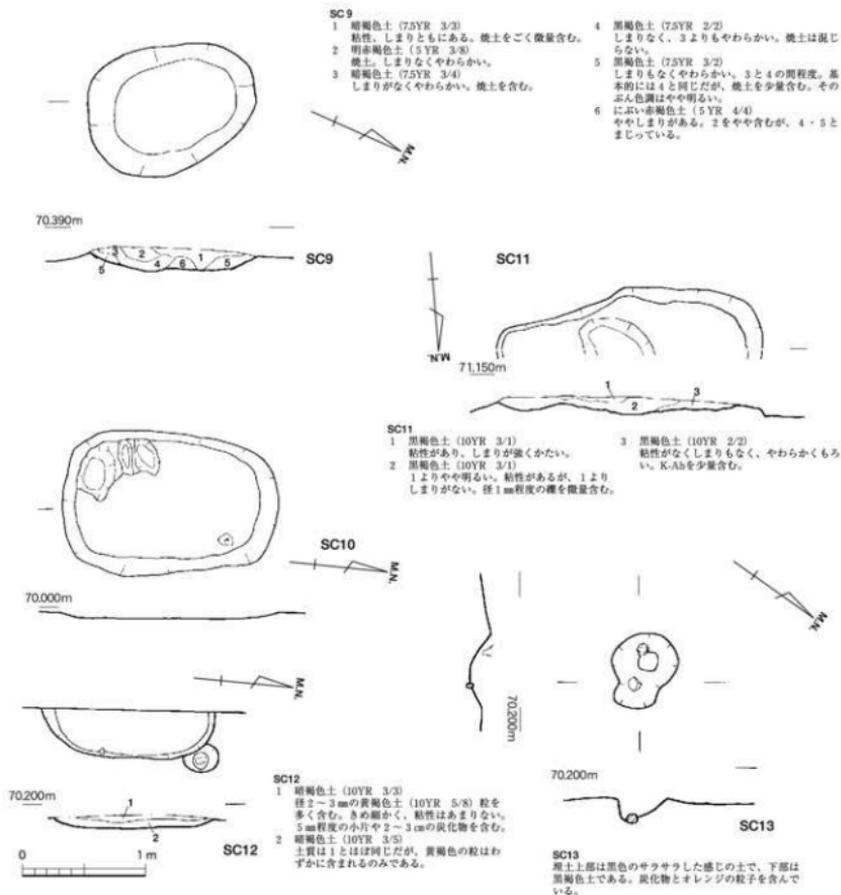


図55 土坑実測図② (S=1/40)

遺構名	グリッド	上場(m)	中場(m)	下場(m)	深さ(m)	遺物	炭化物	焼土	備考
SC4	C4	1.15±0.7	0.86×0.48+α	0.43×0.4	0.27	—	—	—	
SC5	E4	1.17±0.93	0.65×0.42	0.25×0.26	0.30	土器	○	—	遺物256
SC6	A2	1.54±0.54+α	—	1.4×0.35+α	0.12	土器	○	—	
SC7	C5	1.57±1.12	—	1.28×0.97	0.35	土器	—	—	
SC8	B5	1.18±0.86	0.94×0.61	0.64×0.2	0.21	—	—	—	風倒木痕?
SC9	B5	1.4±1.05	—	1.0×0.7	0.19	—	—	○	
SC10	C5	1.74±1.16	—	1.5×0.95	新定0.05	土器	—	—	
SC11	A2	2.14±0.5+α	1.97×0.43+α	0.42+α×0.19+α	0.13	—	—	—	
SC12	B5	1.3±0.4+α	—	1.25×0.35+α	0.10	土器	○	—	
SC13	C2	0.65±0.5	—	0.17×0.16	新定0.14	土器、礫	○	—	遺物255

表14 弥生時代~古墳時代土坑計測表

土した。

255は長胴の鉢形土器である。SC13から出土した。土器の表面は被熱のためか赤化し、非常に脆くなっている。

256はSC 5 出土の壺の複合口縁部である。外面に櫛描波状文を施している。

257はビット出土の壺の口縁部である。口縁部が大きく外反し、外湾している。

## ② 包含層出土の遺物 (図57・58)

258～268は甕である。258～261は頸部に刻み目突帯を有するものである。出土位置で分けると調査区北西部 (E 4～5・F 4～5 グリッド、確認トレンチ 5) では258～260、263、265～267が出土し、調査区南西部 (A 5 グリッド周辺) では261～262、264が出土している。調査区北西部はSA 3を含み、西側に傾斜していることもあり、遺物が集中しているといえる。

269～292は壺である。270～273は口縁が直立気味で、274～281は複合口縁部である。289は内外面ともミガキがみられる。291は頸部に突帯が廻り、横向きにV字形の施文がはいる。調査区中央部が削平によりⅢ層 (クロボク)・Ⅳ層 (K-Ah) が消失しているので壺の出土傾向同様、調査区周辺部 (北西

部、南西部、南東部) で遺物が多く出土している。

293～299は土器底部である。図化した中では297を除いてすべて調査区西端部で出土している。300は残存部が少なく、土器底部か高坏の受部かの判断が難しかったが、ここでは土器底部として報告する。301は器台の脚部で、1 cm 程度の穿孔が貫通している。

302～303は緑色凝灰岩製の磨製石鏃である。

## 第7節 その他の時代の遺物

304は土師質土器で、蓋の撮の部分である。

305～315は須恵器である。305～311は坏蓋の蓋部で、307～311は返りがない。312～313は坏蓋の坏部である。314～315はタタキ目のある胴部片で、器種は不明である (図59)。

316は青磁片である。317は磁器で土鍋の脚である。318は播鉢の口縁部である。

319は轆である。時期は古墳時代後半に比定される。320～321は銭貨で、寛永通宝である。この他に、雁首が全部で3点出土し、1点のみビット出土である。木質の管が残存しているものが2点ある。

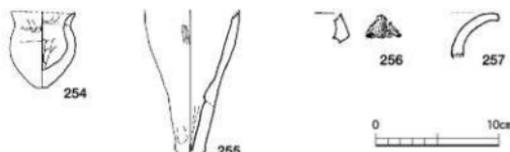


図56 その他の遺構出土遺物実測図 (S=1/4)

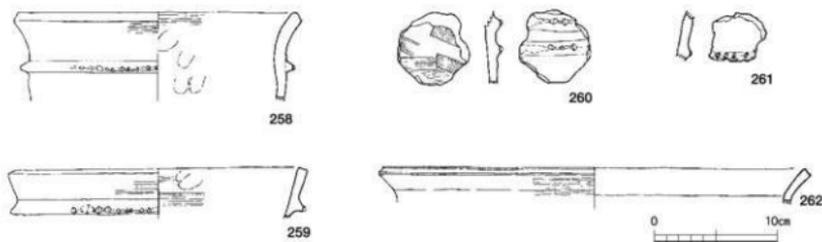


図57 包含層出土遺物実測図① (S=1/4)

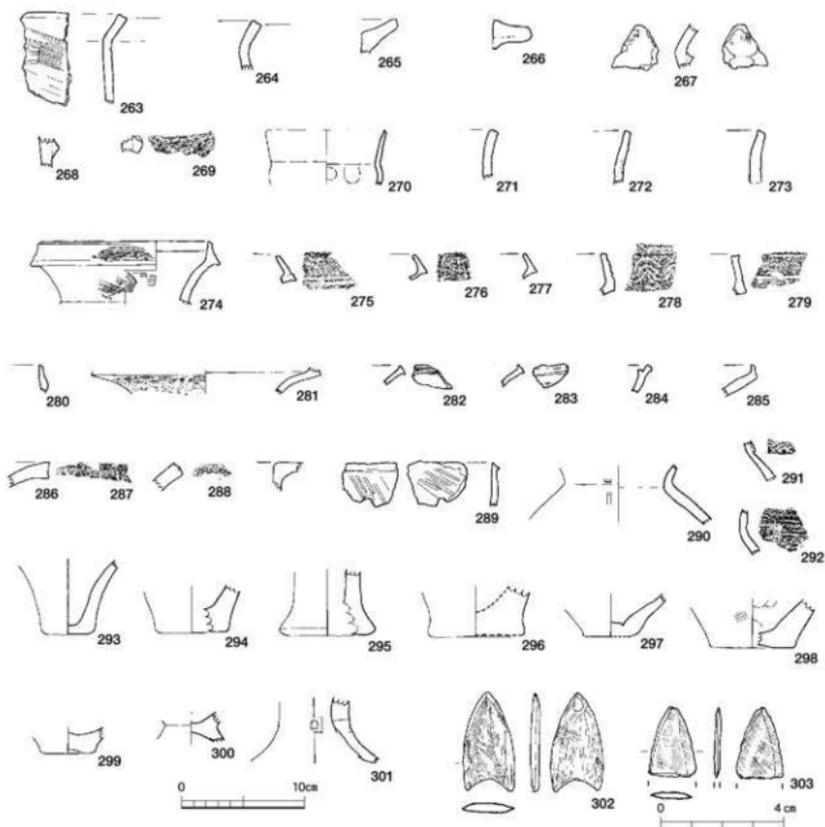


図58 包含層出土遺物実測図② (S=1/4)

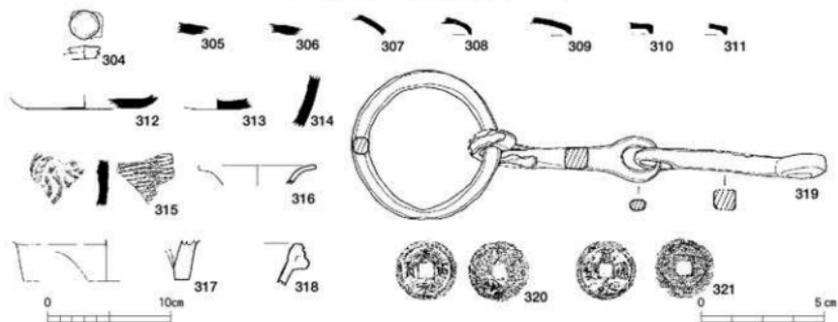


図59 その他の時代の遺物実測図 (S=1/4、1/2)

器種 番号	器種	部位	出土 位置	法量 (cm)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土	焼成	備考	
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面				内面
111	美	口縁～ 胴部	SA1	25.0	—	—	斜め、横、縦方向の ナデ	斜め、横方向のハケ 目	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	明赤褐色 (2.5YR 5/8)	1～3mm大の白色不透明 粒、1～4mm大の赤褐色 粒を含む。	良好	外面スス付着 残存率1/4
112	美	胴部～ 底部	SA1	—	6.7	—	縦方向のハケ目 指押さえ ナデ	斜め方向のハケ目	橙 (2.5YR 6/8)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	1～4mm大の黒褐色粒、 1～3mm大の赤褐色粒を 含む。	良好	風化気味
113	美	口縁～ 胴部	SA1	17.6	—	—	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	黄褐色 (10YR 8/6) 黒黒 黒 (5Y 2/1)	5mm以下の茶褐色粒を多 く含む。	良好	外面スス付着 内面黒焦 残存率1/5
114	美	口縁	SA1	21.8	—	—	横、斜め方向のナデ 工具痕	横、斜め方向のナデ 工具痕	浅黄褐色 (10YR 8/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	5mm以下の褐色粒、4mm 以下の黒・灰白色粒、3mm 以下の赤褐色粒を含む。	良好	外面スス付着 残存率1/6
115	美	口縁	SA1	—	—	—	ナデ	斜め方向のナデ	灰黄褐色 (10YR 4/2)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	5mm以下の茶褐色、灰白色 粒を多く含む。	良好	外面スス付着
116	美	胴部	SA1	—	—	—	斜め、横方向のナデ ナデ	横、縦方向のナデ 縦方向の工具によるナ デ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4) 黒 ナリツブ黒 (10YR 3/1)	5.5mm以下の茶褐色、灰白色 粒を多く含む。	良好	外面スス付着 内面黒焦 残存率1/5
117	美	底部	SA1	—	—	—	斜め、縦方向のナデ 指ナデ 指押さえ	横、斜め方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	5.5mm以下の茶褐色、灰白色 粒を多く含む。	良好	内外面スス付着 内面黒焦 残存率1/3
118	美	口縁	SA1	—	—	—	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	5mm以下の茶褐色、灰白色 粒を多く含む。	良好	外面スス付着
119	美	胴部～ 底部	SA1	—	4.1	—	斜め、横、縦方向の ナデ ナデ 指押さえ	斜め、縦方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	6mm以下の茶褐色、灰白色 粒を多く含む。	良好	外面スス付着 内面黒焦 残存率1/4
120	美	胴部	SA1	—	—	—	縦方向のナデナ デ ナデ	斜め方向のナデ工具 による横ナデ	浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	4.5mm以下の茶、黒褐色粒、 3mm以下の白色粒を含む。	良好	外面スス付着 残存率1/8
121	美	胴部～ 底部	SA1	—	5.15	—	斜め、横方向のナ デ 指痕	酒罎が著しく不明	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	3mm以下の粒、灰白色粒、 にぶい白色粒を多く含む。	良好	残存率1/5
122	美	底部	SA1	—	3.3	—	ナデ	ナデ	明黄褐色 (10YR 7/6)	ナリツブ黒 (7.5Y 3/1)	2～4mm大の黒褐色粒、 1～5mm大の赤褐色粒を 含む。	良好	内面黒焦 残存率1/4
123	美	底部	SA1	—	4.6	—	横ナデ	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	灰黄 (2.5Y 6/2)	1～4mm大の黒褐色粒、 1～3mm大の赤褐色粒を 含む。	良好	外面スス付着 内面黒焦 残存率1/2
124	変	口縁～ 胴部	SA1	12.15	—	—	縦方向のナデ ナデ 斜め方向のハケ目	横方向のナデ 指ナ デ 指痕	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	4.5mm以下の茶褐色、黒褐色 粒を多く含む。	良好	口縁欠
125	変	胴部	SA1	—	—	—	横方向のハケ目	横、斜め方向のハケ 目	にぶい黄褐色 (7.5YR 7/6)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	4.5mm以下の茶褐色、黒褐色 粒を多く含む。	良好	
126	変	口縁～ 胴部	SA1	12.2	—	—	横、斜め、縦、縦 方向のハケ目	横、斜め方向のハケ 目 指ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2.5mm以下の茶褐色、灰白色 粒を含む。	良好	図上復元 残存率1/2
127	変	胴部～ 底部	SA1	—	4.6	—	縦方向のナデ 指痕 横 斜め方向のハケ 目 工具痕	横、斜め方向のハケ 目 ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	にぶい黄褐色 (10YR 6/3) 黒黒 ナリツブ黒 (5Y 3/1)	5mm以下の赤褐色粒、3 mm以下の茶褐色粒、黒褐 色粒を含む。	良好	外面スス付着 外面一部黒焦 底部
128	変	口縁	SA1	21.0	—	—	ナデ	横方向の工具痕 指押さえ	橙 (7.5YR 6/6)	明黄褐色 (7.5YR 7/6) にぶい黄 (7.5YR 5/4)	1～3mm大の黒褐色粒、 1～3mm大の赤褐色粒を 含む。	良好	残存率1/12
129	変	口縁	SA1	—	—	—	工具による輪除文 縦方向のハケ目 ナ デ	斜め方向のハケ目の 後同方向のナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2～3mm大の赤褐色粒、 2mm大の灰褐色粒を含む。	良好	
130	変	胴部～ 胴部	SA1	—	—	—	斜め方向のハケ目の 後同方向のナデ ナ デ	ナデ 指痕	橙 (5 YR 6/8)	明黄褐色 (10YR 7/6)	1mm大の明赤褐色粒を 含む。	良好	内面に炭化物付着
131	変	胴部～ 底部	SA1	—	5.1	—	縦方向のナデ 縦方向のナデ 指押さえ	工具によるナデ 縦方向のナデ 指押さえ	明黄褐色 (10YR 7/6) 黒黒 黒 (5 YR 2/1)	明黄褐色 (10YR 7/6)	3.5mm以下の灰白色、茶褐 色粒、黒褐色粒を多く含む。	良好	外面スス付着、黒焦 残存率1/2
132	変	胴部～ 底部	SA1	—	4.1	—	縦方向のハケ目の後 同方向のナデ ナデ	ナデ	明黄褐色 (10YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2～4mm大の黒褐色粒、 赤褐色粒、2mm大の白色 不透明粒を含む。	良好	上げ底 残存率3/4
133	変	底部	SA1	—	2.8	—	縦方向のナデ 工具 痕 ナデ	指痕 指ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	明黄褐色 (10YR 7/6) 黒黒 黒 (10YR 2/1)	2mm以下の茶褐色、黒褐 色粒を多く含む、4.5mm大 の茶褐色粒を少量含む。	良好	外面スス付着、黒焦 底部
134	小変	口縁～ 底部	SA1	7.1	12.25	0.9	斜め、縦方向のハケ 目 ミガキ	斜め、横方向のナデ ナデ 工具痕の後ナ デ 指痕	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	1～3mm大の黒褐色粒、 1～3mm大の赤褐色粒を 含む。	良好	外面スス付着、黒焦 変形

表15 土器観察表①

遺物番号	器種	部位	出土位置	法量 (cm)			平土・調整・文様ほか		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	高さ	外面		内面				
							外面	内面	外面	内面			
135	鉢	口縁	SA 1	—	—	—	ハケ目 ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 6/6)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	25mm以下の茶褐色粒を多く含む。	良好	残存率 1 / 16
136	鉢	口縁	SA 1	—	—	—	縦、斜め方向のハケ目の後ナデ ナデ	斜め方向のハケ目	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	3mm以下の茶褐色粒を多く含む。4mm大の赤褐色粒を含む。	良好	内面黒黒 残存率 1 / 20
137	浅鉢	口縁→底部	SA 1	25.9	9.4	3.6	ナデ 縦方向のハケ目 斜め方向のミダギ	縦方向のハケ目 斜め方向のミダギ	黄褐色 (10YR 5/6) 黒 (10YR 2/1) 赤褐色 (5 YR 4/8)	黄褐色 (10YR 5/6) 黒 (10YR 3/1)	2mm大の黒褐色粒。2~4mm大の赤褐色粒を含む。	良好	内外面黒黒 残存率 1 / 4
138	器台	脚	SA 1	—	18.1	—	斜め方向のハケ目の後ナデ 横方向のハケ目横ナデ	横方向のハケ目の後同方向のナデ	橙 (7.5YR 6/8)	橙 (7.5YR 7/6)	2~4mm大の赤褐色。黒褐色粒。1mm大の白色不透明粒を含む。	良好	
161	羹	口縁	SA 2	27.6	—	—	ナデ 横方向のハケ目 工具痕	横方向のハケ目	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	明黄褐色 (10YR 7/6)	7mm以下の茶褐色粒を多く含む。	良好	残存率 1 / 8
162	大羹	口縁→腹部	SA 3	57.0	—	—	ナデ 横方向のナデ 縦、斜め、横方向のハケ目 工具痕	ナデ 指頭痕 横、斜め方向のハケ目の上から斜め方向のミダギ	橙 (7.5YR 7/6)	灰 (2.5Y 6/1) 灰黄 (5 YR 7/8)	35mm以下の灰白色。茶褐色。黒褐色粒を含む。	良好	同上復元 残存率 1 / 6
163	大羹	口縁→腹部	SA 3	32.4	—	—	斜め方向のハケ目 ナデ	横方向のハケ目 ナデ 指頭痕 横方向のナデ 工具痕	橙 (7.5YR 7/6)	灰 (5 Y 4/1) 浅黄褐色 (7.5YR 8/4)	35mm以下の赤褐色。黒褐色粒を多く含む。	良好	残存率 1 / 10
164	大羹	腹部→胴部	SA 3	—	—	—	斜め、縦方向のハケ目 ナデ	横、斜め、縦方向のナデ 指頭痕 工具痕	橙 (5 YR 7/6)	灰 (5 Y 4/1) 灰黄 (2.5Y 7/2)	2mm以下の赤褐色。黒褐色。灰白色粒を多く含む。5mm大、1cm大の灰白色粒を1つつ含む。	良好	残存率 1 / 8
165	大羹	胴部→腹部	SA 3	—	—	—	縦、斜め方向のハケ目	縦、横方向のナデ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	黒 (10YR 2/1)	3mm以下の灰白色粒。茶褐色粒。黒褐色粒を多く含む。	良好	外面スス付着 内面黒黒
166	羹	口縁→底部	SA 3	32.6	40.0	6.6	ナデ 駒目日交帯 縦、斜め方向のハケ目	指押さえ ナデ 指頭痕	橙 (5 YR 7/6)	灰 (7.5Y 5/1)	5mm以下の灰褐色をわずかに含む。3mm以下の白色粒を少し含む。2mm以下の黒褐色粒を多く含む。	良好	下城系 外面スス付着 駒目二重交帯 土灰 残存率 1 / 4
167	羹	口縁→胴部	SA 3	33.3	—	—	ナデ 駒目日交帯 斜め方向のハケ目	ナデ 指押さえ 横、斜め方向のハケ目 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	4mm以下の茶褐色。灰白色粒を多く含む。	良好	下城系 口縁突 内外面スス付着 外面浅黄褐色 駒目二重交帯
168	羹	口縁→腹部	SA 3	26.0	—	—	横ナデ 駒目日交帯 斜め方向のハケ目	横、斜め方向のナデ 指頭痕 ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (7.5YR 7/4)	35mm以下の茶褐色。黒褐色。赤褐色粒を含む。	良好	外面スス付着 駒目日交帯 残存率 1 / 4
169	羹	口縁	SA 3	—	—	—	ナデ ハケ目 駒目日交帯	斜め方向のナデ 指押さえ	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	5mm以下の白色。茶。黒褐色粒を多く含む。	良好	外面スス付着 駒目日交帯
170	羹	胴部	SA 3	—	—	—	斜め、横、縦方向のハケ目の後ナデ 駒目日交帯	横方向のハケ目の後に同方向のナデ	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3mm以下の白色。茶。黒褐色粒を多く含む。	良好	外面スス付着 駒目日交帯
171	羹	口縁	SA 3	—	—	—	横ナデ 指頭痕 駒目日交帯	横ナデ 工具による斜め方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	25mm以下の灰白色粒。1mm以下の黒褐色。黒褐色。0.5mm以下の半透明粒を含む。	良好	外面スス付着 駒目日交帯
172	羹	口縁	SA 3	—	—	—	ナデ 交帯	ナデ	にぶい橙 (10YR 6/4)	にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	15mm以下の褐色。灰褐色を含む。	良好	内外面スス付着 交帯
173	羹	胴部	SA 3	—	—	—	横ナデ 駒目日交帯	指押さえ 斜め方向のナデ	にぶい橙 (10YR 7/3)	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	7mm以下の明赤褐色粒。0.5mm以下の灰白色。黒褐色粒。微細なガラス粒を含む。	良好	駒目日交帯
174	羹	口縁→底部	SA 3	29.5	32.2	6.8	縦、斜め方向のハケ目 横方向に丁寧なナデ	横、斜め方向にハケ目 ナデ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	4mm以下の茶褐色。灰白色。赤褐色粒を少量含む。	良好	残存率 底部定形 口縁、胴部 1 / 2 外面スス付着
175	羹	口縁→底部付近	SA 3	18.0	—	—	横方向にナデ 斜め、縦方向のハケ目	横方向のハケ目の後同方向にナデ 縦方向にハケ目 指頭痕 ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	浅黄褐色 (10YR 8/4) 橙 (5 YR 7/6)	2mm以下の灰色。茶褐色。8mm以下の灰白色粒を多く含む。	良好	外面スス付着。 黒帯 内面黒黒
176	羹	口縁	SA 3	—	—	—	横ナデ	工具による横、斜め方向のナデ 横ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい橙 (10YR 7/4)	25mm以下の灰白色粒。1mm以下の黒褐色。0.5mm以下の半透明粒を含む。	良好	外面スス付着
177	羹	口縁→胴部	SA 3	25.0	—	—	横方向のナデ 縦、斜め方向のハケ目	ナデ 指ナデの上から斜め方向のハケ目	橙 (7.5YR 7/6)	暗黄褐色 (10YR 5/2) 橙 (7.5YR 7/6)	35mm以下の赤褐色。黒褐色。灰白色粒を多く含む。	良好	同上復元 残存率 1 / 3 外面スス付着
178	羹	口縁→胴部	SA 3	25.9	—	—	ナデ 指押さえ ナデ 斜め、横方向のナデ	ナデ 斜め方向のナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	25mm以下の褐色。灰白色粒を含む。	良好	同上復元 外面スス付着 内面黒黒
179	羹	口縁	SA 3	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	2mm以下の赤褐色粒。1mm以下の暗赤褐色粒。微細なガラス粒を含む。	良好	外面スス付着

表16 土器観察表②

遺物番号	器種	部位	出土位置	法量 (cm)			手法・形状・文様ほか		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
180	甕	口縁	SA3	—	—	—	横ナテ	横ナテ	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	2mm以下の灰白色、暗色、赤褐色を多く含む。	良好	
181	甕	口縁	SA3	—	—	—	横ナテ 工具痕	横ナテ	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	2mm以下の暗褐色、1mm以下の暗灰色、0.5mm以下の灰白色を含む。	良好	
182	甕	口縁へ胴部	SA3	161	—	—	横ナテ ナテ	横ナテ 指頭痕 斜め方向のナテ 工具痕	暗灰 (5Y 4/1)	灰 (5Y 4/1)	1mm以下の灰白色、赤褐色、0.5mm以下の赤褐色を含む。	良好	外面スス付着、黒炭 内面黒炭 残存率 1/6
183	甕	口縁	SA3	—	—	—	横ナテ	横ナテ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	6mm以下の暗褐色、25mm以下の暗灰色、1.2mm以下の灰白色を含む。	良好	外面スス付着
184	甕	口縁	SA3	—	—	—	横ナテ 指頭痕 斜め方向のナテ	横ナテ 工具痕 斜め方向のナテ	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	2mm以下の暗褐色、1mm以下の暗灰色、1.2mm以下の灰白色を含む。	良好	内面スス付着
185	甕	口縁へ胴部	SA3	162	—	—	横、縦方向のナテ	横ナテ 指頭痕 ナテ	灰黄緑 (10YR 6/2)	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	1.5mm以下の暗褐色、暗灰色、1mm以下の灰白色を含む。	良好	内外面スス付着 残存率 1/7
186	甕	口縁へ胴部	SA3	—	—	—	縦方向のハケ目 ナテ 斜め方向のナテ	ハケ目の後縁方向のナテ 斜め方向のナテ 斜め方向のナテ 指頭痕	にぶい橙 (7.5YR 6/4) 黒 (5Y 2/1)	浅黄 (2.5YR 7/4) オリーブ黒 (5Y 4/1)	1mm以下の灰色、茶褐色を多く含む。	良好	頂上復元 外面スス付着
187	甕	口縁へ胴部	SA3	—	—	—	横ナテ 斜め方向のナテ	横ナテ 斜め方向のナテ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1.5mm以下の灰白色、1mm以下の暗褐色、0.5mm以下の赤褐色を含む。	良好	頂上復元 外面スス付着
188	甕	口縁	SA3	—	—	—	ナテ 指ナテ 工具痕 斜め方向にハケ目	横ナテ	にぶい黄緑 (10YR 7/2)	にぶい黄緑 (10YR 7/2)	3mm以下の茶褐色、赤茶褐色、黒褐色を含む。	良好	残存率 1/13
189	甕	口縁へ胴部	SA3	164	—	—	ナテ 指頭痕 斜め方向のナテ	ナテ 指頭痕 斜め方向のナテ 斜め方向のナテ	にぶい黄緑 (10YR 6/2)	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	3mm以下の茶褐色、赤茶褐色、黒褐色、灰色を含む。	良好	外面スス付着 内面黒炭 残存率 1/2
190	甕	胴部	SA3	—	—	—	斜め方向のナテの残ナテ	横方向のハケ目	明黄緑 (10YR 6/6)	黒褐 (10YR 3/1)	1~4mmの赤褐色、浅黄緑、灰白色、黒褐色を含む。	良好	ナタキ 内面黒炭
191	甕	胴部	SA3	—	—	—	斜め方向のナテの残ナテ	ナテ	橙 (7.5YR 6/8)	にぶい黄緑 (10YR 5/4)	1~4mmの赤褐色、灰白色、1mm以下の白色を含む。	良好	ナタキ 内面灰化物付着
192	甕	胴部	SA3	—	—	—	斜め、横方向のナテ	ナテ	橙 (7.5YR 6/8)	にぶい黄緑 (10YR 5/4)	1~3mm以下の赤褐色、灰白色を含む。	良好	ナタキ
193	甕	底部	SA3	—	74	—	ナテ ハケ目 横方向のハケ目	ナテ ハケ目 横方向のハケ目	浅黄緑 (10YR 8/4) 黒炭 灰黄緑 (2.5Y 4/1)	オリーブ黒 (5Y 3/1)	1~2mm以下の赤褐色、黒褐色、灰色を含む。	良好	残存率 1/2
194	甕	底部	SA3	—	62	—	ナテ	ナテ	灰黄 (2.5Y 6/2)	にぶい黄 (2.5Y 6/3)	1~3mm以下の赤褐色、黒褐色、白色を含む。	良好	残存率 1/2
195	甕	底部	SA3	—	675	—	縦方向のハケ目 ナテ	ナテ	黄緑 (7.5YR 6/6) 橙 (7.5YR 7/6)	黄灰 (2.5Y 4/1)	最大7mmの赤褐色、黒褐色、灰白色を含む。	良好	外面スス付着 外面底部黒炭 内面黒炭
196	甕	底部	SA3	—	65	—	縦方向のハケ目 ナテ	ナテ	浅黄 (2.5Y 7/3)	黒褐 (2.5Y 3/1)	2mm以下の茶褐色、5mm以下の灰白色を含む。	良好	内外面スス付着 外面底部黒炭
197	甕	底部	SA3	—	35	—	ナテ	ナテ 指頭痕	にぶい黄緑 (10YR 7/4) 黒炭 黒褐 (2.5Y 3/1)	黄灰 (2.5Y 5/1)	1~3mm以下の赤褐色、黒褐色、灰白色を含む。	良好	外面底部黒炭 残存率 1/3
198	壺	口縁へ底部	SA3	107	76	110	丁寧なナテ ナテ	丁寧なナテ 工具痕	にぶい橙 (7.5YR 7/4) 黒 (7.5Y 2/1)	橙 (7.5YR 6/6)	2mm以下の灰白色、暗灰色、暗褐色を多く含む。	良好	外面黒炭 底部変形
199	壺	口縁	SA3	—	—	—	ナテ	ナテ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	2mm以下の茶、暗褐色を多く含む。	良好	198と同一か 穿孔あり
200	壺	口縁	SA3	—	—	—	ナテ	ナテ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1mm以下の暗灰色、明褐色を多く含む。	良好	198と同一か 穿孔あり
201	壺	口縁	SA3	241	—	—	横方向のナテ 縦方向のハケ目 工具痕	ナテ	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	浅黄緑 (7.5YR 8/6)	2mm以下の茶褐色を多く含む。	良好	残存率 1/6
202	壺	口縁	SA3	—	—	—	ナテ	ナテ	橙 (7.5YR 7/6) 黒炭 (7.5YR 2/1)	橙 (7.5YR 6/6)	2.5mm以下の茶褐色を多く含む。	良好	残存率 1/11
203	壺	口縁	SA3	172	—	—	横方向のナテ 縦方向にハケ目の残ナテ	横方向のナテ 横、斜め方向のハケ目	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	3mm以下の茶褐色、赤褐色、黒褐色を含む。	良好	残存率 1/5
204	壺	口縁	SA3	—	—	—	摩耗が著しく不明		浅黄 (10YR 8/4)	浅黄 (2.5Y 7/4)	1~2mm以下の赤褐色、黒褐色を含む。	良好	

表17 土器観察表③

遺物番号	器種	部位	出土位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
205	壺	口縁	SA 3	—	—	—	ナデ	摩耗が著しく不明	浅黄緑 (7.5YR 8/6)	浅黄緑 (7.5YR 8/6)	2.5mm以下の赤褐色、黒褐色を多く含む。	良好	
206	壺	口縁	SA 3	5.5	—	—	ナデ 竹管文	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	3mm大の灰白色、2mm以下の赤褐色、黒褐色を多く含む。	良好	口縁端部に竹管文
207	壺	口縁→胴部	SA 3	11.8	—	—	ナデ	斜め方向のナデ 指痕	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	浅黄緑 (10YR 8/4)	5mm以下の灰色、茶褐色を多く含む。	良好	残存率 1/3
208	壺	口縁	SA 3	—	—	—	櫛筋漉状文 沈泥	ナデ	黄緑 (7.5YR 7/8)	橙 (1.5 YR 7/8)	3mm以下の灰色、灰白色、赤褐色を多く含む。	良好	複合口縁、櫛筋漉状文
209	壺	口縁	SA 3	11.85	—	—	斜め方向のハケ目 の後方向のナデ ナデ	横ナデ ナデ	浅黄 (2.5Y 8/4)	浅黄 (2.5Y 8/4)	1～3mm以下の赤褐色、灰褐色、1mm大の白色粒を多く含む。	良好	残存率 1/5
210	壺	口縁	SA 3	13.45	—	—	横ナデ	横ナデ	明黄緑 (10YR 6/6)	にぶい黄緑 (10YR 5/4)	3mm大と7mm大の白色粒を白色粒を多く含む。	良好	口縁部に穿孔あり
211	壺	口縁	SA 3	—	—	—	ナデ ミガキ	横方向のハケ目 ナデ 指痕	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	1～2mm以下の赤褐色、黒褐色を多く含む。	良好	外面黒黒
212	壺	胴部	SA 3	—	—	—	ナデ 二重変帯	ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	明黄緑 (10YR 7/6)	1～2mm以下の赤褐色、黒褐色を多く含む。	良好	外面スス付着 二重変帯
213	壺	胴部	SA 3	—	—	—	ミガキ 変帯 横方向のハケ目 ナデ 横ナデ	横方向のハケ目	灰黄 (2.5Y 6/2)	にぶい黄 (2.5Y 6/2)	1～3mm以下の赤褐色、黒褐色を多く含む。	良好	外面スス付着、黒黒 変帯
214	壺	胴部→底部付近	SA 3	—	—	—	横、斜め、縦方向の ミガキ ハケ目	横、縦、斜め方向の ナデ 工具痕 指痕	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい黄緑 (10YR 6/3)	3mm以下の茶褐色、黒褐色を多く含む、2mm以下の手透明粒を多く含む。	良好	外面黒黒 残存率 1/2
215	壺	胴部→底部付近	SA 3	—	—	—	斜め、縦方向のハケ 目の後ナデ	斜め方向のナデ 指痕	にぶい黄 (2.5Y 6/4)	にぶい黄 (2.5Y 6/2)	3mm以下の乳白色、灰白色、暗褐色を多く含む。	良好	外面スス付着 内面灰化物付着 胴部残存率 1/3
216	壺	底部	SA 3	—	—	—	ナデ 指押さえ	斜め方向のナデ	にぶい橙 (5.5YR 7/4)	浅黄緑 (10YR 8/4)	4mm以下の灰色、茶褐色を多く含む。	良好	
217	壺	底部	SA 3	—	5.0	—	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ 下方向に粘土のじぼり	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	5mm以下の灰褐色、茶褐色を多く含む。	良好	
218	高杯	脚部	SA 3	—	裾部 径 14.1	—	方形透かし、変帯 横ナデ ハケ目 ミガキ 指押さえ	横ナデ 指ナデ 指押さえ 工具痕 ハケ目	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	にぶい黄緑 (10YR 7/4) 灰黄 (2.5Y 4/1)	1.5mm以下の茶褐色、黒褐色を多く含む、4mm以下の茶褐色を少量含む。	良好	方形透かし 残存率 1/2
219	高杯	脚部	SA 3	—	—	—	摩耗が著しく不明	摩耗が著しく不明	橙 (7.5YR 7/6)	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	3mm以下の赤褐色、灰白色、灰褐色を多く含む。	良好	
220	高杯	脚部	SA 3	—	裾部 径 16.1	—	ナデ 指痕	横ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	3mm以下の灰色、灰白色、赤褐色、茶褐色を多く含む。	良好	
221	器台	脚部	SA 3	—	—	—	円形透かし 工具痕 縦方向にヘラミガキ	ナデ 指押さえ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	3mm以下の赤褐色、灰白色、灰褐色を多く含む。	良好	円形透かし 残存率 1/4
243	甕	口縁→胴部	SA 5	29.8	—	—	横方向のナデ 工具 跡み日変帯 指痕	横方向のナデ 工具 跡み 斜め方向のナデ	浅黄 (2.5Y 8/4)	浅黄 (2.5Y 8/4)	3mm以下の赤褐色、暗褐色を多く含む。	良好	跡み日変帯、指痕 外面スス付着 内面スス付着
244	大甕	口縁	SA 5	—	—	—	横方向のナデ	横ナデ 横方向のハ ケ目の後ミガキ	橙 (7.5YR 7/6) 暗灰 (10YR 4/1)	橙 (7.5YR 7/6) にぶい黄緑 (10YR 6/3)	3mm以下の灰褐色、暗褐色を多く含む。	良好	
245	壺	胴部	SA 5	—	—	—	横方向のナデ 変帯 跡み、横方向の工具 によるハケ目	横方向の工具による ハケ目	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	オリーブ黒 (7.5YR 3/1)	2mm以下の灰褐色、暗褐色を多く含む。	良好	変帯
246	甕	底部付近	SA 5	—	—	—	横方向の工具による ハケ目	横方向のナデ	淡黄 (2.5Y 8/4)	淡黄 (2.5Y 8/4)	2.5mm以下の茶色、灰褐色、暗褐色を多く含む。	良好	
247	壺	口縁→胴部	SA 5	28.5	—	—	ナデ 指押さえ 横 方向のナデ 縦方向 のハケ目 変帯	円形浮文 ナデ 横、斜め方向のハケ 目 指痕	浅黄緑 (7.5YR 8/4)	淡赤褐色 (2.5Y 7/4) 灰 (1.5 Y 4/1)	2mm以下の黒褐色、茶褐色、黄褐色、灰白色を多く含む、1.5mm以下の手透明粒を多く含む。	良好	円形浮文、跡み欠口縁 外面スス付着 内面浮文付着スス付着 残存率 1/2
249	壺	口縁→底部付近	SA 6	17.7	—	—	櫛筋漉状文 押しきり ハケ目 ナデ 板状 物状の跡み日変帯 斜め、縦方向のハケ 目	斜め、縦方向のハケ 目 ナデ	灰黄緑 (10YR 6/2) にぶい黄緑 (10YR 7/4) 橙 (2.5YR 6/6)	にぶい黄緑 (10YR 6/3) 暗灰 (10YR 5/1)	3～4mm大の茶褐色、黒褐色、黄褐色を多く含む、2.5mm大の灰白色粒、6.5mm大の茶褐色を少量含む。	良好	複合口縁、櫛筋漉状文 外面黒黒 内面スス付着
250	壺	口縁→底部	SA 6	20.8	16.4	5.8	横ナデ 斜め方向の ハケ目 ナデ 板状 物状の跡み日変帯 工具による縦方向の ナデ 指押さえ	ハケ目 横ナデ 斜め方向にヘラナデ リの後ナデ 指痕	にぶい橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	5mm以下の黒色、白色、茶色、灰褐色を多く含む。	良好	内面黒黒 残存率 4/7
251	壺	口縁→胴部	SA 6	15.8	—	—	横ナデ	横方向のハケ目の後 ナデ	橙 (1.5 YR 6/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2.5mm以下の黒褐色、灰黄褐色を多く含む。	良好	内面黒黒 外面にスス付着
252	壺	胴部	SA 6	—	—	—	摩耗が著しく不明	ナデ	橙 (1.5 YR 7/6)	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	3mm以下の赤褐色、暗褐色を多く含む。	良好	器と同一土 内外面にスス付着

表18 土器観察表④

遺物番号	種類	形態	部位	出土位置	法量 (cm)			手法・製法・文様ほか		色調		胎土	構成	備考		
					口径	底径	高さ	外側		内側					外側	内側
								表面	内面	表面	内面					
254	粘土土器	小形甕	口縁一部分	SH 8	5.1	1.0	6.1	指押さえ 筋ナデ 横、斜め方向のナデ	指押さえ 筋ナデ	黄緑 (7.5YR 7/6)	黄緑 (7.5YR 7/6)	2mm以下の灰色、灰白、褐色色を多く含む。	良好	ほぼ完成 内面黒化		
255	粘土土器	不明	胴部一部分	SC13	—	2.0	—	摩耗が著しく不明 指押痕 ミヤキ	縦方向のナデ	暗赤褐 (2.5YR 3/2) 赤褐色 (2.5YR 5/4)	暗赤褐 (2.5YR 3/2)	3mm以下の茶褐色、茶褐色、2mm以下の灰白色を含む。	良好			
256	粘土土器	甕	口縁	SC 5	—	—	—	磨損流状文 ナデ	ナデ	黄褐色 (10YR 8/4)	黄褐色 (10YR 8/4)	3mm以下の角の丸い褐色粒を含む。	良好			
257	粘土土器	甕	口縁	SH 6	—	—	—	ナデ	ナデ	橙 (5.5YR 6/8)	橙 (7.5YR 7/6)	5mm以下の赤褐色、茶褐色を含む。	良好	残存率 1/9		
258	粘土土器	甕	口縁	F 5	21.00	—	—	ナデ 横方向のハケ目 斜め方向のナデ 胴み目交帯	横方向のハケ目 ナデ	明黄褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	3mm以下の茶褐色粒、4mm以下の黒褐色粒を含む。	良好	胴み目交帯 残存率 1/11		
259	粘土土器	甕	口縁	E 4	24.3	—	—	横方向のハケ目の後 同方向のナデ 胴み目交帯 ナデ	横方向のハケ目	明黄褐 (10YR 7/6)	黄褐色 (10YR 8/4)	3mm以下の黒褐色粒、4mm以下の赤褐色粒を含む。	良好	外面スス付着 胴み目交帯 残存率 1/9		
260	粘土土器	甕	胴部	S トレ	—	—	—	横、斜め方向のナデ、ハケ目	横、斜め方向のナデ、ハケ目	暗灰黄 (7.5YR 7/6)	暗灰黄 (2.5YR 5/2)	3mm以下の赤褐色、茶褐色、黒褐色粒、1mm以下の白色透明粒を含む。	良好	胴み目二重交帯		
261	粘土土器	甕	胴部	A 5	—	—	—	横方向のナデ 胴み目交帯	ナデ	淡黄 (2.5Y 8/3)	淡黄 (2.5Y 8/3)	2mm以下の茶褐色粒、1mm以下の黒色粒、透明光沢粒を含む。	良好	胴み目交帯		
262	粘土土器	甕	口縁	A 5	34.0	—	—	ナデ 横方向のハケ目	横方向のナデ	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	2mm以下の茶褐色粒、1mm以下の黒褐色粒、透明光沢粒を含む。	良好	残存率 1/8		
263	粘土土器	甕	口縁一部分	E 5	—	—	—	斜め方向のハケ目 ナデ	横方向のナデ	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	にぶい黄緑 (10YR 6/3)	2mm以下の茶褐色、黒褐色粒を含む。	良好	残存率 1/15		
264	粘土土器	甕	口縁	A 5	23.2	—	—	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	黄褐色 (10YR 8/3)	2mm以下の茶褐色粒、1mm以下の黒褐色粒、透明光沢粒を含む。	良好	残存率 1/10		
265	粘土土器	甕	口縁	E 4 E 5	—	—	—	横方向のナデ	横方向のナデ 工具痕	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	橙 (5.5Y 7/6)	2mm以下の赤褐色、茶褐色、黒褐色粒を含む。	良好	残存率 1/11		
266	粘土土器	甕	胴部	E 5	—	—	—	横ナデ ナデ	不明	橙 (7.5YR 7/6)	黄緑 (7.5YR 7/6)	1～3mm以下の赤褐色粒、1～2mmの灰白粒を含む。	良好	胎土付け交帯		
267	粘土土器	甕	交帯	—	—	—	—	ハケ目 横ナデ 交帯	横方向のハケ目 ナデ	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	黄褐色 (7.5YR 7/4)	1～2mm程度の茶褐色、褐色粒を多く含む。	良好	交帯		
268	粘土土器	甕	交帯	—	—	—	—	横ナデ ナデ 交帯	ナデ	灰 (5.5 Y 5/1)	黄褐色 (2.5Y 7/3)	1mm大の黒褐色、赤褐色粒を含む。	良好	交帯		
269	粘土土器	—	交帯	S トレ	—	—	—	赤帯による胴み目交帯	不明	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	黄褐色 (10YR 7/2) 暗灰 (10YR 6/1)	1～5mmの褐色粒を多く含む。	良好	交帯		
270	粘土土器	甕	口縁一部分	S トレ	9.6	—	—	横ナデ ナデ	ナデ 指押痕	黄緑 (7.5YR 7/8)	黄緑 (5.5Y 7/8)	5mm以下の赤褐色粒、黒褐色、灰白色を含む。	良好	外面スス付着 内面炭化物付着 残存率 1/7		
271	粘土土器	甕	口縁	F 5	—	—	—	横方向のナデ	横方向のナデ	暗赤 (7.5YR 3/4)	暗赤 (7.5YR 3/4)	3mm以下の黒褐色、灰白色を含む。	良好			
272	粘土土器	甕	口縁	D 2	—	—	—	斜め方向のナデ ナデ 指押痕	斜め方向のハケ目 ナデ 指押痕	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	黄褐色 (10YR 8/4)	3mm以下の赤褐色粒を含む。	良好	残存率 1/9		
273	粘土土器	甕	口縁	—	—	—	—	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	横方向のナデ 斜め方向のハケ目	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	にぶい黄緑 (10YR 7/3)	3mm以下の茶褐色、5mm以下の黒褐色粒を含む。	良好			
274	粘土土器	甕	口縁	S トレ	13.4	—	—	磨損流状文 ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	にぶい黄緑 (5.5YR 6/4)	にぶい黄緑 (5.5YR 6/4)	1～2mm程度の褐色粒を含む。	良好	磨損流状文 複合口縁		
275	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	横ナデの接線磨損流状文 横ナデの後沈線文 横ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/6)	2mm以下の角の丸い褐色粒、1mm以下の角の丸い褐色粒を含む。	良好	磨損流状文 複合口縁		
276	粘土土器	甕	口縁	A 2	—	—	—	磨損流状文 ナデ	ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	灰黄 (2.5Y 7/2)	2mm以下の角の丸い明褐色粒、3mm以下の灰褐色粒を含む。	良好	磨損流状文 複合口縁		
277	粘土土器	甕	口縁	A 2	—	—	—	ナデ	ナデ	黄緑 (7.5YR 7/8) 暗灰 (10YR 6/1)	暗灰 (10YR 6/1)	3mm以下の角の丸い褐色粒、2mm以下の角の丸い褐色、淡黄色を含む。	良好			
278	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	磨損流状文 ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR 7/6)	黄緑 (7.5YR 6/6)	3mm以下の角の丸い灰褐色粒、褐色粒、2.5mm以下の角の丸い褐色粒、暗褐色粒を含む。	良好	磨損流状文 複合口縁		
279	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	磨損流状文 浅い凹線 横ナデ ナデ	ナデ	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	1mm程度の褐色粒を多く含む。	良好	磨損流状文 複合口縁		
280	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	ナデ	ナデ	黄褐色 (10YR 8/4)	黄褐色 (10YR 8/4)	2.5mm以下の角の丸い褐色粒を多く含む。	良好	複合口縁		
281	粘土土器	甕	口縁	S トレ S トレ	—	—	—	ナデ	不明	にぶい黄緑 (2.5YR 6/4)	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	2～3mmの灰白色、褐色粒を多く含む。	良好	複合口縁		
282	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	ナデ 沈線	ハケ目	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄緑 (10YR 7/4)	2mm以下の角の丸い褐色粒、1.5mm以下の角の丸い赤褐色粒を含む。	良好			
283	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	ナデの後沈線文二重	ナデ	橙 (5.5Y 7/8) 橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	2mm以下の角の丸い褐色粒、2.5mm以下の角の丸い灰褐色粒を含む。	良好			
284	粘土土器	甕	口縁	S トレ	—	—	—	横ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい黄緑 (10YR 6/3)	2.5mm以下の灰白色、にぶい黄褐色粒を含む。	良好			
285	粘土土器	甕	口縁	A 2	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR 7/4)	1～3mmの褐色、褐色、灰白色粒を多く含む。	良好			
286	粘土土器	甕	口縁	E 4	—	—	—	横方向のナデの後ハケ目による断面文 横方向のナデ ハケ目	ナデ 横方向のハケ目	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	にぶい黄緑 (10YR 6/4)	1mm程度の灰褐色、褐色粒を含む。	良好	断面文		

表19 土器観察表⑤

遺物番号	種類	部材	出土位置	法量 (cm)			手法・製法・文様ほか		色調		粘土	構成	備考
				口径	底径	高さ	外面		内面				
							外面	内面	外面	内面			
287	弥生土器	甕 口縁	A 3	—	—	—	刺突文 横ナデ	不明	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1mm程度の灰白色、褐色色粒を含む。	良好	刺突文
288	弥生土器	不明 口縁	Z 1	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1mm程度の黒色、褐色色粒を多く含む。	良好	
289	弥生土器	甕 口縁	E 4	—	—	—	斜め方向のミガキ突帯 ナデ	斜め方向のミガキ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	3mm以下の赤褐色、黒褐色色粒を含む。	良好	突帯
290	弥生土器	甕 口縁～胴部	C 4	—	—	—	ハケ目	不明	灰白 (7.5Y 7/1)	灰白 (2.5Y 7/1)	2mm以下の角の丸い褐色色粒を含む。	良好	
291	弥生土器	甕 胴部	3トレ	—	—	—	斜め日突帯 工具痕 ナデ	不明	浅黄 (2.5Y 7/3)	浅黄 (2.5Y 7/3)	25mm以下の暗赤褐色粒、1mm以下の赤褐色粒、0.5mm大の灰白色色粒を含む。	良好	斜め日突帯 工具痕
292	弥生土器	甕 胴部	3トレ	—	—	—	工具痕の後ナデ	横ナデ	浅黄褐色 (10YR 7/6)	浅黄褐色 (10YR 8/4)	1～3mm大の赤褐色、黒褐色色粒を含む。	良好	外面スス付着 斜め日突帯
293	弥生土器	不明 底部	D 5	—	42	—	ナデ	ナデ	黄橙 (7.5YR 7/8)	橙 (5 YR 6/8)	1～3mm大の赤褐色粒、2～3mm大の灰白色色粒を多く含む。	良好	残存率1/3
294	弥生土器	不明 底部	B 5	—	60	—	ナデ	不明	にぶい橙 (10YR 7/4)	にぶい橙 (10YR 7/4)	25mm以下の赤褐色、黒色、灰白色、赤褐色色粒を含む。	良好	外面スス付着 残存率1/4
295	弥生土器	不明 胴部～底部	9トレ	—	78	—	ナデ	ナデ	浅黄褐色 (7.5YR 8/2)	暗灰黄 (2.5Y 5/2)	3mm以下の赤褐色、黒褐色色粒、1mm大の白色色粒を含む。	良好	残存率1/5
296	弥生土器	不明 底部	C 3	—	77	—	不明	不明	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	灰 (3 Y 4/1)	2mm以下の灰白色、白色、赤褐色粒、3mm以下の灰白色色粒を多く含む。	良好	内面黒線 残存率1/4
297	弥生土器	不明 底部	Z 2	—	445	—	ナデ	ナデ	黄橙 (10YR 8/6)	黄灰 (2.5Y 4/1)	1～4mm大の赤褐色、黒褐色色粒を多く含む。	良好	内外面黒線 残存率1/2
298	弥生土器	不明 底部	E 5	—	70	—	ハケ目 ナデ	ナデ 指痕直	にぶい橙 (10YR 6/4)	橙 (7.5YR 7/6)	35mm以下の赤褐色粒、2mm以下の赤褐色、黒褐色、黒色色粒を含む。	良好	外面スス付着 上げ底 残存率1/4
299	弥生土器	不明 底部	E 5	—	425	—	ナデ	ナデ	浅黄 (2.5Y 7/4)	黄灰 (2.5Y 5/1)	2～3mm大の赤褐色、黄褐色色粒、3mm大の白色不透明粒を含む。	良好	上げ底 底部定
300	弥生土器	高坏 脚	—	—	—	—	ナデ	ナデ	橙 (5 YR 6/6)	橙 (5 YR 6/6)	1～3mmの赤褐色、赤褐色色粒を含む。	良好	残存率1/6
301	弥生土器	甕台 脚	E 4	—	—	—	ナデ 穿孔	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	4mm以下の赤褐色、黒褐色色粒を含む。	良好	穿孔 残存率1/9
304	土師器土器	不明 蓋の蓋	—	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄 (2.5Y 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1mm以下の黒褐色色粒を含む。	良好	
305	須恵器	坏 蓋	A 1	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	黄灰 (2.5Y 5/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	2mm以下の灰白色、灰白色色粒を含む。	良好	砂粒の動きがみられる
306	須恵器	坏 蓋	A 5	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰 (5 Y 5/1)	灰 (5 Y 5/1)	精良	良好	
307	須恵器	坏 蓋	A 5	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰ナリーブ (5 Y 6/2)	灰 (5 Y 6/1)	1mm以下の黒褐色色粒を含む。	良好	
308	須恵器	坏 蓋	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (10Y 7/1)	灰 (5 Y 6/1)	1mm以下の黒褐色色粒を含む。	良好	赤み著しい
309	須恵器	坏 蓋	A 4	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰 (2.5Y 5/1)	灰 (2.5Y 6/1)	1mm以下の淡黄色色粒を含む。	良好	残存率1/10
310	須恵器	坏 蓋	Z 2	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰 (2.5Y 5/1)	灰 (2.5Y 5/1)	15mm以下の淡黄色色粒を含む。	良好	残存率1/16
311	須恵器	坏 蓋	A 3	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰 (2.5Y 4/1)	灰 (2.5Y 5/1)	25mm以下の淡黄色色粒を含む。	良好	残存率1/8
312	須恵器	坏 底部	A 1	—	102	—	ナデ ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄 (2.5Y 6/3)	精良	良好 残存率1/6
313	須恵器	底部	A 1	—	—	—	ケズリ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	灰黄 (2.5Y 5/1)	1～4mmの赤褐色、浅黄褐色、灰白色、黒褐色色粒を含む。	良好	ケズリ 内面黒帯
314	須恵器	坏	E 5	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	精良	良好	
315	須恵器	甕 胴部	A 2	—	—	—	横方向のタタキ	円い当て具痕	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	灰 (5 Y 5/1)	2mm以下の赤褐色色粒、1mm以下の黒褐色色粒を含む。	良好	
316	磁器	甕 口縁	F 5	96	—	—	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	オリーブ灰 (2.5GY 6/1)	オリーブ灰 (2.5GY 6/1)	精良 胎土調 灰白 (2.5GY 8/1)	良好	残存率1/6
317	磁器	土師 脚部	A 1	—	—	—	ナデ	ナデ ケズリ	灰黄褐色 (10YR 4/2)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	精良	良好	
318	陶器	福鉢 口縁	—	—	—	—	横しましりによる瓦状 沈積 ナデ	かき目を施した横積 ナデ かき目	灰 (5 Y 4/1)	灰 (3 Y 4/1)	1mm以下の灰白色、にぶい黄褐色色粒を含む。	良好	厚系19C

表20 土器観察表⑥

遺物 番号	出土 位置	注記番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
120	SA1	SA1-150	台石	9.20	19.00	9.85	21200	頁岩	スズ付着、赤化
140	SA1	SA1-123	台石	17.50	22.35	5.40	20000	頁岩	スズ付着、赤化
141	SA1	SA1-151	砥石	8.15	13.95	5.70	942.0	頁岩	赤化
222	SA3	SA3-373	磨製石鏃	3.50	1.85	0.27	1.7	緑色凝灰岩	
223	SA3	SA3-144	磨製石鏃	3.65	2.10	0.24	2.6	緑色凝灰岩	
224	SA3	SA3-90	磨製石鏃	2.40	1.55	0.22	0.9	緑色凝灰岩	
225	SA3	SA3-198	磨製石鏃	4.00	1.85	0.30	1.7	緑色凝灰岩	
226	SA3	SA3-243	磨製石鏃	3.30	2.30	0.20	2.0	緑色凝灰岩	
227	SA3	SA3-376	磨製石鏃	1.90	1.35	0.18	0.6	緑色凝灰岩	
228	SA3	SA3スカ	石鏃未製品	2.60	1.90	0.60	2.6	緑色凝灰岩	
229	SA3	SA3-161	石鏃未製品	2.70	2.10	0.20	1.2	緑色凝灰岩	
230	SA3	SA3-130	打製石鏃	1.19	1.40	0.25	0.3	黒曜石	
231	SA3	SA3-247	打製石鏃	1.50	1.41	0.25	0.2	黒曜石	
232	SA3	SA3-245	押痕のある石器	5.80	8.90	1.05	75.1	頁岩	石鏃未製品?
233	SA3	SA3-71	押痕のある石器	5.10	12.55	1.40	103.3	頁岩	石鏃未製品?
234	SA3	SA3-135	石鏃	3.50	5.15	1.00	29.0	砂岩	
235	SA3	SA3土境3-1	石鏃	5.85	7.50	2.30	134.2	砂岩	一部欠損、床面土境内出土
236	SA3	SA3-258	砥石	10.70	6.40	3.10	3159	砂岩	
237	SA3	SA3-350	砥石	14.20	8.30	4.30	504.3	頁岩	一部欠損
238	SA3	SA3-394	砥石	4.75	4.00	3.80	104.0	砂岩	一部欠損
239	SA3	SA3P11	磨製石鏃	19.40	7.45	4.15	1020.0	頁岩	接合
240	SA3	SA3-53	砥石	14.05	10.90	2.45	356.9	頁岩	一部欠損
241	SA3	SA3-360	砥石	21.00	17.65	4.60	2075.0	頁岩	一部欠損
242	SA3	SA3-359	台石	22.35	28.75	9.60	7500.0	頁岩	
248	SA5	SA5-6	砥石	30.65	9.05	9.50	2000.0	頁岩	スズ付着
302	—	墓層	磨製石鏃	2.80	1.45	0.25	1.5	緑色凝灰岩	
303	D4	Ⅱa層-24	磨製石鏃	2.10	1.40	0.10	0.7	緑色凝灰岩	

表21 石器計測表

遺物 番号	出土 位置	注記番号	器種	部位	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
142	SA1	SA1-144	鉄鏃	切先	2.9	0.8	0.1	2.7	
143	SA1	SA1-145	鉄鏃	切先	2.1	0.7	0.05	1.0	
144	SA1	SA1-75	鉄鏃	切先	2.6	1.3	0.15	0.8	
145	SA1	SA1-79	鉄鏃	切先-茎	4.3	0.85	0.2	3.0	木質付着
146	SA1	SA1-83	鉄鏃	切先	4.35	1.25	0.2	2.7	
147	SA1	SA1埋土-居	鉄鏃	切先-茎	3.1	1.05	—	2.0	木質付着
148	SA1	SA1-82	鉄鏃	切先	2.7	1.3	—	2.7	
149	SA1	SA1-81	鉄鏃	切先	3.3	1.7	—	5.5	木質付着
150	SA1	SA1-222	棒状鉄片	—	4.8	1.05	—	3.1	
151	SA1	SA1-86	鉄鏃	茎	3.9	0.3	0.2	0.9	
152	SA1	SA1-33	棒状鉄片	—	8.25	0.5	0.5	5.5	
153	SA1	SA1-88	鉄片	—	3.7	2.5	0.2	8.8	
154	SA1	新ししSC	鉄片	—	2.2	2.0	0.2	2.8	木質付着
155	SA1	SA1-85	鉄片	—	2.9	1.5	0.2	2.1	
156	SA1	SA1-213	鉄片	—	2.8	2.35	0.15	3.2	
157	SA1	SA1-14	鉄片	—	3.5	2.05	0.1	4.9	
158	SA1	SA1-D2	鉄片	—	2.15	2.2	1.2	1.6	
159	SA1	SA1-308	鉄片	—	1.6	1.05	0.1	0.6	
160	SA1	SA1-215	鉄片	—	1.3	1.4	0.1	0.6	
253	SA6	SA6-24	鉄鏃	茎	3.35	1.1	0.1	8.1	
319	E4	—	骨	—	19.2	6.1	0.8	90.7	

表22 鉄器計測表

## 第V章 自然科学分析

### 第1節 目的

向原第1遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡が6軒検出され、そのうち2軒から住居を構成したと推定される炭化材が出土した。住居内の炭化材の樹種同定やフローテーションで得られた炭化種子などの種実同定を行うことで、住居の建築材の構成や当時の食糧事情に迫れる。また、貼り床の土の植物珪酸体分析を実施することで、遺跡周辺の植生を解明することが期待できる。また、炭化材や炭化米を使って放射性炭素年代測定を行うことで、住居の時期を考察する際の科学的なデータを得ることができる。以上のような理由から自然科学分析を株式会社古環境研究所に業務委託した。

### 第2節 樹種同定

#### (1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から属レベル程度の同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

#### (2) 試料

試料は、SA1床面、SA5床面から出土した炭化材36点である。

#### (3) 概要

各住居で出土した木材については第IV章第6節で述べたとおりである。ここでは同定した木材の概略を付する。

##### ① アカマツ (マツ科)

アカマツは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

##### ② ヤマモモ (ヤマモモ科)

ヤマモモは本州 (房総半島南部、福井県以西)、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ6~10m、大きいものは20mに達する。

##### ③ スダジイ (ブナ科)

スダジイは本州 (福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

##### ④ コナラ属クスギ節 (ブナ科)

コナラ属クスギ節にはクスギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

##### ⑤ コナラ属アカガシ亜属 (ブナ科)

コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

##### ⑥ タブノキ (クスノキ科)

タブノキは、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

##### ⑦ ヤブツバキ (ツバキ科)

ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5~10m、径20~30cmである。材は強韌で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

##### ⑧ サカキ (ツバキ科)

サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。材は強韌、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

##### ⑨ アワブキ属 (アワブキ科)

アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木から高木である。

##### ⑩ カキノキ属 (カキノキ科)

カキノキ属には、トキワガキ、ヤマガキ、シナノガキなどがあり、本州（中西部）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径1mぐらゐに達する。材は、建築、器具などに用いられる。

#### ⑪ ハイノキ属（ハイノキ科）

ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワフタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。

#### ⑫ ガマズミ属（スイカズラ科）

ガマズミ属には、ガマズミ、ゴマキ、サンゴジュなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の小高木で通常高さ10m、径30cmぐらゐである。樹木は庭園、生垣、防火樹などに、材は旋作、小細工物などに用いられる。

#### （4）考察

主要となる樹種の違いはあるが、いずれも照葉樹林の構成要素および照葉樹林域に分布する樹種ばかりであり、本遺跡周辺に生育していた樹木に由来すると考えられる。

## 第3節 炭化種実同定

#### （1）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

#### （2）試料

試料は、住居（SA1、SA3、SA5、SA6）の水洗選別済み試料群および調査中にSA5で出土し取り上げた炭化種実1点である。

#### （3）概要

各住居で出土した炭化種実については第IV章第6節で述べたとおりである。ここでは同定した種実の概略を付する。

#### 〔樹木〕

イヌザンショウ 種子（ミカン科）

種子は黒褐色で楕円球状形を呈す。側面に長く深いへそがある。表面にやや大きな網目模様がある。カラスザンショウ 種子（ミカン科）

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

#### 〔草本〕

イネ 果実（イネ科）

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がかくむ。表面には数本の筋が走る。

キンバイザサ 種子（キンバイザサ科）

漆黒で卵形体や楕円体を呈し、基部の片側から鉤状の太い突起が出る。へそは突起の先端の内側にある。

ヒユ属 種子（ヒユ科）

黒色で光沢がある。円形を呈し、一箇所が切れ込みへそがある。断面は両凸レンズ形である。

ササゲ属 種子（炭化）（マメ科）

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。アリノトウグサ科 果実

淡褐色で卵形を呈す。表面には6・7本の縦方向の稜がはしる。なお、炭化が著しく表面が観察できないため、科レベルの同定にとどめた。

モモ 核（バラ科）

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。大きさは、長さ17.5mm、幅15.0mmである。

#### （4）考察

住居の種実類のうち水洗選別済み試料群は、栽培植物のイネがやや多く、他にササゲ属の食用となる栽培植物が同定された。イネとササゲ属は、弥生時代以降は出土例が多い。草本ではタデ属、ヒユ属、アブラナ科、アリノトウグサ科、樹木ではイヌザンショウ、カラスザンショウが同定された。いずれも人里環境や自然度の低い環境に生育する植物である。

調査中に取り上げた炭化種実は、比較的丸みもち先端が尖らないなどの特徴から、モモのうちで最も早く弥生時代から出現するタイプに比定される。

## 第4節 植物珪酸体分析

### (1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

### (2) 試料

分析試料は、SA 1 床面、SA 3 床面、SA 6 床面から採取された計30点である。試料採取箇所の分析結果を柱状図 (図60~62) に示す。

### (3) 概要

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表23~25および図60~62に示した。(主要な分類群について顕微鏡写真を示す。)

#### 〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)、ウシクサ族B (大型)、シバ属、Bタイプ

#### 〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、マダケ属型 (マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

#### 〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

#### 〔樹木〕

ブナ科 (シイ属)、マンサク科 (イスノキ属)、アワブキ科、はめ絵バズル状 (ブナ科ブナ属など)、その他

### (4) 考察

住居の周辺は、メダケ属 (メダケ節やネザサ節)

などのタケ亜科を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られるイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはイスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ (焼き払い) が必要である。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が継続的に行われていた可能性が考えられる。

遺跡周辺に豊富に存在したこれらの植物は、住居の建築材や屋根材、敷物、道具、燃料などとして利用されていたことが想定される。SA 3の床面では、部分的にイネが多量に検出され、イネの茎葉 (稲葉) が敷物など何らかの形で利用されていた可能性が認められた。

## 第5節 放射性炭素年代測定

### (1) 試料と方法

SA 1出土の炭化材およびSA 3出土の炭化米を加速器質量分析法 (AMS法) で年代測定を行った。

### (2) 測定結果

#### ① SA 1の炭化材

$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	2010 ± 50
$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	-27.9
補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	1960 ± 50
暦年代 (西暦)	
交点: cal AD 50	
1 $\sigma$ : cal BC 10~AD 90	
2 $\sigma$ : cal BC 50~AD 130	

#### ② SA 3の炭化米

$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	2060 ± 40
$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	-24.7
補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	2060 ± 40
暦年代 (西暦)	
交点: cal BC 55	
1 $\sigma$ : cal BC 115~30	
2 $\sigma$ : cal BC 180~AD 30	

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料							
分類群	学名	SA1 (床面)							
		1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)								
キビ属型	Panicum type	7	7	29	7	15	22	7	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)								
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	56	14	43	14	36	15	22	43
ウシナキ属A	Andropogoneae A type	42	51	43	83	51	22	36	35
ウシナキ属B	Andropogoneae B type	7							7
シバ属	<i>Zizania</i>								
Bタイプ	B type								
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medeke</i>	181	159	143	276	167	237	95	213
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Necusa</i>	646	714	780	559	633	474	339	653
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakoensis</i> )	56	43	29	28	80	39	22	92
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakoensis</i>	76	72	79	90	73	15	29	43
マダケ節型	<i>Phyllostachys</i>								
未分類等	Others	243	253	243	462	356	244	116	383
その他のイネ科	Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	14	36	14	7	22		15	7
棒状柱頭体	Rod-shaped	757	577	565	807	922	511	437	738
基部起源	Stem origin								
未分類等	Others	667	556	637	731	791	577	553	766
薪木起源	Arboreal								
ブナ科 (アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>								
マンコク科 (イスノキ属)	<i>Dicranum</i>							7	
アブキ科	Sabiaceae								
はめね/パズル状 (ブナ属など)	<i>Jugosa</i> puzzle shaped ( <i>Ficus</i> etc.)								
その他	Others								
植物性標体総数	Total	2752	2482	2905	3062	3166	2176	1878	2993
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/㎡・年)									
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)								
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)								
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.69	0.18	0.53	0.17	0.45	0.18	0.27	0.45
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medeke</i>	2.10	1.84	1.66	3.20	1.94	2.75	1.10	2.47
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Necusa</i>	3.10	3.43	3.74	2.68	3.14	2.27	2.59	3.13
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakoensis</i> )	0.42	0.32	0.21	0.21	0.60	0.44	0.16	0.69
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakoensis</i>	0.23	0.22	0.24	0.27	0.22	0.04	0.09	0.13
タケ亜科の比率 (%)									
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medeke</i>	36	32	28	30	33	50	28	38
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Necusa</i>	53	59	54	42	53	41	66	49
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakoensis</i> )	7	6	4	3	10	8	4	11
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakoensis</i>	4	4	4	4	4	1	2	2

表23 SA1における植物性標体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料												
分類群	学名	SA3 (床面)												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科	Gramineae (Grasses)													
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)													
キビ属型	Panicum type		7											
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	7												
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	46	50	44	42	15	7	49	15	29	22	22		
ウシナキ属A	Andropogoneae A type	42	40	50	59	56	51	70	37	29	73	30	51	
ウシナキ属B	Andropogoneae B type	7	7	7				7						
シバ属	<i>Zizania</i>													
Bタイプ	B type													
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)													
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medeke</i>	14	179	229	132	303	167	146	172	95	191	133	118	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Necusa</i>	98	431	558	514	713	604	432	497	379	572	546	397	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakoensis</i> )	30	20	64	29	14	58	42	61	51	59	52	37	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakoensis</i>	56	27	21	37	113	51	90	61	109	66	89	88	
マダケ節型	<i>Phyllostachys</i>													
未分類等	Others	42	179	329	191	254	236	223	172	117	220	207	176	
その他のイネ科	Others													
表皮毛起源	Husk hair origin	7	13	7	7		15	14	6	29	15	15		
棒状柱頭体	Rod-shaped	146	358	428	338	437	488	550	516	379	352	524	603	
基部起源	Stem origin													
未分類等	Others	368	431	651	514	607	532	500	528	525	379	539	610	
薪木起源	Arboreal													
ブナ科 (アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>													
マンコク科 (イスノキ属)	<i>Dicranum</i>		13	21	7							7		
アブキ科	Sabiaceae													
はめね/パズル状 (ブナ属など)	<i>Jugosa</i> puzzle shaped ( <i>Ficus</i> etc.)													
その他	Others		7		22	21		7	6	7	7			
植物性標体総数	Total	816	1758	2403	1900	2575	2228	2158	2143	1780	2190	2171	2132	
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/㎡・年)														
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)													
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.44				0.22			0.20	0.54	1.07		0.22	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.16	0.58	0.62	0.55	0.52	0.18	0.09	0.61	0.18	0.36	0.27	0.27	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medeke</i>	0.16	2.08	2.66	1.53	3.52	1.94	1.70	1.99	1.10	2.21	1.54	1.36	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Necusa</i>	0.47	2.07	2.68	2.47	3.42	2.90	2.07	2.39	1.82	2.74	2.62	1.91	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakoensis</i> )	0.15	0.48	0.22	0.11	0.44	0.31	0.46	0.38	0.44	0.39	0.38	0.15	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakoensis</i>	0.17	0.08	0.06	0.11	0.34	0.15	0.27	0.18	0.33	0.20	0.27	0.15	
タケ亜科の比率 (%)														
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medeke</i>	20	47	45	35	48	36	39	40	30	40	32	36	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Necusa</i>	59	47	46	57	46	53	48	47	50	49	54	50	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakoensis</i> )	3	8	5	1	8	7	9	11	8	8	7	10	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakoensis</i>	21	2	1	3	5	3	6	4	9	4	6	7	

表24 SA3における植物性標体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		SA 6 (床面)								
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
<b>イネ科</b>										
イネ	Gramineae (Grasses)									
キビ族型	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)									
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	22	15	29	22	7	14	7	22	7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	89	29	71	44	28	7	51	73	14
ウシタマシ属A	<i>Andropogoneae A</i> type	44	80	64	81	49	54	139	36	77
ウシタマシ属B	<i>Andropogoneae B</i> type	7	7							
シノ属	<i>Zoisa</i>			7				7		
Bタイプ	B type									
<b>タケ亜科</b>										
メダケ節型	<i>Pleiolobos</i> sect. <i>Medake</i>	333	347	107	294	176	284	190	240	77
ネギサ節型	<i>Pleiolobos</i> sect. <i>Nezasa</i>	659	682	638	853	534	853	461	830	321
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	37	58	14	37	35	47	66	175	28
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	67	80	21	51	42	81	66	131	42
マダケ節型	<i>Phyllostachys</i>	7								
未分類等	Others	355	356	286	368	337	345	366	488	154
<b>その他のイネ科</b>										
表皮毛起源	Husk hair origin		7	29	15	7	7	22	7	14
棒状柱胞体	Rod-shaped	496	507	822	868	772	887	820	1194	503
葉部起源	Stem origin			7	22	7				
未分類等	Others	600	704	701	743	702	684	630	801	545
<b>薪木起源</b>										
ブナ科 (アカガシ亜属)	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>									
マンサク科 (イスノキ属)	<i>Drytilium</i>			21			7	7		
アブコギ科	Sabiaceae		7							
はめ輪ノミカ状 (ブナ属など)	<i>Jigsaw</i> puzzle shaped ( <i>Fagus</i> etc.)				7	15	7			7
その他	Others									14
植物群検出総数		2725	3171	2895	3413	2717	3272	2848	3998	1802
<b>おもな分類群の検出生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)</b>										
<b>イネ</b>										
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)					0.44				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	1.10	0.36	0.89	0.55	0.35	0.08	0.64	0.90	0.17
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	3.87	2.86	1.24	3.41	2.04	3.30	2.21	2.79	0.89
メダケ節型	<i>Pleiolobos</i> sect. <i>Medake</i>	3.16	3.27	3.16	4.10	2.56	4.10	2.21	3.59	1.54
ネギサ節型	<i>Pleiolobos</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.28	0.44	0.11	0.28	0.26	0.36	0.49	1.31	0.21
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	0.20	0.24	0.06	0.15	0.13	0.24	0.20	0.39	0.13
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>									
<b>タケ亜科の比率 (%)</b>										
メダケ節型	<i>Pleiolobos</i> sect. <i>Medake</i>	51	42	27	43	41	41	43	33	32
ネギサ節型	<i>Pleiolobos</i> sect. <i>Nezasa</i>	42	48	69	52	51	51	43	47	56
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )	4	6	2	3	5	4	10	15	8
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	3	4	1	2	3	3	4	5	5

表25 SA 6 における植物珪酸体分析結果

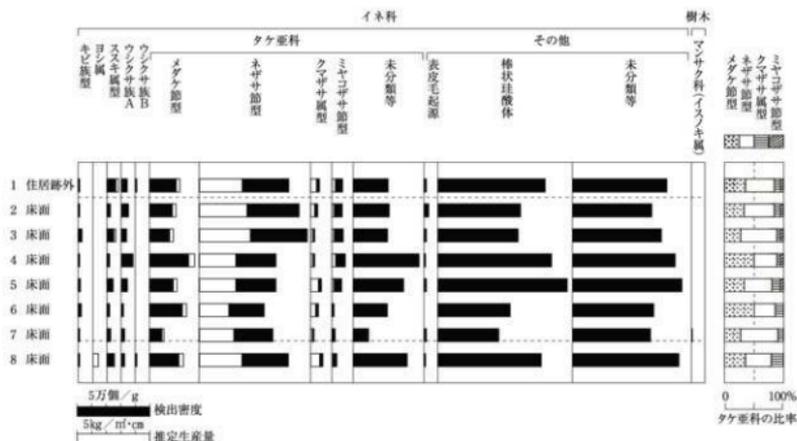


図60 SA 1 における植物珪酸体分析結果

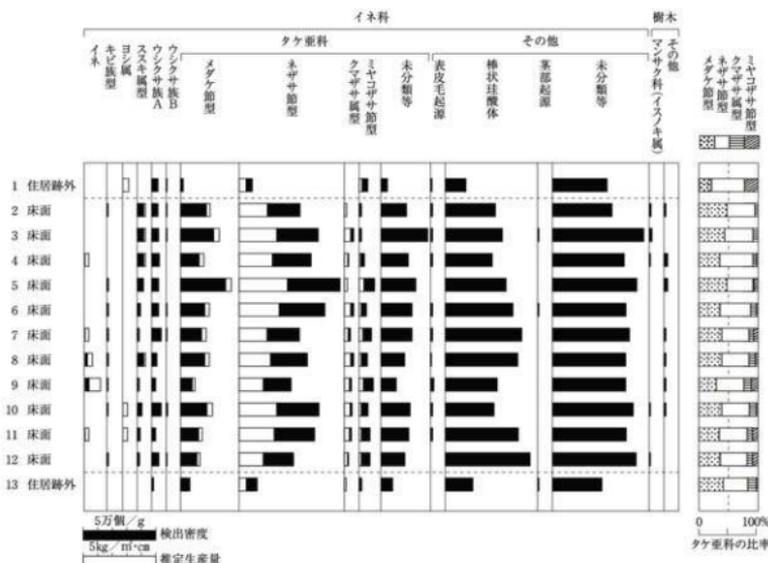


図61 SA 3 における植物珪酸体分析結果

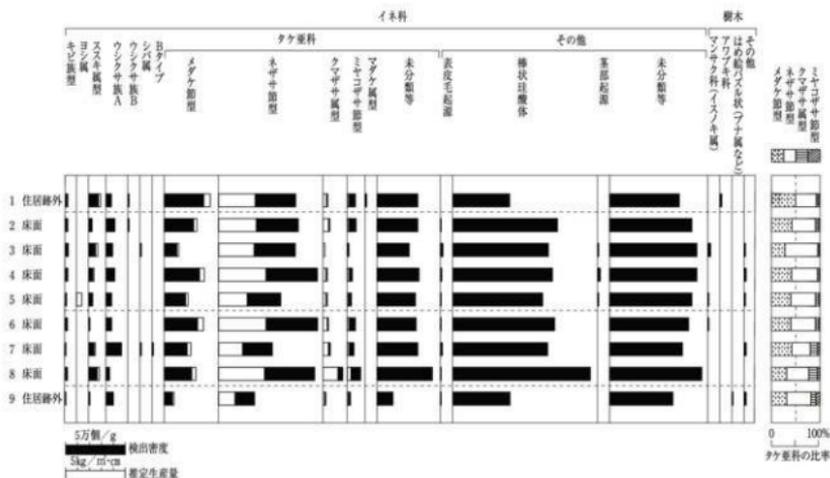


図62 SA 6 における植物珪酸体分析結果



3 アリノトウグサ科?炭化種子 (SA3)

—— 1.0mm



4 アリノトウグサ科?炭化種子 (SA3)

—— 1.0mm



1 サナギ? (SA3)

—— 1.0mm



2 キンバイザサ種子 (SA3)

—— 1.0mm



1 モモ核 (SA5)

—— 5.0mm

向原第1遺跡出土の炭化種実(1)



1 イヌザンショウ種子 (SA 6)

— 1.0mm

2 カラスザンショウ種子 (SA 6)

— 1.0mm

3 イネ果実 (SA 1)

— 1.0mm

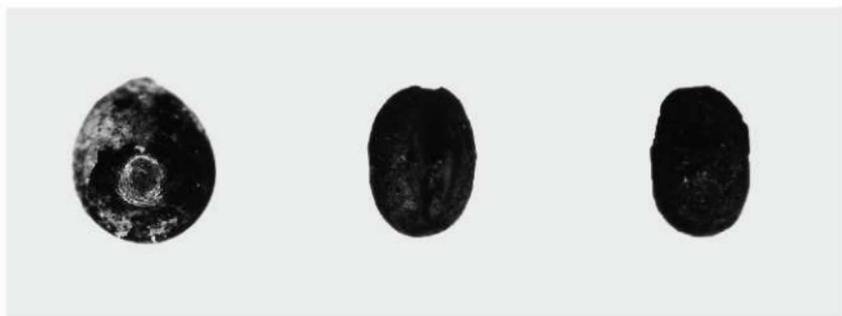


4 イネ果実 (SA 1)

5 イネ果実 (SA 3)

6 イネ果実 (SA 3)

— 1.0mm



7 ヒユ属種子 (SA 5)

— 0.1mm

8 ササゲ属子葉 (SA 3)

9 同左 (SA 3)

— 1.0mm

向原第1遺跡出土の炭化種実 (2)

## 第Ⅵ章 まとめ

向原第1遺跡は、遺構が検出された時期としては後期旧石器時代、縄文時代早期、弥生時代中期後半から古墳時代初頭が挙げられ、遺物が出土した時期は上記に加えて、縄文時代晩期、古代、近世、近代である。ここでは調査や整理作業を通して解明できたことについて述べていきたい。

### (1) 後期旧石器時代

後期旧石器時代ではMB2およびKr-Kbで旧石器が出土し、Kr-Kbでは礫群が4基検出された。MB2の遺物は剥片2点のみであるが、MB2での調査面積は狭かったため少ない出土数でも文化層として認定した。

Kr-Kbでは石器740点、礫326点が出土している。石器の多くは2群の石器ブロックから出土しており、A群がチャート・頁岩・流紋岩等の複数の石材で構成されているのに対して、B群はほとんど黒曜石のみで構成され、それぞれ石器を製作している。A群ではチャートの原石を持ち込んで製作していたと考えられる。また、礫群1は石器ブロックA群と分布が重なっていることから、当時は活発な活動の場が展開していたと考えられる。

### (2) 縄文時代

縄文時代は早期と晩期に人の活動の痕跡がある。早期は、調査区中央部の比較的平坦な場所に散礫が広がり、集石遺構の多くが存在することから、ここが活動の中心部であると考えられる。さらに焼土を伴うSC1・2やSP1、流紋岩製石器ブロック等が散礫の縁辺部に展開し、土器や石器も多く出土していることから裏付けられる。時期としては、土器25が前平式系で、土器26～33が別府原タイプで、土器34～37が中原式Ⅳ期であることから、縄文時代早期前半に比定される。なお砲弾形を呈し、上記の土器類と比べて薄手の無文土器40～42が出土している。出土位置にさほどの違いはないことから、上記の土器群と大差ない時期に比定される。調査区南西部には炉穴（SP2・3）や集石遺構（SI16・17・19）が集中しており、ここでも人の活動の痕跡が見出せる。

晩期は、調査区東南部から多く出土した。孔列文土器や波状口縁など口縁部が特徴的な土器がみられ、黒川式の範疇と考えられる。第Ⅳ章第5節で報告した石斧群の多くは土器集中区の調査区東南部のⅢ層で出土していることから、石器類も土器類と同時期の縄文時代晩期に比定される。遺構は検出されていないが、遺物量が一定量出土していることから活動の痕跡があったと認めてもよいであろう。

### (3) 弥生時代

検出した6軒の竪穴住居跡SA1～SA6のうちSA1～SA5の5軒は出土土器・住居主軸等から弥生時代に比定される。

SA3は、床面で出土した大甕（162～165）の形状や下城系甕（166～168）や北部九州系の方形透かしを有する高坏（218）の出土などから弥生時代中期後半に比定される。SA3には住居中央の土坑、周囲の一段高いベッド状遺構、地床炉としての土坑、北側の浅い窪みなどの付帯施設が備わっている。また、住居内から緑色凝灰岩の碎片が多く出土していることから、磨製石鏃を作る作業場「工房」としても機能していたと考えられる。

SA5は、鋤先状口縁に円形浮文を配した大型壺（247）やSA3出土のものと同様である大甕（244）や中溝式系甕（243）などの出土から、SA3同様、弥生時代中期後半に比定される。なお炭化材が出土しているので焼失住居と考えられるが、検出面が浅いことから上層構造を推定するのは困難である。

SA2は、図化できたのは甕1点だけであるが、SA1やSA6の甕と比べて口縁部が外反していることから、それらの住居よりも若干古い時期と考えられる。また、SA2でも緑色凝灰岩の碎片が数点出土しており、SA3で多数出土した緑色凝灰岩製の磨製石鏃との関連も考慮すると、SA2はSA3と同時期の可能性がある。

SA4も時期比定できる遺物が出土していないが、SA2と住居の主軸方向が北西～南東と同方向であり規模も同程度であることから、SA3と同時期の可能性がある。

SA5はSA2・SA4と住居の主軸方向が異なる上、焼失住居という特異な遺存状況であることからSA3の集落と同時期に存在しなかったと考え、若干前後する時期と推定される。

SA1は、甕の口縁部の立ち上がり方や底部径が他の住居の遺物と比べて小型化していることや、小型壺(134)などが出土していることから弥生時代後期末に比定される。また鉄鏃をはじめとする多量の鉄製品が出土すると共に、フローテーション法によって埋土や床土から炭化米を多数検出することができた。なお炭化材の遺存状態から住居の上屋構造を次のように推定される。住居の壁沿いの小ピットに垂木を垂直に立て、主柱穴に太い柱を立て棟木を渡し、垂木と棟木を別の木材でつないで屋根を支える構造にしたと考えられる。

#### (4) 古墳時代

SA6は、甕(250)などの形状がSA1の甕よりも口縁部が立ち気味で、頸部の屈曲の度合いが強くなり、内面に明瞭な稜が認められることからSA1の時期よりも新しく、複合口縁の大型壺の出土も考慮すると、SA6は古墳時代初頭に比定される。

また、包含層から須恵器や轆も出土していることから、この地には古墳時代にも生活の痕跡が認められる。しかし、クロボク(Ⅲ層)の上部から造成による削平が入っていることから、主に調査区縁辺部で遺物は出土している。

#### (5) その他の時代

古代から中世にかけての遺物は散漫に出土し、遺構も検出されていない。また調査区内では掘立柱建物跡が検出されておらず、銭貨(寛永通宝)と煙管が出土していることから近世の土坑墓が存在した可能性が考えられる。

#### (6) 出土炭化米について

出土した炭化種実のうち、自家同定によりイネと判断できたもの668点(後に分析委託でイネと追認したものを含む)について、長短軸ならびに重量を計測した。計測は、長短軸をデジタルノギス、重量をデジタル台秤(～0.01g)で実施し、作業員2人の1日間弱で終了した。自家同定は、古環境研究所の分析委託品を参考に、小宇都あずさが実施した。

計測の実施目的の1つには、種実にみられた大小差の客観的整理があった。検討の結果(図63)、SA1・SA3ともにイネの形状は散漫かつ連続的に分布し、別群に分かれることはない。また、SA1とSA3とでは相対的にSA3のイネが大振りである。

イネの形状が散漫かつ連続的に分布する点については、本来の個体差や炭化による縮み等によって生じたと理解される。また、SA1・SA3とでイネの大きさに差があった点については、母数の違いも考慮が必要であろう。

以上、各時代を概観してきたように、本遺跡は後期旧石器時代から古墳時代初頭までは途中幾度か断絶があるが、人の生活が認められる。特に弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて6軒の竪穴住居が営まれ、弥生時代中期後半にSA3を中心にSA2、SA4で構成された集落が存在した。この集落の前後にSA5が位置する。遺物量が少ないので前後を確定しにくいのが、あえて比定すればSA5には床面で中溝式甕が出土しており、SA3ではそれらに混じって下城式甕も出土している。下城式から中溝式に推移していくことから考えると、SA3・SA2・SA4→SA5という変遷を考えることができる。さらに弥生時代後期末のSA1、古墳時代初頭のSA6もあわせると、本遺跡の集落の変遷は、SA3・SA2・SA4→SA5→SA1→SA6と考えられる。

また、フローテーション法を用いることで住居内の床土から多くの情報を抽出することができた。特に人力の掘削では見逃される可能性が高い炭化米などの植物遺存体、鉄片・ベンガラなどの微細遺物の検出に大いに効果的である。一方では多くの時間と労力が必要であるので、今後、実践の積み重ねとその評価及び検証を確実にを行うことで、効率的な方法を確立する必要がある。例えば、自家同定の基準となるサンプルを多くつくることも直ちに取り組まなければならないことの一つである。

参考文献

- ・「宮崎県史 資料編 考古1」 1989 宮崎県
- ・「新富町史 通史編」 1992 新富町
- ・「東九州自動車道関連道路詳細分布調査報告書2（西部～延岡・延岡道路）」 1995 宮崎県
- ・宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第49集「平成12年度東九州自動車道（都農～西都間）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書1」 2001 宮崎県埋蔵文化財センター
- ・宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第95集「藤山第2遺跡 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7」 2005 宮崎県埋蔵文化財センター
- ・「古文化談叢 第45集」「中溝式系土器の検討—宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて—」 粟畑光博 2000 九州古文化研究会

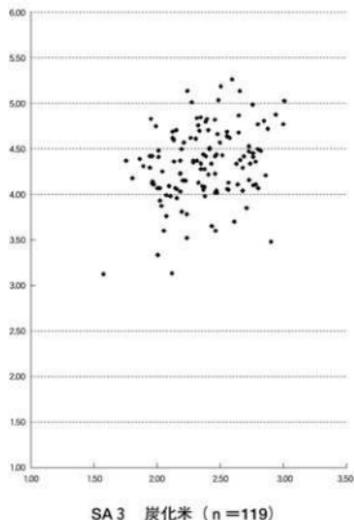
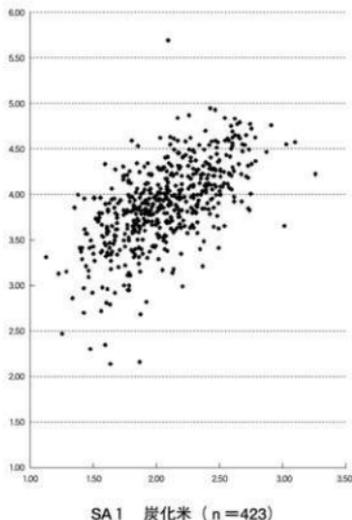
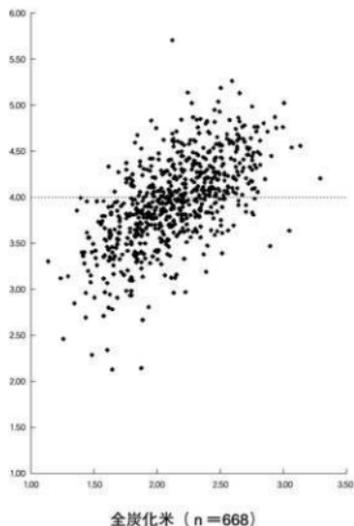
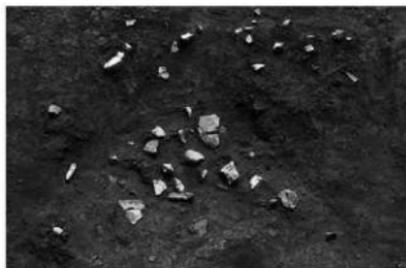


図63 向原第1遺跡の炭化米法量の比較

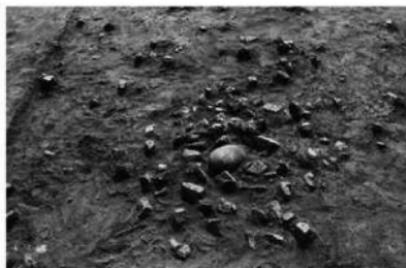
(Y軸：炭化米長軸、X軸：炭化米短軸 右上：全炭化米、左下：SA1炭化米、右下：SA3炭化米)



旧石器 (Kr-Kb面) 石器ブロック・破群



SI1



SI2



SI3



SI4



SI5



SI6



SI7



SI 8



SI 8 (断面)



SI 9



SI 10



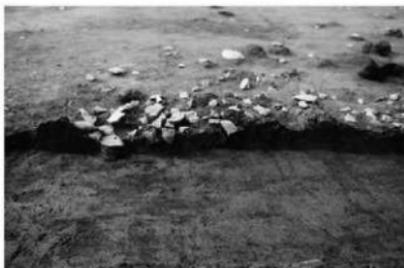
SI 11 (断面)



SI 12 (断面)



SI 13 (断面)



SI 14 (断面)



SI15



SI16 (断面)



SI17



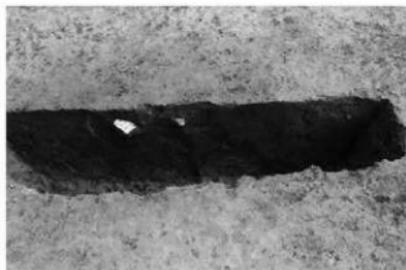
SI18



SI19



SP1 検出状況



SP1 (断面)



SP1 (完掘)



SP 2 検出状況



SP 2 (断面)



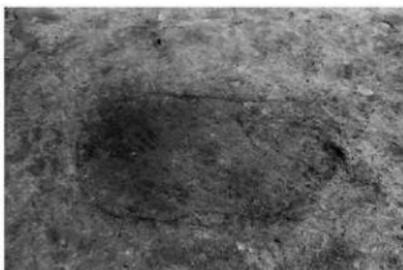
SP 2 (完掘)



SP 2・SP 3 (完掘)



SP 4 (断面)



SC 3 検出状況



SC 3 (完掘)



現地説明会風景



SA 1 検出状況



SA 1 炭化材検出状況



SA 1 遺物出土状況



SA 1 完掘



SA 2 検出中



SA 3 検出中



SA 3 遺物出土状況①



SA 3 遺物出土状況②



SA 3 遺物出土状況③ (石斧出土)



SA 3 貼床検出



SA 3 完掘



SA 4 検出



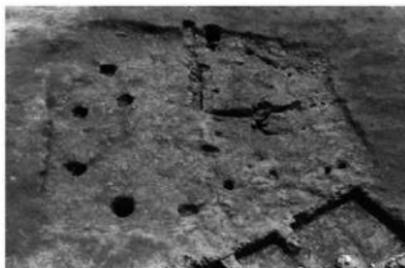
SA 4 完掘



SA 5 検出中



SA 5 遺物・炭化材出土状況



SA 5 完掘



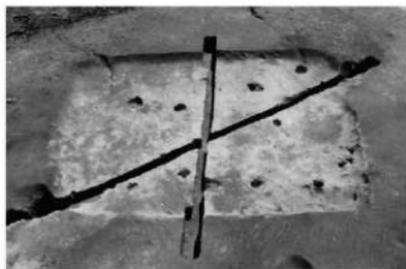
SA 6 検出中



SA 6 遺物出土状況①



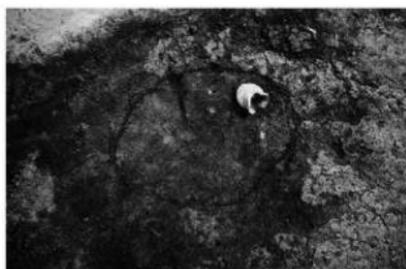
SA 6 遺物出土状況②



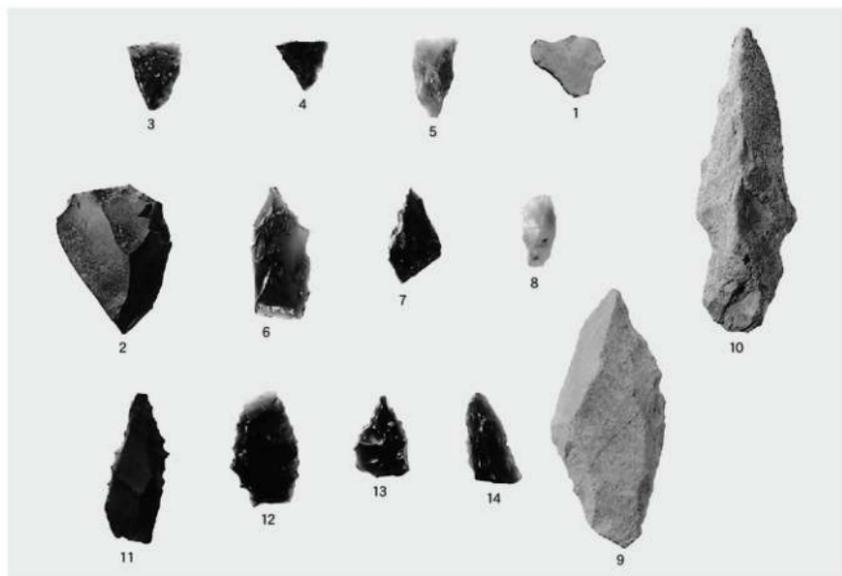
SA 6 完掘



SC13遺物出土状況



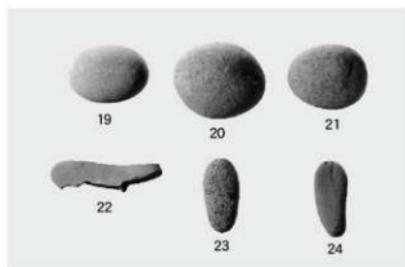
ミニチュア土器出土状況



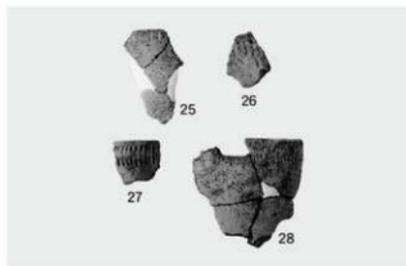
旧石器時代遺物①



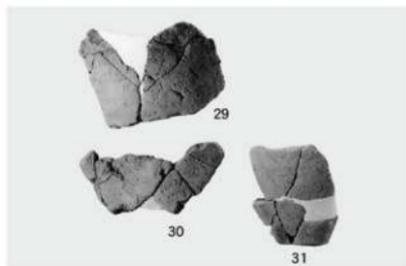
旧石器時代遺物②



旧石器時代遺物③



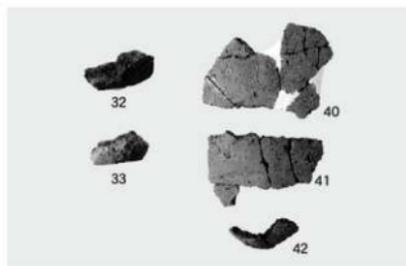
縄文時代早期遺物①



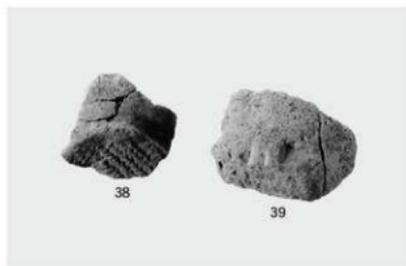
縄文時代早期遺物②



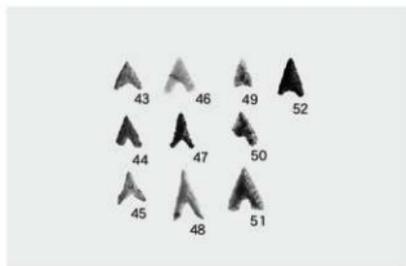
縄文時代早期遺物③



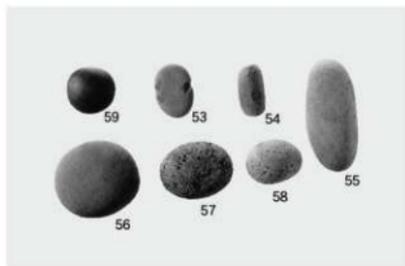
縄文時代早期遺物④



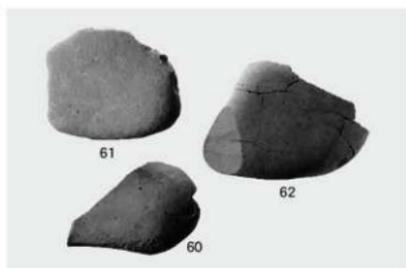
縄文時代早期遺物⑤



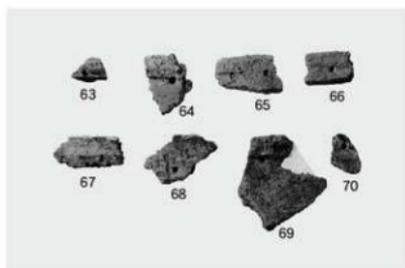
縄文時代早期遺物⑥



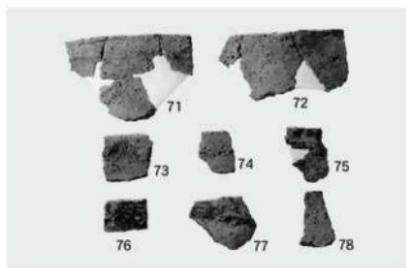
縄文時代早期遺物⑦



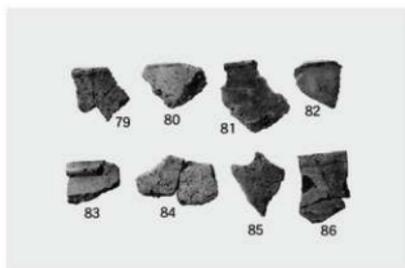
縄文時代早期遺物⑧



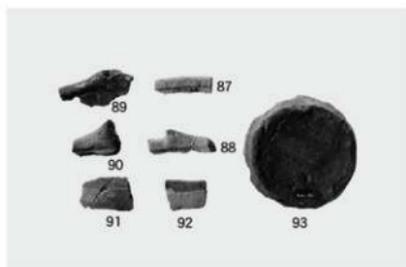
縄文時代晚期遺物①



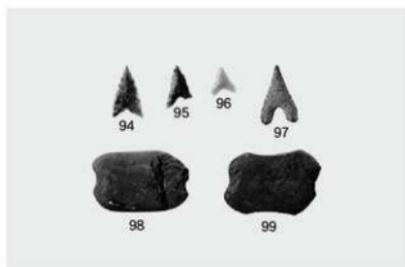
縄文時代晚期遺物②



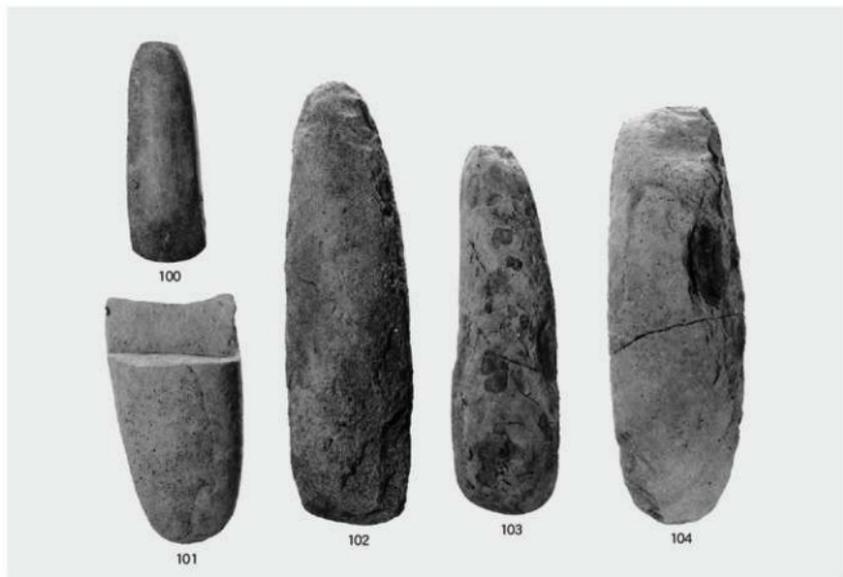
縄文時代晚期遺物③



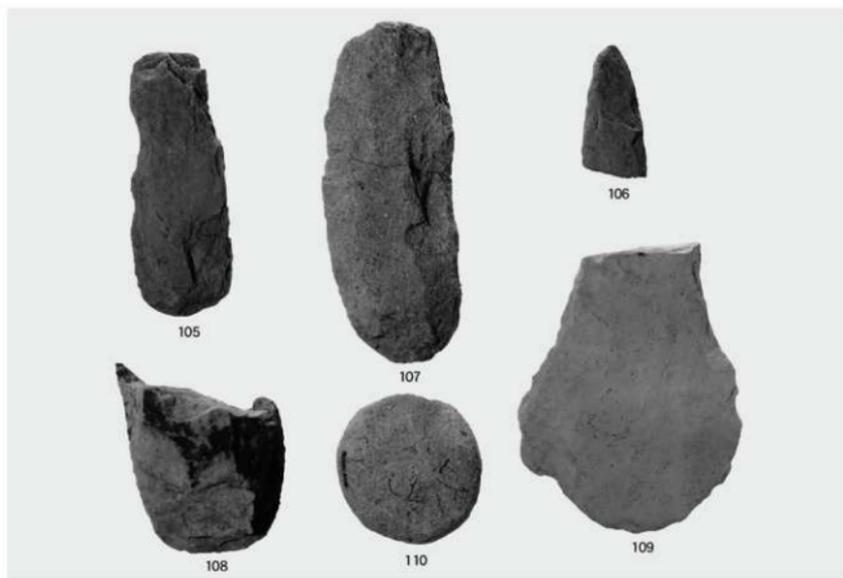
縄文時代晚期遺物④



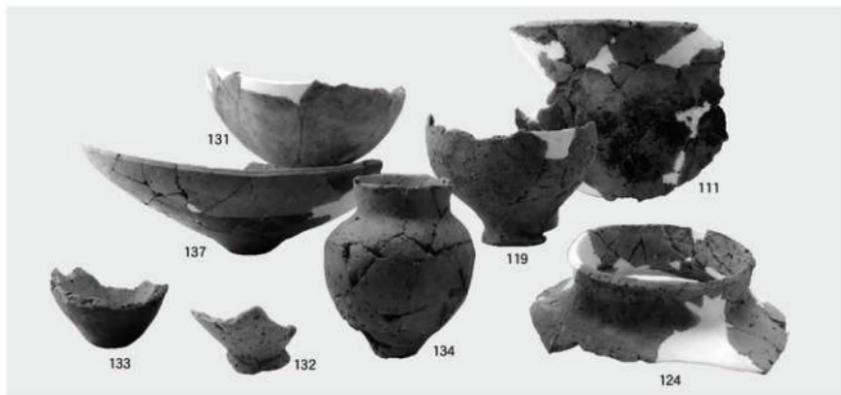
Ⅲ層出土石器①



Ⅲ層出土石器②



Ⅲ層出土石器③



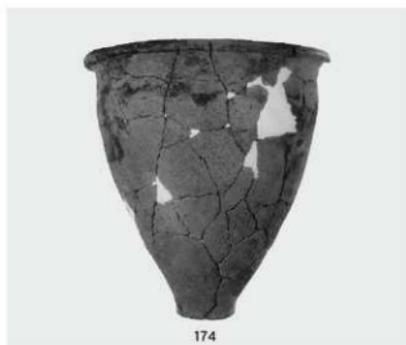
SA 1 出土土器



SA 3 出土土器①



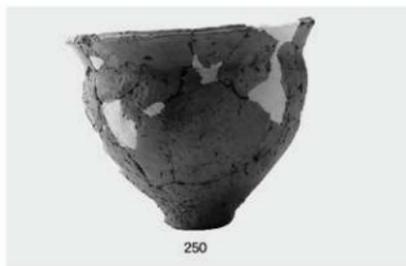
SA 3 出土土器②



SA 3 出土土器③

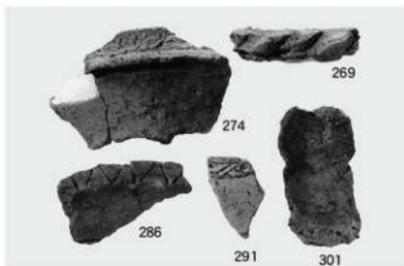


SA 5 出土土器



250

SA 6 出土土器



269

274

286

291

301

包含層出土石器

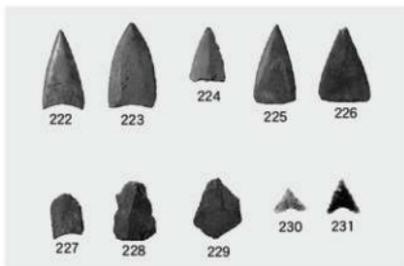


141

140

139

SA 1 出土石器



222

223

224

225

226

227

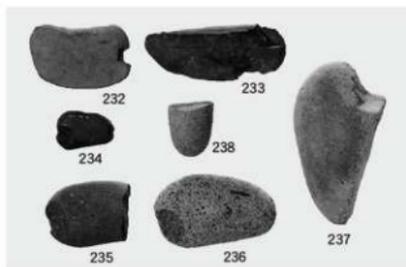
228

229

230

231

SA 3 出土石器①



232

233

234

238

237

235

236

SA 3 出土石器②



240

239

241

SA 3 出土石器③



242

SA 3 出土石器④



# 報告書抄録

ふりがな	むこうばるだい1いせき							
書名	向原第1遺跡							
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	24							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
執筆・編集担当者名	戌亥浩志・金丸琴路・長津宗重							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2006年2月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮崎県 児湯郡 新富町 大字新田 字綿打 14330-2	宮崎県 児湯郡 新富町 大字新田 字綿打 14330-2	45402		32°5'26"	131°25'38"	20020311 ～ 20020810	2,600㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落跡	後期旧石器時代 縄文時代早期  晩期 弥生時代中期～ 古墳時代初頭	礫群 4基 石器ブロック 2群 集石遺構 19基 炉穴 11基 陥し穴状遺構 1基	6軒 10基	ナイフ形石器 角錐状石器 石鏃・蔽石・石錘 貝殻条痕文土器 無文土器 黒川式土器・石斧 甕・壺・鉢・高坏・ 器台・ミニチュア土器・ 磨製石鏃・鉄鏃 簀	集落跡         焼失住居 炭化米			

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第119集

## 向原第1遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書24

2006年 2月20日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 有限会社 いろは企画  
宮崎県宮崎郡清武町正手3丁目19-2  
TEL 0985(85)5889 FAX 0985(85)5889

---